ソラを繋ぐ翼

ホワイト・フラッグ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは異なる翼を繋ぐ物語。

ＩＳとＡＣネクストが存在する世界。

ＩＳは？　ＡＣネクストは？　何のために存在するのか？

作者の汚染された厨二脳から吐き出される物語です。

世界観はＩＳですが、たぶんＡＣＦＡが濃いです。

タグの追加があるかもしれません。ご了承ください。

目次

1．翼の選出 ―― 1
2．転入初日でお勉強しましょう ―― 9
3．ネクストの実演 ―― 21
4．勢力図を説明していたら中国来た ―― 35
5．ロクデナシは空から降ってくる ―― 47
6．突然への対応 ―― 59
7．ＩＳ学園にもあった。アノ部屋 ―― 72
8．二人の憎悪（前編） ―― 93
9．二人の憎悪（後編） ―― 108
10．フランスに泳ぐ者達 ―― 127
11．夜会と出会い ―― 138
12．臨海学校 ―― 148
13．暴走する祝福 ―― 160
14．不穏な初陣 ―― 175
15．君の名は ―― 186
16．復活 ―― 195

1．翼の選出

凹の字に組まれた会議室で老若男女が話合っている。
そこに居る者の大半が頭を抱えて唸っている。
「ハァ……企業連は本気ですか？」
「本気みたいですよ」
「いや彼らの意見はわかるが……もっと、こう……」
「現場を見てほしいですね」
彼ら――アスピナ機関――の職員を悩ませる事案はこれだ。
『日本のＩＳ学園にそちらのリンクスを選出し転入させるように要請する――企業連』
ＩＳとは正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツだが、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用されているのが現状だ。
ＩＳ学園とはＩＳ操縦者育成用の特殊国立高等学校で女子高だった。
ＩＳとは素晴らしい性能を誇るが重大な欠陥がある。女性にしか起動できないのだ。当然、操縦者は女性限定であり、よってこれまでは女子高扱いだったのだ。
そうこれまでは。
昨今世界中で話題になっている『世界初のＩＳを起動させた男』が原因だ。その少年の名を織斑一夏（おりむらいちか）といった。彼は受験の際に志望校の会場と間違いＩＳ学園の入試会場に迷い込み。そこにあったＩＳを起動させたという。
保護や監視の意味をこめて彼はすぐさまＩＳ学園に入学させられた。その織斑一夏の入学により企業連は動いたということだ。
「まさかネクストとＩＳの戦闘データが欲しいのですかね？」
「いいや、資料をよく読んで下さい。『ＩＳとネクストの競技合併が目的で、そのテストケースが欲しい』と、ありますよ」
「大方、これまでのイザコザを少しでも解消しようとしているのでしょう」

リンクスとは人型機動兵器ＡＣネクストを操縦するパイロットのことである。
ＡＣネクストとＩＳは軍事に関して過去にいくつか事件がありＩＳを管理する組織：国際ＩＳ委員会との仲はあまり良好ではない。
企業連とは名前の通りＡＣの開発・販売を行っている企業が結託して組織となったモノ。
そしてアスピナ機関はネクストの中核を担うシステムＡＭＳ（Ａｌｌｅｇｏｒｙ―Ｍａｎｉｐｕｌａｔｅ―Ｓｙｓｔｅｍ）の開発元でありその研究をしている機関である。そのため被験体として適性のある者を集めているので学校のような役回りをしている。
今回、企業連からのオーダーはＩＳで行われている世界大会：モンド・グロッソとネクストによる大会：カラードマッチを合併させる布石らしい。
今までは女性限定のＩＳの世界（技術者などで少数であるが男性もいる）だったが、織斑一夏という一石が投じられて委員会は混乱しており、その混乱に乗じての行動らしい。
交渉の結果、委員会は条件をつけた。それが「ＩＳに関する実験を行うＩＳ学園でテストすること」だった。
企業連には問題があった。彼らが直接管理するリンクスで高校生程の年齢の者が少なく、その一部も遠回しに拒絶の意思でいるのだ。そこで若手のリンクスを抱えるアスピナ機関に話が回った。
「それで、誰にします？　いつまでも愚痴を言ってられません」
「そうですね……まず人数は何人にします？」
「オーダーでは少人数とあります。これは企業連ではなくＩＳ学園からです。まぁ編入の手続きが大変ですからね」
時期にして入学式が終わって少しした頃だ。学園としては迷惑千万だろう。
「では三人程で、テストのパターンを考えれば最低でもそのくらいがいいかと」
「人数は三人、コレに異論は……ないようですね。では肝心の誰にするかです」

「ジェラルド君はどうかね？　彼は成績・人格共に優れている」
「賛成だ」
「同じく」
　真っ先に名前が上がったのはジェラルド・ジェンドリン。彼は厳密に言えばローゼンタール社所属のリンクスだが、アスピナ機関で留学扱いだ。高いＡＭＳ適性と安定した精神を兼ね備えることから、企業にとって最も理想的なリンクスとも言われる。
「だが彼は十六才だ。二年生として転入することになる」
「それが何か？」
「恐らく企業連は今回の特異ケースとの接触を考えているかもしれん」
　特異ケースとは織斑一夏のことだ。ＡＣとは直接関係ないが今後、ＩＳ業界のキーマンになるのは確実だ。それを監視するツテを用意しようと言うのだろう。
「ならばあと二人を一年生……十五才から選べばいい」
「十五歳で選ぶとなると……」
　そこで一同、頭を抱えた。三人いるが、その誰もが問題がある。もっとも、問題が無ければこんなに悩むことがないのだが。
「ならば一つやってみますか？」
　一同はその意見に賛成した。

アスピナ機関屋外訓練アリーナ

　施設で唯一屋外にあり、実機を使うことを許されたアリーナで三機のネクストが飛び回っていた。
　黒黄、赤、青白、の色が空を彩る。
「なんて無茶な戦い方を……」
　赤い機体レイレナード社の［アリーヤ］ベースの［クラースナヤ］を纏う少年、ハリが青白い機体を両手のライフルを撃って追い払おうと

する。
「なんだぁ？　この豆鉄砲は!?　もっと近づかねぇと食らわねぇぞ！」
　青白い機体旧アクアビット社の［ランスタン］ベースの［アルビートル］を纏った少年クリストフはハリに肉薄する。
　彼の機体には左右の背、肩に合計三つの追加整波装置が搭載されており、ＰＡ（プライマル・アーマー）の展開を強化していた。
　ＰＡはネクストに搭載された防御機構で攻撃を減衰させる効果がある。現にハリが撃ったライフル弾は彼に届くころには威力が大幅に殺され、彼の言う通り豆鉄砲だった。
「近づけますか!?　そんな危ない物に!?」
「なっ!?　何が危ないだ！　コジマの洗礼をしてやるってんだ！」
　ハリが恐れる物、それはクリストフの左腕に搭載されたコジマブレード・ＫＢ＿００４だ。名称はブレードとあるが、レンジはゼロ。殴り武器なのだ。その為周りからコジマパンチと言われている。
　零距離武器は総じて威力が高いというモノ。ハリはそれを恐れて安易に攻めれれずにいた。
「なら俺が攻める！」
「おっ、さっすがジョルジュ！　カッコいい～！」
　クリストフがハリに注意がいってるスキにブレードで攻撃したのは黒と黄色のカラーリングが施されたレイレナード社の［アリーヤ］ベースの［ジュスティス］を駆るジョルジュだ。
　クリストフは笑いながらジョルジュのブレード・０２―ＤＲＡＧＯＮＳＬＡＹＥＲをコジマパンチで受ける。ジョルジュのブレードは全ブレードで最短のレンジでありながら威力は抜群のモノ。短いが引っ掻かれたら手痛いのでブレードの名称から［ドラスレ］と呼ばれている。
　コジマパンチとドラスレがせめぎ合う。ジョルジュは少しでも振るのが遅ければ、パンチをボディに貰い一撃で脱落。クリストフも少しでも反応が遅ければ大きなダメージを貰い、ＰＡの再展開に時間がかかっただろう。お互いにギリギリであった。

好機と見たハリはクリストフに接近しライフルを乱射する。近づけば減衰の影響が少ないからだ。
「へっ」
［ランスタン］はＰＡの整波能力に優れているが本体の装甲は薄いためハリの攻撃で機体は大ダメージを受けていたが、ダメージを受けてもクリストフは笑っていた。それを見たジョルジュはクリストフから距離を取ることに全力を尽くす。
その理由は、閃光と共に証明された。
「コジマ！　バンザァァーーーーイィ！」
ＡＡ（アサルトアーマー）、ＰＡを攻撃に転用した全周囲攻撃である。ＰＡを暫く喪失してしまう諸刃の剣だが、その威力は十分以上だ。
「!?」
「ちっ!?　やはり……」
ハリは直前で気付いたが、回避が間に合わず、閃光に飲まれた。その後、戦闘不能判定を受けた［クラースナヤ］が落下する。
回避がギリギリ間に合ったジョルジュは再びドラスレを構える。今の［アルビートル］はＰＡを展開していないので如何なる射撃も通るのだが、できない。
ＡＡの閃光は副次効果として攻撃を受けた敵のカメラに悪影響を及ぼし、一時的にロックオンが不能になる。ロックオンができなければ、システムの偏差射撃補正がかからず命中率が落ちる。
回復速度は頭部パーツのシステムリカバリー次第だ。［アリーヤ］のシステムリカバリーは優秀だが回復など待ってられない。
クリストフが右腕に装備したコジマライフル・ＡＸＩＳをこちらに向けている。コジマライフルはエネルギーをチャージしなければ撃てないが、その威力は下手な機体を一撃で落とす。直撃は避けてもＡＡを食らったのだ。フルチャージでなくてもあんなモノを貰ったら負ける。勝つにはロックの回復を待たずにブレードに賭けるしかない。
「届けーー!!」

「ハッ！　こっちだぁー！」
「なん!?」
　クリストフはコジマライフルのチャージを切ると、コジマパンチを構える。
　両方とも凶悪な武装だが、対応距離が違う。フェイントをかけられた。そう気付いたが、もう近接戦の距離にあり、コジマパンチとドラスレが交差する。左腕に衝撃を感じる。
「あっ!?　ぐぅ……」
「惜しかったな。ジョルジュ」
　判定はクリストフの勝利。
　最後の交差で武装の距離はドラスレが僅かだが勝っていて、あのまま交差すれば先に攻撃を受けるのはクリストフだった。だが、クリストフはジョルジュのボディではなく、左腕にパンチを当てて攻撃を反らしたのだ。その攻撃でジョルジュは敗北したが、クリストフは腕を弾かれて硬直するジョルジュの腹にパンチを当てている。あのまま戦いが続いていたらこの一撃で終了だと言いたいのだろう。
〈ハーイ、模擬戦終了。お疲れ様～。ピットに戻っておいで～〉
　スピーカーから緩い調子で指示が来る。
　ジョルジュ、クリストフ、ハリはピットに帰投する。そこで小柄な体躯で赤毛の職員と他数名の職員が拍手と共に三人を迎え入れる。
「う～ん、良い試合だったわね」
　研究員アンナ、アスピナ機関の若手のリンクスの指導と研究開発を担当している教員だ。
「相変わらず小せえなアンナちゃん」
「コラ、クリストフあんた勝ったからって調子に乗ってんじゃないわよ」
「きょ、今日もお美しいですね。アンナ先生」
「あら、ありがとう。ハリはいい子ね～」
　頭のおかしいクリストフが教師相手に軽口を叩き、アンナを挑発したが、ハリがフォローする。
「でもアンナちゃんは、こんなナリだけど実年齢……」

「ほ～う、何？　それ以上言ってごらんなさい？　どんなことが起きるでしょう？」
「わーー！　待った待った、ジョルジュも黙ってないでクリストフを止めてよ！」
「……何歳だろうとアンナ先生は美しい外見をしている。それが全てだ」
　ジョルジュの一言でアンナが固まる。
「ん～、一言多くない？　ジョルジュ君？」
「大人の女は小さなことに固執しない。前に先生が言っていたはずだ。そんな事よりも俺は結果を聞きたい」
　ジョルジュの現実的な姿勢にアンナは「全くもう」と言いながら今回の模擬戦によって決まった結果を発表する。
「貴方たちの戦いを観ながら教師達で協議した結果。ジョルジュ・サンソン、クリストフ・ローエンの二名をＩＳ学園へ転校させます」
「へッ、コジマの少ないあんな場所に押し込められるなんてな、地獄だぜ」
「安心しろ。お前はどこへ行っても地獄しかない」
　選ばれた二人は決定に嫌そうな顔をしながら渋々という様子だ。ハリは自身の首に付いたチョーカー型コネクタに触れながらアンナに問い詰める。
「僕が選ばれなかった理由はやはりＡＭＳの問題ですか？」
「そうね最初はかなり良かったけど、後半あれではちょっとね」
　ハリのＡＭＳは特異だ。ネクストと高い親和率を叩きだせるが、短時間なのだ。その時間も調子によって変わり三十分の時があれば十五分の時がある。そしてその時間を超えるとリンクが上手くいかず悪ければ適性Ｃ相当にまで落ち込む。
　今回の模擬戦でも前半はジョルジュとクリストフを圧倒していたのだ。それが落ち込み後半は適性の高いクリストフに追いやられてしまったのだ。
「でも、落ち込むことはないわ。彼らがＩＳ学園でムフフな生活を送ってやがる間に限界時間を伸ばせるように訓練しましょう。先生

が特別なじゅ・ぎょ・う、してあげるから」
　アンナは場の雰囲気を和ませるために……いや半分本気で言っている。
「そう言えばあの学園は女ばっかだな」
「おーい！　女がいてもコジマが無くちゃダメなんだよ！」
　ジョルジュとクリストフは再度げんなりする。そしてクリストフは嘆く内容が変わらない。
「まぁ、俺達にとって難しい所だが少し行ってくるだけだ。ハリ、少しの間お別れだな」
「次に会うときにはコジマ兵器を使いこなせるようにしとけよ」
「うん、二人も頑張って。でもクリストフ、コジマは使わないから」
「なんでだよ！」
　こうして交差する翼が選ばれた。

2．転入初日でお勉強しましょう

ＩＳ学園ＩＳの操縦者を育成するこの学園で唯一の男子生徒はウキウキしながら、紙束を段ボールに詰める。
「千冬姉、今日からだったよな新し……」
「織斑先生と呼べ。何度言ったらわかる」
千冬と呼ばれた女教師は男子生徒の頭にプレステ３程の厚さがあるファイルを落とす。
「痛っ!? すいません」
「質問についてだが、今日から三人男の転校生が来る。一人は二年生だが、後の二人はお前と同じ一年生だ。クラス代表になったのだからお前がいろいろ教えてやれ」
「えー俺、リーグマッチの練習とか……」
一夏が渋ると、二度目のプレステもどきのファイルが頭に落ちる。
「馬鹿者。個々人で忙しいこともあるだろうが、代表の役割はしっかり果たせ」
「……はい。でも教師なら教えることが仕事なのじゃ……」
頭をさする一夏に三度目のプレステを落とそうとするが、一夏が身構えたのでやめた。
「教師からも聞かれたことは教えるさ、だが、生徒間で教え合うのも学びであり教育だ。彼らとの交流がお前の実りになることもある。せっかくの機会なのだから存分に学べ」
織斑先生はそう言うと資料室を退室した。一人残された一夏はその言葉に納得すると。
「そうだな。友達になれるチャンスだ！ どんな奴が来るかな～？」

一年一組ＳＨＲ（ショートホームルーム）
「えーと、では以前お知らせしていた転入生をご紹介します」
教壇に立つのは一年一組副担任の山田真耶（やまだまや）だ。背が低いが胸がかなりデカい。彼女の発言にクラスが騒めく。
「どうぞ。入って来てください」

「了解」
　山田先生の案内を受けて少年が入室する。容姿は身長１７０ｃｍ程、銀髪紅眼。入室すると彼は挨拶をする。
「初めまして。ジョルジュ・サンソンです。アスピナ機関から転入？　になるのかな？　皆さんとこれから学ぶことになりました。よろしくお願いします」
　教室が黄色い声で満たされる。
「銀髪の美形！」
「カッコいい！」
「でも初々しい挨拶で可愛さもある！」
　ジョルジュは十代女子たちの勢いに圧倒される。あと初々しいも何も皆まだ一年生なのだが。
「騒ぐな、転入生に何か質問のある奴は手を上げてからやれ」
　アレ？　質問タイム有？　ジョルジュは戸惑いながらも質問に答える。
「ハイ！　好きな食べ物はなんですか？」
「アルゼブラレーションのタイプ３―８です。タイプ３はゼリー状なので体調が悪い時でも食べやすく、３―８は適度に甘いので」
　ここで教室中が「うん？」という雰囲気になった。
「ハ、ハイ！　趣味はなんですか？」
「トランプゲームです。一番得意なのはポーカーです」
　そこで廊下から大きな声が響く。
「ジョルジューー！」
「えっ!?　何？」
「男の声だよね？」
「と言うことは、もう一人の一年の転校生かな？」
　教室中が騒めく。廊下から聞こえる声が近づいてくる。
「織斑先生少し失礼します」
「何をする気だ？」
「連れの騒ぎを収めます。単純ですが少々厄介なのでお任せ下さい」
　ジョルジュは織斑先生に許可をとりながら扉に近づく。すると、扉

が勢いよく開き金髪長身の男が飛び込んで来た。
「この学園は最悪だーー！　コジマに興味のある女が一人もいなーーい!!」
「ハッ！」
「ゴブラぁ!?」
　ジョルジュは男が教室に入って来た瞬間に後ろ回し蹴りをかました。蹴りは男の鳩尾に吸い込まれ、男は仰け反る。更にジョルジュは先ほど蹴った足を軸足にしてハイキックを顔面に叩き込む。
　一夏を含む前列に座る生徒には廊下まで押し出された男がどうなったか見える。
「ウソ!?　あんなの食らって立っている!?」
　そう、ノーガードで蹴りを二発急所に貰っても金髪長身の男は立っていた。ジョルジュは廊下まで押し出した男に助走をつけてドロップキックをかます。流石に勢いと体重が乗った攻撃に男は倒れたが、すぐに起き上がりジョルジュの腰に抱き付く。
「う……うう、コジマの、コジマの理解者が～」
「ウルセエ」
　ジョルジュは男の制服のボタンを乱暴に外し内ポケットに手を突っ込む。
「アンッ」
「気持ちワリィ声だしてんじゃねえ！　お、やっぱりあったな」
　ジョルジュは男の内ポケットからキャンディーを取り出し、包装をとると緑色の本体が露わになる。一夏は始めて見るそのキャンディーがなんだかヤバいと直感した。キャンディーが男の口に突っ込まれる。すると騒がしい男は大人しくなった。白目を剥いているが……。
「は、はぁ……コジマ、コジマ、コジマ」
「クリストフは確か三組だったな？　行くぞ。全くハリがいないと面倒だな」
　ジョルジュはクリストフの金髪を掴むと引きづりながら三組の教室に向かった。

しばらくして三組の人達に謝罪してジョルジュは戻って来たが、騒ぎが聞こえていた人――一年生全員――の共通認識が出来上がった。
こいつらはまともじゃない。変態だ。

ＳＨＲが終わり先ほど騒いでいた男が一年一組に謝罪しに来た。
「自己紹介するぜ！　ジョルジュと同じアスピナ機関から来た。クリストフ・ローエンだ！　いや～スマン、スマン。予想以上にコジマが無くてショックだったんだ。許して」
「二度とあんな騒ぎを起こすな。次は膝を踏み抜く」
「やめろよ～一度キリの人生で四回も松葉杖生活なんて嫌だぜ」
一夏達は目の前にいる変態に対してどう対応していいか、わからないでいた。あとどうやら過去に膝を三回踏み抜かれたらしい。
「お……おう、織斑一夏だよろしく。よかったぜ、ずっと女だらけの空間にいるのは正直きつかったぜ」
「……そうだな。初めての体験だが苦しいな「何言ってんだ！　コジマが無いことが」お前は黙れ」
見た目だけはいいクリストフが変態すぎて周囲はそのギャップで引いている。
「コイツのことはあまり気にするな。口を開けばコジマ、コジマと五月蠅いのでな」
「そ、そうですか……私はセシリア・オルコットと申します。い、一応社交辞令としてこう言わせて貰いますわ、よろしくお願いします」
金髪を縦ロールさせた少女セシリアが挨拶してくれる。やはりクリストフの変態ぶりに引いているが挨拶の礼儀を通してくれる。二人は淑女という印象を抱いた。
「その先ほどから仰るコジマとはもしかしてコジマ粒子の事でしょうか？」
「そうだぜ。おお！　興味ありか!?」
「い……いえ。その、人名ではないかと思ったのですが、そうですか……やはり粒子の……はぁ」
「そういやコジマってなんだよ？　すごいのか？」

「一夏！　そんなことも知らないのか？」
今度は胸の大きいポニーテールの少女が一夏の質問に呆れている。
「ああ、すまない。私は篠ノ乃（しのの　ほうき）という挨拶が遅れてすまない」
急に会話に入ったことを謝罪しながら名を教えてくれた。
「なんだよ箒。俺がおかしいのか？」
「コジマ粒子を知らないとは無知すぎるぞ」
「じゃあ教えてくれよ」
「転入生のこともあって追加カリキュラムで次の授業はコジマとネクストについてだ。ほら、そろそろ授業が始まる席につけ」
箒が時計を指さすと授業開始一分前だ。全員慌てて席につく。まもなく山田先生が授業を始めた。
「えーと、今回のＩＳ委員会と企業連のテストの事もありますから、ＩＳとＡＣネクストの歴史についておさらいしましょう。まぁ浅い歴史ですがね」
白騎士事件というＩＳの事件があたった。
それは篠ノ之束（しのの　たばね）博士がＩＳを発表して一か月後に起きた。
日本を射程圏内とするミサイルが配備された軍事基地のシステムが一斉にハッキングされ、二千発以上のミサイルが日本に向けて発射された。
世界中の人々が日本が焦土となると予想したが打てる手は少なく誰もが絶望する中、一機のＩＳ［白騎士］が現れた。搭乗者不明のＩＳ［白騎士］がミサイルの大半を迎撃、それに留まらず白騎士を調査・撃破しようとした各国の戦闘部隊や企業のノーマルが撃退された事件。
この事件によりＩＳは驚異的な戦闘力を持ち、ＡＣ（ノーマル）を上回ると証明された。
続いて白い閃光事変が起きた。
白騎士事件によりＩＳの有用性が証明されてから各国が女性優遇制度をとろうとする動きが起きた。ＩＳは女性にしか動かせないからだ。
それに一部の企業は反発し、国家解体を宣言。宣言をした企業はそ

れまで研究段階であり秘匿していたＡＣネクストを発表。それに対抗するように他の企業も自社のネクストを発表。
ネクストの戦闘力は圧倒的でＩＳに匹敵した。そうなるとこれまでのＡＣをノーマルと呼ぶのも当然の流れだった。
過激な企業　対　国家と反発しなかった企業との戦争が始まる。これを国家解体戦争という。
しかし開戦から一か月でネクストが大量に放出するコジマ粒子に汚染効果が確認され始めた。大地から緑が失われ、人に限らず牛や豚など生物の細胞が老化するのだ。その二日後に所属不明の白い機体［ホワイト・グリント］（名前はパーツに書かれていた）が国家・反乱に関わらず両陣営のネクストと基地を襲撃する事態が起きた。
そこからはリンクス戦争と言う。
［ホワイト・グリント］は圧倒的な戦闘力で両陣営のリンクスを倒していった。
これに対し共倒れを危惧した企業は講和により国家解体戦争を終戦させ、［ホワイト・グリント］を斃す為に結託。
激闘の末に［ホワイト・グリント］を撃破するが対象は海中に没し回収は叶わなかった。
以上の事柄をまとめて白い閃光事変という。
その後、ＩＳは国際ＩＳ委員会が管理することになった。国家のＩＳ保有数や動きなどを監視するのが主な役割だ。これはＩＳ条約に基づいて設置された国際機関だ。
ＡＣネクストは講和した企業が「円滑な販売と技術協力をするため」ということで連合を組んだ。その傘下としてリンクス管理機構カラードを設置しネクストの操縦者たるリンクスと企業が販売するネクストを管理している。また、ＩＳでいうモンド・グロッソにあたるカラードマッチ団体・個人を運営してもいる。
そしてコジマ粒子についてだが、ＡＣネクスト開発の第一人者イェルネフェルト教授が所属するアナトリア機関で研究された。物としては青緑色に発光する粒子だ。これはＩＳが発表される七年前に発

見された新物質で、コジマ粒子を軍事転用することでＡＣネクストが生まれ、クイックブースト、オーバードブースト、プライマルアーマー、などこれまでのＡＣノーマルにはできない挙動を可能とした。
国家解体戦争時に明らかになったが有害物質であり、環境汚染や人体の老化などの影響がある。その為に一般の人からすると危険な物質という認識が強い。
幸いなことに第二回モンドグロッソと同じころにイエルネフェルト教授により無害化技術が確立。ネクストに無害化機構を搭載するのは勿論、既に地球を汚染しているコジマも大規模除染施設アルテリアにより無害化が進められている。
その代償に白い閃光事変のころよりネクストの出力が落ちてしまった。ネクストやコジマ粒子に良い印象がないのはそれだけではない。
ネクストを操縦するのに必須な［ＡＭＳ］という機構があり、脊髄や延髄を経て脳とＡＣの統合制御体が直接データをやりとりをする生体制御システムだ。ＩＳならば体を動かす際に筋肉から出る電気信号などで操縦するのだが、これには何の制約も無い。精々専用のＩＳスーツを着た方が反応が良くなるとかだ。
だがＡＭＳには制約がある。手術が必要なのだ。成功率は低くはないが、体の中に（首に）機械を組み込むのだ。改造人間という言葉に対して良い感情を持つ者は少ないだろう。
更に追い打ちをかけるようだが、ＡＭＳ手術をしたところでネクストを自在に動かせるわけではない。脳と統合制御体との間でやり取りするデータを情報として認識するのは才能による所が大きく、これをＡＭＳ適性という。この才能は先天性でこの値はＤ～ＳまであるがＩＳ適性よりもシビアな適性なのだ。
ＩＳではエリート中のエリートを国家代表候補生にするが、ネクストではまともに動かせる者をエリートと言う。この差から世界最強の兵器の双璧と言われるＩＳとネクストではＩＳに軍配が上がる。
今の風潮が、やや女尊男卑に傾いているのはそれが原因だ。
ＩＳとネクストを比べるとこうなる。

・数
ＩＳは心臓となるコアが開発者である束博士にしか開発できないが、束博士がある時を境に製造を止めてしまったので世界中での絶対数が４６７機しかない。
ネクストは企業連が開発・販売しているので絶対数は上回っている。
・制約
ＩＳは女性であれば起動・操縦が可能。
ネクストはＡＭＳ適性があれば男女関係なく扱えるが、希少でピンキリな才能が必要なうえに手術が必要。
なんとも難しいく馬鹿らしい世の中だ。ジョルジュは欠伸を噛み殺しながらそんな感想を抱く。女尊男卑なこの世界で仮に男性と女性で戦ったらなんて例え話がある。

男性の戦力は数百人のまともにネクストを扱える者達。
女性の戦力は４６７機あるＩＳとネクストを扱える女性。

戦えば三か月で男性が負けるという。
成程、戦力差がそれならたぶん男は負けるかもしれない。だが、それをＩＳに乗らない女たちが言っているのだ。女性優遇ぎみな政策から調子に乗って道行く見ず知らずの男を顎で使う女性がいるという。そしてそんな女性たちに何も言えない男たちがいるとか、つくづく馬鹿らしい。狭い世界から出てきてこれではガッカリもいいところだ。
つまらない学園生活になると思っていたジョルジュだが、今日一日過ごしていて大きな学びがあった。クラスの女子達だ。全員とはいかないようだが、一夏を含め自分たち男を邪険に扱わないのだ。ＩＳ学園はＩＳ業界の中心地だ。だから女性とＩＳの負の面が強い場所だと思っていたが、皆戸惑いながらであるが自分達と近づこうとしてくれる。
その事が嬉しかった。

一日の授業が終わり、案内用紙に書いてある寮に向かった。アスピナ機関の宿舎と比べるとなんと違うことか、アスピナ機関は一つの部屋に十人くらいで使う。一度だけ乗ったことがあるが、フェリーの二等室のような場所だ。だがＩＳ学園の寮は実験の都合でオーメル・サイエンス社に行ったとき泊まったホテルのようだ。
「ここか？」
紙に書かれた部屋の前に立ち、確認する。扉を開けると間違いなくここだと分かった。
「ジョ～ルジュ！　すげえよ！　ベットがフカフカだぜ！」
「ウルセエ」
先に来ていたクリストフがはしゃいでいた。あまりにも五月蠅いので彼が昼にも咥えていたトーラス社製［ソルディキャンディー］を殴る。喉に届いたのか、クリストフはえずいた。ザマァ。
荷物を整理していると、扉の向こうが騒がしくなった。男が扉を開いて入ってくる。
「じゃあ後でね。案内ありがとう」
「いいえ、とんでもない！」
「それでは食堂で！」
「食堂までの……その、案内は……」
「大丈夫だよ途中で見つけたから」
「そ、それでは失礼します！」
扉が閉まり女子達から遮断されると、男はこちらを向いた。
「やぁ、君たち。一日お疲れ様」
「お疲れ様です。ジェラルド先輩」
「お疲れっす！　先輩、相変わらず女の子にモテますね」
「よしてくれ、ここの女子はどうやら男の接触する機会が少なくて飢えているようだ」
そう言いながら疲れた様子でベットに座るこの男はジェラルド・ジェンドリン。ローゼンタール社所属でアスピナ機関では留学扱いで実験に参加していたが、本社から許可を得てジョルジュ達とＩＳ学

園に来た一年先輩だ。今回の転校生候補に真っ先に名が上がるアスピナ機関ひいては企業連が認める最も理想的なリンクスだ。
　彼はクリストフと違い、ちゃんとしたイケメンで貴族だ。町を歩いていると女性に声をかけられるのを遠目に見ていたことがよくある。ちなみにクリストフは声をかけられても二、三言でさよならを言われる。
「この状況をジュリアス先輩が知ったらどうなりますかね？」
「やめてくれ彼女とはそんなんじゃ……」
「じゃあ、そうメールしましたよっと」
「な!?　クリストフ!?」
　Ｐｒｒ……Ｐｒｒ♪
　ジェラルドの携帯が鳴り出す。これは電話だ。
「も、もしもし？」
『女性に囲まれた学園でよろしくやっているようだな？　うん？
ジェラルド・ジェンドリン』
「ジュリアス……クリストフからどんなメールを受け取ったんだ？」
『〈ジェラルド先輩が女の子を持ちお帰りしかけたよ～（赤面）〉だとさ』
「違う！　確かに言い寄る女性はいたが、全て断っている」
『初日で複数人の女から言い寄られるとは大したモンだな色男』
　ジェラルドが話しているのはアスピナ機関にいるジュリアス・エメリーだ。彼女はアスピナ機関でも一、二を争う優秀なリンクスでジェラルドとは噂がある女性だ。本人たちはライバルと言い合っているが周りから見ればとてもそうには見えない。
「クリストフ、お前ひでえな」
「ジュリアス先輩は暫くジェラルド先輩と会えないだろ？　だから電話する切っ掛けくらい作ってやらないとな」
「気遣いは良いが、手段がな……」
　先輩思いなのか状況を楽しみたいのかよくわからんが、ジェラルドの疲労は今日一日で相当だろう。クリストフと話していると、先輩たちも話をつけたようだ。

「わかったよ。時々連絡入れるから……ああ、お休み。クリストフ貴様っ！」
「そういや先輩、この部屋三人部屋みたいですね？」
「余計な……そう言えばそうだな。ベットは二つなのに三人だと？お前達、間違えていないか？」
「いいえ、この部屋ですよ」
「同じく～」
　ジョルジュとクリストフは案内用紙を見せ合って確認する。ジェラルドも間違いなくこの部屋だ。つまり、学園の間違い？　そう考えた時にノックが転がる。
「こんばんわ～、山田です」
「どうなっているんですか山田先生？」
「部屋割りについてですが、察しているかもしれませんが三人で一部屋使ってください」
　大きな胸の前で手を合わせてお願いしてくる山田先生曰く、転入まではなんとか手続きできたが、部屋割の調整がうまくいかないようだ。ジェラルドが質問する。
「……かまいませんが、寝具は？」
「コレを持ってきました」
　そう言って後ろの台車から厚い布を降ろす。
「外国の人には使いづらいかもしれませんが、日本の寝具[布団]です」
　山田先生は部屋の隅にその布団を敷いてくれる。どうやら二枚の布の間に入って寝るようだ。
「本当に申し訳ありませんが、暫くコレで我慢してください」
「わかりましたありがとうございます」
　山田先生が退出した後にジェラルドは二人に聞く。
「誰がコイツを使う？」
「じゃあ僕が使います」
　ジョルジュが立候補することで即決した。
「いいのか？　疲れているだろうしベットの方が……」
「俺達は雨降るジャングルで寝ていたこともあるんで問題ないッス」

「ええ、アレと比べたら敷物があるだけ上等ですよ。それに日本の寝具とは面白そうです」
そう言ってジョルジュは布団に自分の荷物を置く。
「寝床も決まりましたからメシ行きましょう」
「あ、ああ」
ジェラルドは先ほどのクリストフの発言に驚きながらも、後輩達と食堂に向かった。

3．ネクストの実演

「本日は追加カリキュラムとして午前は各クラスでＡＣネクストの座学、午後は全クラス合同訓練を行う」

ジョルジュ達が転入した次の日のことだ。織斑先生がＳＨＲでこう切り出した。何でも今回のＡＣとＩＳの競技合併実験をするにあたってＩＳ学園の生徒たちにＡＣについて理解させることを目的とするらしい。彼女たちはこれまでＩＳの勉強をしてきたが、ＡＣについては疎いようだ。

「まずＡＣは主力兵器に遊撃戦適正を求めた結果、人型汎用兵器として生まれた。だが白い閃光事変でこれまでのＡＣを凌駕する性能を持った新たなＡＣ、ＡＣネクストが世に出た。これまでは昨日の授業でやったな」

今日の授業は山田先生ではなく織斑先生が講義している。彼女の方がネクストに詳しいのだろうか？

「ネクストはこれまでのＡＣを「ノーマル」と区別させる程の性能差というが、具体的にはＱＢ（クイックブースト）による瞬間的機動力や粒子装甲ＰＡ（プライマル・アーマー）による攻撃の無力化・軽減が理由だ」

このあたりはＩＳと似通った機構なので生徒たちは理解しているようだ。ＱＢはコジマ粒子をプラズマ化させ瞬間的な推力でダッシュさせる機構で、ＩＳで言う瞬間加速（イグニッション・ブースト）と似ている。

そしてＰＡは絶対防御に類似している。

ＩＳはシールドバリアというエネルギー装甲を纏っている。そのシールドバリアが破壊・突破された場合は絶対防御という操縦者の死亡を防ぐ正に絶対の防壁があらゆる攻撃を受け止める。発動に大量のシールドエネルギー（試合の勝敗を決定する数値）を消費してしまうが、その防御機構はすばらしい。

ネクストの防御も二段階ある。一段目がＰＡ、これはコジマ粒子を機体周辺に安定的に還流させることで粒子による防御膜ができる。攻撃を受けると減衰してしまうがジェネレーターから生成されるコ

ジマ粒子の供給により再展開が可能である。だがＰＡは貫通力に優れるスナイパーライフルやレーザー兵器には効果が薄く、マシンガンなど小規模な火器による連続した弾幕や、爆風・破片などは容易に軽減可能であるものの、ＰＡが減衰してしまいやすいという弱点がある。

そこで二段目の防御ＡＰ（アーマード・ポイント）がある。ＰＡが通してしまった攻撃から操縦者を守る防御機構でこれがなくなると戦闘不能になるというモノだ。

「そんなネクストを開発したのはアクチュエータ複雑系を担当したアルドラ社、実用燃料電池を担当したレイレナード社、コジマ技術を担当した旧アクアビット社、ＡＭＳ（アレゴリーマニュピレイトシステム）を担当したアスピナ機関、そしてそれらを統括したのがアナトリア機関のイェルネフェルト教授だ。かの教授はコジマ粒子の無害化を成功するなどＡＣ業界の第一人者として知られている」

織斑先生が言う通りイェルネフェルト教授はネクスト・ノーマルに関わらずＡＣを扱う者は知らぬ者などいない偉大な教授である。ちなみにコジマ粒子は［コジマ］という教授の助手が生成方法を発見したのでその助手の名前がつけられている。

「であるから……」

そこからはアクチュエータやＡＭＳなどジョルジュはすでに知っているネクストの細かい機構を講釈し始めた。クラスの女子達は眉をしかめたりしながらもマジメにノートを取っている。

窓際の一番後ろという学生に人気の高い席にいるジョルジュは欠伸を噛み殺しながらも、教材を読み返して退屈を凌ぐ。ページをめくっていると教材に載せられた一枚の写真を目に止める。懐かしい人物が写っていたからだ。

（ん？　フィオナ姉さん）

『フィオナ・イェルネフェルト。イェルネフェルト教授の長女にして教授の助手。研究分野はＡＭＳによる脳や精神への負担軽減……』

（あの姉さん、こんな研究をしているのか……理由は俺達か……）

ジョルジュは首に掛かっているチョーカー型ＡＭＳコネクタを触

りながら、感慨に更ける。そこで何かが破裂するような音が鳴り響いた。音がした前列を見れば案の定、居眠りしていた一夏が織斑先生の出席簿を受けているところだった。

「ＩＳのこともワケが分からないのにＡＣのことも勉強するとか大変だぜ」

「……そうか」

昼休みの食堂で一夏は和食セットを食べながらぼやく。ジョルジュはカレーを食べながら相槌を打つ。同じ男だからと引っ張られたが一夏の周りには女子が多く居心地が悪い食事をしている。

「織斑先生の授業で居眠りする奴が悪い」

同席している箒はもっともな意見を述べる。

「しかし、ＡＣの機体構成なんて学んで役立つのでしょうか？」

ジョルジュはセシリアの意見に同意する。自分が既に知っている事だからというわけではなく。ここはあくまでＩＳ学園でＩＳの操縦者を育成するところだ。途中で技術者を志す者もいるかもしれないが、結局はＩＳの道に行くのだ。ＡＣの構成を聞かせたところでどうなる？

「お嬢さん、先を見据えて考えてごらん」

「だ、誰です!?」

「これは失礼、初めまして二年生のジェラルド・ジェンドリンだ。そちらのお嬢さん隣いいかな？」

「あ……はい！」

セシリアの意見に横から答えたのはジョルジュ達の先輩、ジェラルドだ。クラスメイトの相川清香（あいかわきよか）に断りを入れてジョルジュの向かいの席に座る。相川はジェラルドの整った容姿をまじまじと見ている。

「ジェラルド先輩、先とはこの実験が上手くいった後のことですか？」

「そうだな。今はＩＳ学園に我々だけが送り込まれている状況だが、本格的にＡＣネクストとＩＳの競技が合併したらどうだろう？　相手の使う機体について知らなくては戦いようがないんじゃないか？」

そう考えると午前の授業も納得がいく。いざ合併競技が開催され

ても違いのある機体を扱うのだから、細かい戦術やチームワークを考える上で重要なことだ。午前の授業は少し難しかったが相手を理解することから異文化交流が始まるのと同じ？　なのだろうか？
「なるほど……申し遅れました。私はイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットと申します。ジェラルド先輩はどうしてここに？」
「ああ、他の男達に用があってね」
「？」
　まぁこの人が一年生に用事があるとしたら自分たちがここに飛ばされる理由になった織斑一夏か、アスピナ機関からの後輩であるジョルジュとクリストフだろう。
「織斑一夏君だね？　君には挨拶をしておこうと思ってね」
「あ、これはご丁寧にどうも」
　一夏は背筋を正して会釈する。その一夏の態度にジェラルドは苦笑いしながら右手を差し出す。
「硬くならなくてもいいよ。学園内で数少ない男なんだから仲良くしよう」
「は、はい！　ありがとうございます」
「キターー!!」
「イケメン同士の握手！」
「貴族と平民で身分が違う少年達の……」
　紳士的なジェラルドの笑顔に一夏は感激して右手を握り握手する。遠巻きに様子を見ていた一部の女子生徒がなにやら寒気がするオーラを出しているのでジョルジュは慌ててジェラルドに質問する。
「そ、それで、僕らにはどんな用件ですか？」
「ん？　ああ、午後からネクスト同士の対戦をするだろ？　その激励だ」
　そう、午後の合同訓練では実際にネクストの動き・戦いを見せようというのだ。当然、戦うのはジョルジュとクリストフだ。この試合は撮影されて二・三年生向けに参考映像として記録される。
「後で観るから無様な試合をするなよ」
「勿論、負ける気はありませんよ」

「ところでクリストフは？」
「アイツは部屋に戻ってソルディキャンディーを食ってます」
「ああ……気合いを入れているのか」
　何故かソルディキャンディーを食った後のクリストフはあらゆるパラメーターが上昇する。体調は勿論だがＡＭＳの調子も良くなる。あんな不味いキャンディーを食ってどうして調子がよくなるかわからない。
「じゃあ、用件も終わったから失礼するよ」
　ジェラルドはそう言って席を立った。それまで顔を赤くして黙っていた相川がジョルジュに向き直り真剣な目つきで申し出た。
「あの先輩が好きなこと教えて！」
　ここにクリストフがいなくて良かった。いたらジュリアスに余計なメールを送ってジェラルドを困らせただろう。相川には適当にジェラルドの好きなレーションを教えておいた。

　昼休みが終わり。一年生は全員グランドに集合させられた。
　後でＩＳを動かすのだろうか？　全員がＩＳスーツを着用し第二世代型ＩＳ［打鉄］が三機置いてある。ＩＳスーツは水着のような形状なのでスタイルの良い女子が着ると目のやり場に困る。その中でも特にグラマラスな外見をした女子がジョルジュに近づいてくる。
「ジョルジョルのスーツって～ゴッツイね～」
「……なんだその呼び方は？」
「ジョルジュだから～ジョルジョル～」
「……」
　確かこの女子は同じ一組で布仏本音（のほほとけほんね）といったか？　間延びした口調で常に眠たそうにしているせいか、のほほんとした雰囲気をしている。一夏も「のほほんさん」と呼ぶくらいだ。そののほほんさんはジョルジュのスーツが気になるようで、肩や腹をぺちぺち触ってくる。周りの女子も気にしているようなので答えておく。
「……対Ｇ・防弾を考慮された特殊スーツだからな、ネクストはそこまで万能じゃない」

ネクストの装甲が多少は人体を保護するとしても、備えたことに越したことはない。ＩＳもＡＣも軍事転用されているのだから搭乗機体が破損しても戦えるようにスーツには拳銃（勿論今は所持していない）が装備できるようにも作られている。のほほんさんの手を払っているとジャージ姿の織斑先生が現れた。

「これよりネクスト同士の対戦を見てもらう。サンソン、ローエン、機体を運ばせている。準備しろ」

「了解」

二台のＡＣ運搬用のトラックがコンテナを運んで来る。女子達は皆息を飲む。ＩＳとは違い少し無骨な機体が開いたコンテナの中に待機していた。

二人はそれぞれの愛機に近づきそばにある作業用パネルをコントロールしてコアパーツの装甲を展開させる。開いたコアパーツにに体を入れ、足をレッグパーツに突っ込む。ヘッドパーツから伸びるＡＭＳケーブルを自身のコネクタに接続する。アームパーツに手を入れたら後はＡＭＳ経由でコンテナに付いている作業用アームでヘッドパーツを被り、コアパーツを閉じる。

「ＡＭＳ接続良好。システム通常モードで起動」

ジョルジュは声に出して自機の調子を確認する。いつもの癖なのだ。通常モードで起動するとジェネレーターが起動しコジマ粒子を生成する。

「ジェネレーター起動確認。無害化装置も正常に機能している」

ＡＭＳから送られてくるコジマ汚染測定数値は無害を知らせている。無害化装置が正常に起動していなければ直ちに使用を停止しなければならないので、しっかり確認する。

「粒子放出……ＰＡ展開完了」

ネクストの大事な防御手段が構築できたので作業用アームを動かしてマシンガンを持ってこさせる。右手でマシンガンを装備すると全体の武装を確認する。

Ｒ―ＡＲＭ　０１―ＨＩＴＭＡＮ（マシンガン）（レイレナード）
Ｌ―ＡＲＭ　０２―ＤＲＡＧＯＮＳＬＡＹＥＲ（レーザーブレード）（レイレナード）

R―BACK　無
L―BACK　TRESOR（プラズマキャノン（旧アクアビット））
SHOULDER　051ANAM（フレア（BFF））
問題はない。
「拘束を解除……出撃」
AMS経由で作業用コンテナのロックを外し、数歩歩いてブースターを噴射させる。隣を見ればクリストフも出撃してくる。
R―ARM　AXIS（コジマライフル（旧アクアビット））
L―ARM　KB　O004（コジマブレード（オーメル））
R―BACK　JADORE（追加整波装置（旧アクアビット））
L―BACK　JADORE（追加整波装置（旧アクアビット））
SHOULDER　EUPHORIA（追加整波装置（旧アクアビット））
見事にコジマ尽くしだ。
「準備完了だ」
「二人の胸のパーツが似ているけど……どうしてだ？」
初めて目の前で動いているネクストを見て女子達はざわついているが、一夏は機体の特徴に疑問を持ったようだ。
「俺の機体は旧アクアビット社の［ランスタン］がベースになっているんだが、［ランスタン］のコアパーツはレイレナード社の［アリーヤ］を流用しているんだ。そしてジョルジュは［アリーヤ］ベースの機体を使っているから同じなんだぜ」
一夏の質問にはクリストフが答えている。
「右手の銃はわかるんだが、二人の左手に付いてるのはなんだ？」
「わかりにくいと思うが近接武装だ。俺のはレーザーブレードのドラスレと言って「俺のはコジマパンチってやつで素晴らしきコジマ兵装だ！」……おい止めろ」
いかん。コジマの話になると変態が本領を発揮する。どうにかして止めなければ……。
「へ……へー、俺の専用IS［白式（びゃくしき）］は剣一本しかないから戦い方を参考にしてもいいか？」
「ああ！　勿論いいぞ！　俺の機体は近接戦闘が主体だから存分に見

ておけ！」
「二人共！　準備ができたならさっさと配置に着け！　始めるぞ」
　よし！　ナイス織斑姉弟。クリストフが水を差されて残念そうな顔をしているが、このまま放置したら午後の授業中ずっとコジマの話になるところだった。
「配置に着きました」
「ジョルジョルに同じく」
「お前っ！　聞いていたな!?」
「静かにしろ！　それではネクストによる模擬戦を行う。合図を出すからそれに合わせて始めろ」
　あの野郎、のほほんさんが付けた変なあだ名を覚えやがった。そんなクリストフがオープンチャンネルで通信してきた。
「一夏のオーダーだ。開始と同時に格闘勝負と行こうか？　ジョルジョル」
「……ああいいぜ。どうせ勝つのは俺だ。システム戦闘モード」
　コジマの演説をしながらもクリストフは周りの声を聞いているようだ。耳ざといヤツめ。通常モードはジェネレーターと各種ブースターの起動、そしてＰＡの展開だけだ。戦闘モードはその名の通り、装備の安全装置を解除して戦闘ができるようにするモードだ。
「ジョルジュ・サンソン、［ジュスティス］潰すぞ！」
「クリストフ・ローエン、［アルビートル］コジマを振り撒く！」
　開始のブザーが鳴り響くと二人は同時に動いた。
「ノーチャーーーージ！　コジマーーー！」
「シュート!!」
「おい！　さっきの格闘宣言はなんだ!?」
　一夏が驚くのも無理はない。クリストフはコジマライフルをノーチャージで、ジョルジュはプラズマキャノンを発射したからだ。お互いにやることは読めていたようで両者共に回避した。
「不意を突けると思ったか!?」
「いーや、どっちでも良かった」
　クリストフは本当にどっちでも良かったのだろう。当たっても

ノーチャージのコジマライフルは威力が低い。それでもＰＡの貫通はするので当たったらラッキー程度だ。ジョルジュはマシンガンを乱射しながら接近する。
「クッソ、乱れないな」
　マシンガンの弾はＰＡに減衰されてしまいクリストフへのダメージは少ない。だがマシンガンは元から威力が低いのでダメージソースとしては期待していない。ネクスト戦においてマシンガンの役割はＰＡのコジマ粒子をかく乱してＰＡの展開を妨害すること。要するに防御を剥がすことを目的としている。
　アルビートルがベースにしているランスタンという機体はＰＡ整波能力が高いことが有名だ。そんな機体にクリストフは三台の追加整波装置を搭載していて容易にＰＡが剥がれないようにしている。
「しかも……当たらねぇ!?」
「どんどん緑がっ！　コジマが蓄えられてー!?」
　貫通性能がありＰＡに対して有効なプラズマキャノンを撃っているが、クリストフは距離を離しながら避けていく。その間も右手のコジマライフルはチャージされ、いつ撃たれるかわからないプレッシャーを与えてくる。
「フルチャーーーージ！　コジマーーー!!」
「うおおお!?」
　危なかった。こちらのプラズマキャノンが出す閃光に紛れながら撃ってくるとは、もう少し間合いが近ければ終わっていた。そんなやり取りが数回繰り返される。
「じゃあ、そろそろご希望に答えてやるか」
「それしか無いんだろうが？　来いよ。コジマの洗礼をしてやる」
「ぶった切るッ！」
　ジョルジュは決意を固めて左腕のドラスレを展開する。ジュスティスの本来の戦いは、このドラスレを中心に相手を斬り伏せるのが常道でジョルジュの得意戦法でもある。できれば相手より豊富な火器を用いて安全に戦いたかったが、プラズマキャノンの残弾数が乏しくなってきた為、方針を変えねばならない。

「セイッ！」
「シッ！」
　ドラスレの斬撃をコジマパンチで受けられる。コジマパンチは粒子を纏ってドラスレのレーザーに拮抗してくる。右から、左から、上から、アルビートルを切りつけんと剣を振るが、その全てを対応される。
「!?」
「ホラ！」
「チィッ」
　近距離武器の連撃中もチャージされていたコジマライフルを向けられると、おもわず回避距離を取る為に退いてしまう。そうやって退いたジョルジュにクリストフが逆に距離を詰めてコジマパンチで殴りかかる。凌ぐことができたが、まともに食らったら一撃必殺。コイツの武器はどちらも凶悪だ。
「オイオイ？　ワン・オン・ワン（一対一）でお前が負けてちゃカッコつかねぇよ」
「ウルセエ」
　クリストフの言う通りだ。ジュスティスのようなブレード装備の近接戦闘型機体は一対一の時にその真価を発揮する。対してアルビートルは本来、集団戦でこそ真価を発揮する機体だ。チーム戦では味方がいて敵の注意を引いてくれる。その間にコジマライフルをチャージし不意を突いて敵を戦闘不能するのが役割だ。
　つまり機体コンセプトではこちらが勝っているべきなのだ。
「……」
「おおっと!?　退くのか？　別にいいぜ、どうせ何もできやしない」
　ジョルジュは挑発に乗らず、距離を取ってマシンガンで攻撃する。相変わらずアルビートルのＰＡは堅牢で乱れない。プラズマキャノンを撃つがクリストフは堅実に回避する。
「ここなら！」
「当たらねぇ、フォー!!」
「ぬっ!?　おお!!」

またしてもプラズマの閃光に紛れて撃たれたが、ＱＢが間に合い回避に成功。
アルビートルの武装はチャージしないと撃てず単発のコジマライフル。近接武器コジマパンチの二つだけ。クリストフは攻撃せず機動するだけなので、回避に専念できる。そして遂にジュスティスのプラズマキャノンが尽きた。
「レフトバック残弾ゼロ、パージ」
背部武装のロックを外し、無用の長物となったプラズマキャノンを投棄する。パージすることで機体が軽くなり僅かであるが軽快に動けるようになった。武装がマシンガンのみとなったが、機動力を活かしてクリストフの周囲を飛び回り乱射するがやはり効果が薄い。その間に次のコジマがチャージされる。
「当たらない、当たらないって言うけど、撃ってこないな？」
クリストフの動きに僅かな焦りが生まれる。
「そのフルチャージのコジマライフル。最後の一発だろ？」
「まぁな総弾数が六発しかないからな」
そう、クリストフにとってもこの一発を確実に当てなければ、唯一の射撃武器を失い機体性能で不利な近接戦闘を強いられる。それもフェイントのコジマライフルを失った状態でだ。
「じゃあ、精々温めておけ……行くぞ」
「!?」
ＱＢを前、右、前、左と連続で噴かしコジマライフルの標準をかく乱しながら接近する。
「にッギイイ!?」
「何回目で終わるかな？」
一合、二合と交差する度に切る場所を変える。腹に向けて突き、左手を狙った切り上げ、気を反らす為に顔の近くを掠めるように払う、首を落とすように上空から切り落とす。そのどれもをクリストフはコジマパンチで凌いでいく。よく耐えるがそろそろ終わらせる。
「ファイナル・コジマー!!」
「ッ」

「チッ」
八合目の後退でワザと動きを鈍くし、コジマライフルを誘うとクリストフは引っかかり最後のコジマを虚空に放つ。飛び道具を消失したクリストフに一気に迫る。クリストフも唯一の武装となったコジマパンチを構え突進する。
「「おおおお!!」」
二人の咆哮が重なり九合目を迎えようとしていた。観戦する一年生全員が固唾を飲む。
「吹き飛べぇぇ!!」
球状の閃光が生徒たちの視界を奪う。
「きゃあ?! 何?」
「たぶん……ＡＡ（アサルトアーマー）ってやつでゲームのオーラ攻撃みたいのだよ」
一年一組の鷹月静寐（たかつきしずね）が言う通りクリストフが発動させたＡＡだ。ＰＡとして自機の周辺に展開していた濃密なコジマ粒子を周囲一帯に爆発させる攻撃だ。勿論ＰＡが濃密であればその分威力が増す。
「どうなったの？」
閃光が晴れていく中で皆が結果を知りたがる。だが勝負はまだ決着していなかった。
「せぇぇい!!」
「なんだと!?」
何故ならジョルジュはＡＡを直撃しなかったからだ。ジョルジュはＡＡが発動する前にＯＢ（オーバードブースト）を噴かし、ＡＡが発動した時にはクリストフを抜き去っていた。ＯＢはジェネレーターから生成されるコジマ粒子を使った瞬間的な超加速で、ＰＡに回しているコジマ粒子までも使用する為、ＰＡが減衰してしまう弱点があるが、その速度はＱＢを超える。
ＯＢで一気に近づいたならば、ブレードで切り捨てればよかったのだが、ジョルジュもとっさのことで回避を優先してしまったのだ。
そしてＡＡの範囲から逃れた後はＱＴ（クイックターン）で素早く振り返り、再度ＯＢを発動。ＡＡの余波でコジマ粒子が漂っていてＰ

Ａが減衰してしまうが、それは向こうも同じだ。ＡＡ発動後はＰＡの再展開が時間がかかる。
　再度突進してきたジョルジュに今度こそコジマパンチで対応しようとクリストフは構えるが、それをＱＢを噴かして飛び越える。
「そう簡単にはッ！」
　クリストフは飛び越えてＱＴで振り返ったジョルジュにコジマパンチで裏拳を放つ。
「な、に……!?」
「終わりだ」
　ジョルジュは裏拳をドラスレで受け止めると、右手のマシンガン０１―ＨＩＴＭＡＮをアルビートルに突き刺しトリガーを引く。ＰＡも無いネクストしかも装甲が薄いランスタンに至近距離でマシンガンが撃ち出されアルビートルのＡＰが底を着いた。

「すごい！　すごい！」
「ナイスファイト！」
「カッコよかった！」
　試合はジョルジュの勝利だが一年生全員が二人の健闘を拍手で称賛した。
「すげえよジョルジュ！　あの戦い方教えてくれよ！」
「参考にしようにも、一夏には銃が無いじゃないか」
「でもちょっとでいいから接近のしかたを教えてくれよ」
　ジョルジュに教えを乞う一夏に箒が窘める。当のジョルジュは少し考えてから、
「わかった。俺の戦い方より難易度が高いが、なにか良いコンバット・パターンがないか考えてみよう」
「やった！　ありがてえ、よろしく頼むぜ」
「しかし、大丈夫なのですの？　ＩＳとＡＣでは勝手が違うのでは……？」
　箒の次はセシリアが食い下がる。
「俺のネクストの操縦を指導してくれた人は、自分と戦い方が違う俺

に教えてくれた。あの人のように上手くできるかわからないがやってみよう」
「貴方に操縦を教えた人ってよほどすごい方なのですか？」
「すっげー人だぜ。なんたって……」
「止めろクリストフ。あの人はあまり過去の戦いに触れられると嫌がる」
「……ヘイヘイ」
セシリアの問いにクリストフが余計な事を言いそうになったので、釘を刺しておく。
その後の授業はＩＳを交えた機動練習や弾道学の実演などに移行した。

4．勢力図を説明していたら中国来た

「そういえば、そろそろクラス対抗戦だよな」
　一組に遊びに来ているクリストフが雑談の中でこう切り出した。
「それがどうかしたか？」
「いやさ、関係者のお偉いさんが視察？　みたいので来るんだってよ」
「ＩＳのだろ？　俺たちに何の関係がある？」
　クラス対抗戦で戦うのは八人のクラス代表だ。大半の生徒にとってお偉いさんが来ることなんてどうでもいいはずだ。確かに自分たちはＡＣの関係者として何かしら見られるかもしれないが、対戦しない自分たちの何を見る？　容姿とかだったらお笑いものだ。人格か？　だとしたら目の前の変態はガッカリされるな。
「そのお偉いさんの中にＡＣの関係者も来るんだよ！」
「へぇ……誰だ？」
　ＩＳ学園の行事に参加できるようになるとは企業連も根回しをしたのだろうか？　大方、オーメルかインテリオルだろう。
「現地人だよ」
「？　現地……ああ、あの御仁か」
　それは意外でもあり、ある意味納得だ。企業連内で政治力が低いＧＡグループからＩＳ学園に人をやれるなんて考えてみればあの御仁でしかありえない。
「でも、三グループの中から一人ずつって話だけどな」
「一番の大物はあの人だってことだろう？」
「ねぇねぇ、三グループって企業連内のこと？」
「そうだ」
「ねぇ詳しく教えてくれない」
　驚いた。クラスの女子達、特に相川が難しい話に乗ってくるとは思わなかった。
「ほ、ほら、貴方たちはアスピナ機関から来たんでしょ？　なんでも企業連から要請があったとかで、そこら辺の話がよくわからなくってさ、その……ローゼンタールとかも絡んでいるんでしょう？」

相川達の考えがわかった。ジェラルドが目的だ。転入当初は一夏がどうとか言っていたが同年代より年上の少し落ち着いた所謂「大人の男」の方がいいのだろう。話題を合わせる為にＡＣの事を勉強しようというのだろう。

「構わないが、ややこしい話だぞ？　それでも聞くか？」

「うん、聞きたい！」

「教えて教えて」

「なんたってジェ……じゃなくて、勉強のためだから！」

念を押してみたが恋する女子（？）の行動力は強いようだ。まぁ聞かれて教えてやらない理由など無いし、アスピナからも「宣伝みたいのしとけやー」って言われているので、説明することにした。

企業・企業連

俗にＡＣの開発を行う組織とその連合。

リンクス戦争終結からお互いの暴走を監視、商売仇であるＩＳに対して協力するために企業連として結束。全ての企業が連合を組んでいる事になっているが、その内部でグループを構成している。

グループは国家解体戦争が始まる前からあったが、今では情勢が変わって三つのグループに分かれて構成している。

●ＧＡグループ

「ＧＡ（Ｇｌｏｂａｌ　Ａｒｍａｍｅｎｔｓ）社」

ＧＡグループの中心というべき企業で、環太平洋圏で最大規模を誇る総合軍事企業。スタンダード・ミリタリー・カンパニーを標榜し、実戦的で安定した兵器に定評がある。

ＧＡヨーロッパ（ＧＡＥ）という子会社があったが、白い閃光事変にて離反・壊滅した。ＧＡと言った場合はこの企業を指すと考えていい。

「ＭＳＡＣインターナショナル社」

ＧＡの完全子会社。電算機、各種センサー（ＦＣＳやレーダー）に加えてミサイルの製造なども行っており、特にミサイルについてはＡＣ業界では特に優れている。

ＧＡグループの企業価値をかなり高めている優良企業と言える。

［クーガー社］

ロケットエンジンにおいて高い専門性を持つＧＡの完全子会社。他社と比べてコジマ系ロケットエンジンで後れを取っていたが、近年ではコジマ技術が向上し他社に追いつきつつある。

［有澤重工］

ＧＡグループに所属し日本に本社を構える企業。軍用車両や炸薬に専門性を持ち、タンク型脚部の堅牢さとグレネードキャノンの火力に定評がある。

［ＢＦＦ（Ｂｅｒｎａｒｄ　ａｎｄ　Ｆｅｌｉｘ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ）社］

リンクス戦争において壊滅的な打撃を受けるが、ＧＡの支援により復興した欧州の企業。精度と射程に優れた火器やそれを操る機体が特徴。

●オーメルグループ

［オーメル・サイエンス・テクノロジー社］

オーメルグループの中心企業。西アジアを拠点とする総合軍事企業でコジマ技術など技術的独立性の高さで知られており、技術水準は極めて高い。

［ローゼンタール社］

財閥系巨大資本グループの一翼を担う総合軍事企業。汎用的な兵器に定評があり、象徴性に優れたデザインで世俗的認知度も高い

［アルゼブラ社］

旧イクバール社。リンクス戦争において大きな打撃を受けたため人事・社名を変更するなどして復興した。

南アジア経済圏を拠点とする工業系総合企業。豊富な人的資源を背景に強固な量産体制と、特異な発想の兵器で知られる。

［テクノクラート社］

ロシアの国営企業を母体としたイクバールの子会社。その技術水準は低く、イクバールの技術にかなりの部分で依存している斜陽企

業。

［レイレナード社］

超高密度水素吸蔵合金及び実用燃料電池の開発元であり、ＡＣネクストの開発において重要な位置を占めていた。

白騎士事件後に国家解体を宣言した企業。なおそれに賛同した企業は旧アクアビット、旧ＧＡＥ、旧イクバール、テクノクラート。

白い閃光事変にて主戦力たるリンクスを多く失い壊滅の危機にあったところで、ＧＡから講和交渉を持ちかけられそれを受諾。当時最強と謳われていたベルリオーズ部隊の活躍によりホワイトグリントの撃破に貢献しその後の企業連に参加することが叶ったが、失った力を復興させる為にオーメルの傘下に降る事になった。

●インテリオルグループ

［インテリオル・ユニオン］

旧レオーネメカニカ、旧メリアスが合併してできた企業でグループの中心企業。白い閃光事変以前から旧レオーネメカニカ、旧メリアス、アルドラの三社で連合していた。二社が大きな打撃を受けてしまうが合併することで立て直すことに成功、しかし、アルドラの独立を許すことになった。

総じて高い技術力を誇り、特にエネルギー兵器の開発に定評がある。

［アルドラ（アルブレヒト・ドライス）社］

重工業系軍事企業であり、アクチュエータ複雑系の開発元で、この分野については高い専門性を発揮する。ネクスト開発の重要な位置にあった。白い閃光事変での損害は軽微で旧レオーネメカニカから独立する。独立した後もインテリオルグループには参加しており、関係は悪くない。

職人的精巧さに定評のある重火器に優れており実弾武装の開発にも着手している。

［トーラス社］

インテリオル・ユニオンの下で旧ＧＡＥ、旧アクアビットが合併し

て立ち上がった企業。両社の特徴を色濃く受け継いでおり、どこか浮世離れした雰囲気も漂う（変態）。

［旧ＧＡヨーロッパ（ＧＡＥ）］

元ＧＡの子会社で独自性を発揮することで知られ、ＧＡグループの中でも特に異端と呼ばれる風潮があった。白い閃光事変にてアクアビットと同調したが壊滅した。

［旧アクアビット］

コジマ技術に専門性を持ち、ＡＣネクストの開発において重要な位置を占めていた。開発する兵器はコジマ技術を前面に打ち出したものが多いが、プラズマ系兵器やＦＣＳにも強い。また、長所と短所のはっきりとした極端な性能のパーツが多く、若干癖が強い。

●カラード

［ＣＯＬＬＡＲＥＤ］企業連傘下のリンクス管理機構のことで、世界中のリンクスたちが登録されて管理されている。これは白い閃光事変で世界を揺るがしたネクストの脅威を管理するためである。企業から選抜された役員では不公平が出るという声があり、最高管理官はアナトリア機関から出向しているエミール・グスタフが務めている。

カラードとは首輪で繋がれたという意味があり、リンクス達が首に着けているＡＭＳコネクタが首輪という皮肉がある。

●研究機関

［アナトリア機関］

ＡＣネクスト開発の第一人者イエルネフェルト教授が所属する機関。主な研究内容はＡＣネクスト、コジマ粒子について。コジマ粒子の発見・技術転用、ＡＣネクストの開発、コジマ粒子の無害化などの成果を上げる。

［アスピナ機関］

ＡＣネクストの開発・研究を行う機関。ＡＭＳの開発元なため、その研究が盛んで被験体を募っているうちに教育施設のような面がで

きた。

全ての研究機関は基本的に企業連の傘下というかたちで管理されている。企業連がアスピナ機関に要請という名の命令をだしてきたのもこれが関係している。上記以外にもあり、企業の出資でそれぞれの研究を行う場所だ。その中でもアナトリア機関は企業連――全ての企業――から出資を受けている特別な研究所だ。

アスピナ機関はオーメル社からの出資で運営されているが、ＡＣネクスト運用において一番重要なＡＭＳの研究をしているので知名度は高い（パーツは替えがいくらでも利くが、操縦者たるリンクスは希少なため）。

「大雑把に説明するとこんな感じだが、何か質問はあるか？」

「あーえっと……」

「そのー……」

「そう言えば知ってる!?　中国から代表候補生が転校してくるみたいだよ！」

「あー！　知ってる知ってる」

「どんな子だろうねー？」

わからなかったのだろう。相川達は露骨に話を変えた。近くで別の雑談をしていた一夏やセシリアが話に加わって来た。

「あら、私の存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら？」

「いいや、気にしているのは一夏じゃないか？」

ジョルジュ達リンクスはＩＳのモンド・グロッソとネクストのカラードマッチを合併させるテストケースとして送り込まれたが、企業連が世界で初めてＩＳを操縦できる男性という特異ケースとの接触を考えないはずがない。同じ理由で各国が代表候補生や試験機を送り込んでテストをしたがるに決まっている。セシリアのイギリスは先に入学の手続きができただけだ。これからドンドン転校生が入ってくるだろう。

「そんなことよりも一夏はクラス対抗戦の準備はできているのか？」

「大丈夫ですわ！　イギリスの代表候補生たるセシリア・オルコット

が二人っきりで特訓して差し上げますから！」
「なんっ!?　私も付き合うからな！」
　セシリアの申し出に箒が食って掛かる。
「まぁ大丈夫じゃない。一年生でセシリアを抜いて専用機を持っているのは四組の子だけだし」
「しかもその子の機体はまだできてないって噂だよ」
「じゃあ楽勝じゃない」
　一夏が箒とセシリアに訓練のことをやかましく言われている横で他のクラスメイトが他クラスの状況を教えてくれる。専用機とは、量産機と違い一個人にあわせて特化、もしくは新兵装の試作を目的としたＩＳだ。世界に４６７機しかないＩＳコアを託されるということはそれを操る者は特に優れている事と同義だ。
「その情報古いよ！」
　一年一組の出入り口に立つ音源に皆視線をやる。小柄な体格、頭の側面から伸びる二本の髪、いわゆるツインテールの少女がドヤ顔で立っていた。
「二組も専用気持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」
　それを聞いた一夏は驚きのあまり思わず立ち上がり言った。
「鈴……？　お前、鈴か？」
「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音（ファン リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」
「何恰好付けてるんだ？　すげぇ似合わないぞ！」
「な!?　ほ、他に言うこと無いの！」
　どうやら一夏と転入生の鈴は知り合いらしいが、旧交を温める時間は無いようだ。なぜなら……この学園で最強にして絶対の教師が来たからだ。ツインテールの頭に出席簿が落ちる。
「なにすんのよ！」
「二組に戻れ」
「ち、千冬さん」
「ここでは織斑先生と呼べ。邪魔だ」

「あ、後でまた来るからね。一夏」
「あばよっと」
鈴とクリストフが出て行きＳＨＲが始まった。

時間は昼休み。リンクス組は一夏達とは離れた席で食事をしていた。ジェラルドが一夏と鈴が幼なじみと聞いて久しぶりの会話に邪魔をしないようにと、気づかったからだ。
「相変わらずここの学食は美味いんだが、こう……なんか足りないな」
「どうせトーラス製のレーションじゃないとダメなんだろ？」
「学食はいいよ。栄養バランスがちゃんと考えられていて」
アスピナ機関ではいつも企業からの試作レーションを食べさせられていたので、この学園の食事に違和感がある。美味いことはわかるし、満足はしている。だが、幼少からレーションを食べてきたので、習慣の違いに付いていけなのかもしれない。
「それにしても中国か――あのご老人の陰を感じるね……」
キツネうどんを食べるジェラルドが不意にこう切り出した。
「王小龍ですか？」
「あーあの腹黒そうな噂のある爺さんか」
日替わり定食を食べる二人がジェラルドの言う人物を言い当てる。王小龍（ワン・シャオロン）、ＢＦＦ社所属の老リンクスだ。リンクスでありながら政治的な手腕が高く、実際にはそうではないのだが、企業の重鎮として見られている。
「でも、あの方の力は欧州圏に集中しているのでは？」
「名前からして中華圏の人だからな、同郷にコネがあってもおかしくなくね？」
「僕はあの方に会ったことがある。恐らくコネが無いなら創る。それができる御仁だ」
ジェラルドはローゼンタール社でトップの実力者だ。カラード内での会合や企業間の付き合いで王と交流がある。
「そう言えばこのテストで一番の適役であるリリウム嬢を出し渋ったのは気になるな。ウォルコットとオルコット、確か遠い分家に当たる

んだったか？」
　ジョルジュは会話の流れで新たな疑念を浮かべる。リリウム・ウォルコットとは優秀なリンクスを輩出する名門のウォルコット家の令嬢でＢＦＦが誇る”王女”だ。ちなみに王女という呼び名はリンクス戦争で戦死したメアリー・シェリーがかつて”女帝”と呼ばれたからだ。
　彼女は十五才のはずなので、年齢・ＡＭＳ適性から今回のテストに最適な人材だった。だが、後見役の王からの圧力で彼女は選ばれなかった。
「まさかオルコットが既に学園にいるから、ウォルコットまで送る必要がなかったとか？」
「そこまではわからんよ。あくまで俺達の憶測だ」
　オルコットとウォルコットの関係は詳しくわからないが、ＢＦＦ＝王小龍の影響がどれ程あるかわからない。セシリアの振る舞いを見ていると一夏の行動を見張っているようにも見えるので、怪しいところだ。
「まぁ疑心に囚われることは無い。僕らの目的は今回のテストに実り良い物にすることだ。そう考えるとこの間の実演はなかなか良かったぞ。ＰＡ、ＱＢ、ＡＡ、ＯＢ――とネクストの性能をおおいに見せる試合だった」
「俺のコジマが全然活躍しなかったがな……」
「負け犬が」
「うるせえんだよ！　今度の模擬戦でコジマパンチ百裂拳を味あわせてやる！」
　クリストフは捨て台詞を残して食器を片付けに行った。
「片腕で百裂拳か……大変そうだな」
「たぶん大丈夫だろうがジョルジュ、君も相手の主義に勝たされたのは解っているよな？」
「勿論です。あんな奴も優秀なリンクスとして此処（ＩＳ学園）に送られたんです。次も勝てるとは思っていません」
　クリストフの機体はクセが強すぎて扱いづらいパーツで構成され

ている。そんな機体で前半は押していたのだ。まともな機体に乗られたらアイツに勝つことは難しいだろう。それだけの技量がアイツにはあるということだが、それとは正反対な困った友人がいる。
それは――――

「追いつけない!?」
「お行きなさいブルーティアーズ」
「なんだその太刀筋は!?」
「二対一なんだぞ!? 太刀筋もなにもあるか!?」
「あらゆる意味で機体性能が原因だな」
放課後のアリーナで一夏がセシリアと箒に袋叩きにされていた。専用機を手に入れても一夏はこれまで普通に暮らしていたのだから、ＩＳの操縦が下手だ。だから放課後の訓練でそれをマシにしようとしているのだが、
「一夏！ 正々堂々と勝負を……」
「一夏さん！ 逃げてばかりではいけませんよ」
「二人がかりで何言ってやがる!?」
「本当にな……」
いきさつはこうだ。一夏は放課後に訓練をしようとする。模擬戦の相手に専用機を持っているセシリアが立候補。箒が学園から訓練用ＩＳを借りて立候補。どっちと戦うか決められなかった一夏が二人から攻められる。
「量産とは言え近接型の［打鉄］と専用機で遠距離型の［ブルーティアーズ］か、理にかなった戦い方だが、誰の訓練だ？」
打鉄は防御重視の近接機でクセが少なく扱いやすいＩＳだ。ＩＳに乗った経験の少ない箒でも安易に扱えて彼女の得意とする剣道も相まって新兵にしては上出来な動きをしている。
セシリアのブルーティアーズはレーザー兵器を主体とした中・遠距離戦向きの機体で、一番の特徴は機体名と同じＢＴ（ビット）兵器［ブルーティアーズ］だ。彼女のＩＳはあの新兵器の試験を目的として開発されたようだ。先ほどから一夏が手こずっているのはそのビットで、セシリ

ア本人から離れた全方位から攻撃され回避に専念しているからだ。ビットの数は4、箒の持つ刀は1、合計五つの攻撃を捌いているのだから一夏の動き――いいや、機体の機動性がいいのだろう。
「よく動くな、まぁ近接機が鈍足では話にならんがな」
一夏の専用ＩＳ［白式］は一夏のデータ取を目的にしているが、基本スペックが高く、武装の［雪片弐型］は単一仕様能力（ワン・オフ・アビリティ）［零落白夜（れいらくびゃくや）］を持ち、その能力はシールド無効化能力、相手のシールドバリアを無効化→絶対防御が発動する→相手のシールドエネルギーを大きく削る。という高い攻撃性を持っている。欠点として自分のシールドエネルギーを消費する諸刃の剣だ。
「エネルギー管理が大変だろうな、初心者が扱うにはピーキーすぎる」
ネクストにも大量にエネルギーを消費する武器・機動をするパーツはある。そういう物は熟練したリンクスでないと性能を発揮できない。初心者が使えば本当に何もできずに終わる。
「うわあああ」
「終わったか」
箒の一撃で一夏のシールドエネルギーが0になり一夏の負けが決定した。ジョルジュは観客席から立ち上がると一声かけた。
「お疲れ、試合は予想通りの結果だが、お前の動きはまだマシだった。明日までにいくつかパターンを考えてやる」
「お……おう、た、頼むぜ、ジョルジュ」
「では、先に帰る。また明日な」
ヘトヘトになって大の字に寝転がる一夏を置いてジョルジュは自室に戻る。元より今日は一夏の動きを見ることが目的だったのだ本格的な助言はよく考えてからだ。
「あ」
「転校生の凰か？」
廊下を歩いていると鈴と鉢合わせした。
「鈴でいいわよ。あんた一夏と同じクラスの……」
「アスピナ機関から転入して来た。ジョルジュ・サンソンだ」
「そ、よろしく。一夏の訓練は終わり？」

「ああ、終わった。今は疲れて伸びている」
「その……強いかな？」
「素人だ。機体に助けられている」
　他の一組の生徒なら仮にもクラス対抗戦で戦う相手に情報を流さないだろう。だが、ジョルジュは簡単に答えた。
「古い友人の変化が気になるか？」
「まぁね、一年くらいだけど、離れていた分ね……」
「再会できて良かったな。世の中難しい事情で会えない人物もいるからな、四つ足のフクロウが飛んでいたりしてな」
「四つ足のフクロウ？　何ソレ？」
「戯言だ。聞き流してくれ」
　ジョルジュはそう言って鈴の横を通り抜ける。鈴はジョルジュの背中を不思議そうに見ていたが、一夏のいるアリーナの方向へ歩いて行った。
「ＢＦＦの老人の陰は無し……か？　どうやら偶然なのかもな」
　四つ足のフクロウとは王小龍のネクスト「ストリクス・クワドロ」のことだ。ほぼ直球だったが、鈴と繋がりが無いか確かめてみたのだ。あの様子では本当に何を言っているのかわからなかったのだろう。ＩＳ関連の方から一夏を調べないとなれば、王は織斑一夏というキーマンに興味が無いのか、何か別の理由があってリリウムを送り込まないかが気になるが、一個人にすぎないジョルジュは調べる手立てが少ない。
「まぁいいや、それにしても一夏のコンバット・パターンは難儀だな」
　鈴は特に陰謀とは関係ないと解れば良し。ジョルジュは自室に戻りながら、「アレは？　いやあの動きなら……」と一夏への指導を考えていた。

5．ロクデナシは空から降ってくる

クラス対抗リーグマッチが始まった。我らが一組のクラス代表：織斑一夏の出番は第一回戦となり、その相手は――。

「今謝るなら許してあげてもいいわよ」

「いいや。謝らない」

二組代表の鈴だった。なにやら試合とは別で険悪な雰囲気だ。

二人は数日前、鈴が転入して来た日に一悶着あったらしい。理由を聞いてみると一夏が鈴との昔の約束を忘れていたことが原因らしい。忘れていたとあるが、正確には一夏が約束の内容を間違った意味で解釈していることらしい。鈴はそれに激怒、意味を教えろと一夏は要請したが鈴はそれを拒否しながらも機嫌を直さないので一夏は理解できない理由で怒られたことに激怒。「試合に勝った方の言う事を何でも聞く」という賭けをすることになった。

「アホらしい。クリストフお前もそう思わ……どうした？」

「あ、あれは……ッ!?」

一連の経緯に馬鹿らしさを感じ、相方に同意を求めたが、当のクリストフは突然立ち上がり鈴に指差してた。

鈴の専用機甲龍（こうりゅう）は赤みがかった黒のカラーリングがされており、両肩の棘が生えた丸い球体が攻撃的な印象を持たせる。あの目立つ球体は恐らく甲龍の第三世代兵器だろう。ブースターかそれともレーザー砲か。

クリストフは鈴に指差しながら興奮ぎみに叫んだ。

「ソルディオス砲！」

「ハァ!?」

「よく見ろよッ！　鈴の専用機の両肩に付いている二つの球体は旧アクアビットの超兵器［ソルディオス］の主砲じゃないか！　少し棘がついてカラーリングも本体に合わせて赤黒いが、あの愛らしい面影は僅かに残している！」

クリストフの言う［ソルディオス］とは白い閃光事変で旧アクアビットが設計、旧ＧＡＥが開発した忌むべき兵器だ。バカでかいコジ

マ砲を乗せた四足歩行兵器だったが、機動力・コストに目をつむればリンクスを凌ぐ戦力だった。そのかわりに周囲に大量のコジマ粒子を撒き散らすトンデモナク迷惑な兵器だった。世界を汚染したコジマの三割が十機のソルディオスだと言われているから、相当嫌われている。

勿論、建造されたソルディオスはあの事変で全て破壊されている。

「すばらしい！　丸くて大量のコジマを制御することが魅力的だったあの［ソルディオス］のチャームポイントを浮かせるということで更にその魅力を引き出している!!　フワフワ漂うあの姿はまるでシャボン玉のように美しく、子供たちに夢を与えるだろう!!!!　エクセレントォ!!!!」

駄目だ。狂いだした。

ため息を吐きながら周りを見ていると、ＩＳ企業の関係者の中に知った顔が来賓席にいた。

――有澤隆文――

ＧＡグループ有澤重工の５３代目社長だ。スーツをビシッと着こなす渋い大人で、彼は社長という身分でありながら優秀なリンクスとして知られている。自ら自社の製品を宣伝することから、ＧＡグループ内での業績はとても高い。

他にもローゼンタール社の貴族風な老人や、インテリオルユニオンのキャリアウーマンが来ていることに本当に合併に向けて働きかけているんだなと思う。

まだ横でうるさく騒いでいる馬鹿がいるので。

「そんな事よりも試合を観ろよ」

クリストフにどうせ無駄だろうが一応たしなめると、開始の合図が鳴り試合が始まる。

一夏も鈴も近接戦闘型の機体で、一夏は一振りの刀――雪片弐型を、鈴は対の青龍刀――双天牙月を構えて激突する。鈴はバトンのように双天牙月を振り回しながら一夏を追い詰める。一夏の機動はいまいちだが、放課後に箒の剣道の指導によるものか太刀筋は付いていっている。

だが、鈴が双天牙月を連結させると一夏は少し押されるようになる。二振りの刀剣として捌いてきたのが、急に変則的な動きになったからだ。
（このままじゃジリ貧だ。一度距離を取って……）
狂った調子を立て直すために一夏は落ち着こうとした。その動きを見るや鈴は丸い球体を起動させた。球体が発光したと思いきや一夏が仰け反った。
「う……なにが？」
「今のはジャブだからね」
ジャブによる牽制の後は本命のストレートだ。だが何をされたかわからない一夏はソレをモロに受けてアリーナに這いつくばる。フラフラになりながらも一夏は立ち上がると地面を滑るように動く、途中でジャンプなどを混ぜていて滑稽なパフォーマンスに見えなくもないが、彼が動く前の地面はえぐれているので、何らかの射撃が当たったのだろう。
「よく躱すじゃない。この衝撃砲は砲身も弾も見えないのが特徴なのに」
鈴は心底感心したように一夏を褒める。
ジョルジュは何が起きたかまるでわからないが、機械仕掛けに乗っていてオカルトなんか無い。鈴が言った衝撃砲という言葉からスケールのデカい空気砲と推測する。理屈はわからないが空気塊を射出するだけでなく砲身（？）を作ることができるということは、射角もある程度自由が利くだろう（ジョルジュは知らないが射角に死角はないので自由はバリバリ利く）。
「ど～するんだ一夏？」
一夏は内心で距離を取ろうとしたことを後悔した。鈴の機体が近接パワー型と聞いていたので自分と同じブレードのみで勝負すると思い込んでいたのが間違いだった。牽制用の射撃兵装、しかも見えない弾を撃たれるとなれば再度接近するのは難しい。
（二人の教官に教えてもらったんだ。簡単に負けるわけには……）
試合までの練習期間で一夏は実の姉千冬に自分と同じ武器を使っ

ていることから、それを活かす動き瞬間加速を習った。一瞬でトップスピードだして敵に接近できる。ネクストで言うＯＢに近い物で千冬曰く、「出しどころを誤らなければ代表候補生にも勝てる」そんな技だ。

　そしてジョルジュからはそれの使いどころを教えてもらった。

「鈴」

「なによ？」

　無様な自分に対して活を入れるのを兼ねて鈴を挑発する。

「本気でいくからな」

「なによ、そんな事当たり前じゃない！　とにかく格の違いってやつを教えてやるんだから！」

　鈴は挑発に乗って双天牙月を横薙ぎに振るって来た。一夏は鈴の攻撃を受けると距離を取り、アリーナの限界高度まで飛びあがる。当然、鈴は衝撃砲を打ちながら追ってくるのを途中で何度か打ち合いながら地上を目指して飛び回る。

　白式は機動性が高いので鈴は次第にその動きについていけなくなる。

「くっ、すばしっこいわね！」

　ジョルジュに教えてもらった高度と速度を頻繁に変えるこの動きなら瞬間加速の急激な加速に突発性を与え、千冬の言っていた「出しどころ」となる。

　そして鈴の背後に回ったところで、瞬間加速を発動。

「もらったー！」

「!?」

　瞬間加速で急接近し鈴に雪片弐型を振るおうとしたとき、アリーナの空中シールドを破壊し何かが地面に墜落し爆発した。観客席にいた生徒たちは突然の衝撃に悲鳴をあげる。

「なんだいったい!?」

「なにが落ちたの？」

　試合を観ていた誰もが同じ疑問を持つが、管制室の織斑先生がアナウンスで生徒たちに呼びかける。

「試合中止！　織斑！　凰！　直ちに退避しろ！」
　アナウンスと同時に観客席の隔壁が下りて、アリーナからの防御を強化する。生徒たちが逃げようと出入り口に集まるが、ジョルジュとクリストフは座ったまま話をする。
「……おいジョルジュ、見たか？」
「ああ、煙が僅かに晴れて何が落ちたか……な」
「見たことあるか？」
「ないな」
　周りは我先にと騒いでいるのに対し二人は冷静に侵入者について議論する。
「ゴツイ腕が見えた。デカい砲門がついていたから、アレから発射された実弾もしくはレーザー兵器がアリーナのシールドを破ったんだろう。肩部には細かい砲門があったから、あっちは散弾系かな？」
「ＩＳにしろＡＣにしろ新型だな。あの二人勝てるかな？」
　クリストフは頭の後ろで腕を組みながら心配する。
「まず戦うのかよ？」
「戦うさ、そうでなければ観客席の隔壁とシールドが破られて生徒が死ぬ」
「確かにな……って避難が進んでないな」
「あれ？　ホントだ」
　出入り口を見ると人は集まるが、流れている様子がない。二人は気になって周囲の生徒を掻き分けて進むと。
「ここを塞いじゃ駄目だろ。俺達が出られねえ」
「いくら先生方が慌てていても全ての隔壁は降ろさねえと思うぜ」
　試合中トイレに立つ生徒もいるので、先ほどまで開いていた出入り口は今はがっちりと閉まっている。ジョルジュは扉の近くにしゃがむと床を撫で始めた。
「あの侵入者の仕業かもしれん。なんにせよ開けて出るぞ」
「後で怒られるぞ」
「その時はお前が罪を被れ」
「えーー」

嫌々言いながらもクリストフはポケットからケーブルを取り出し、ジョルジュが見つけたコントロールパネルに差し込む。その様子を相川がオロオロしながら二人に聞く。
「二人共何するの？」
「この端末でこの扉のロックを解析し開ける」
「そんな事ができるの!?」
「トーラス社は電子機器の開発も進んでいるんだぜ」
そう言ってクリストフはＤＳ（最初期）のような端末を取り出しケーブルに繋いだ。二枚の画面に浮かぶデータを鼻歌を交えながら操作する。
「オーアイム、スカーリー……ソーアイム、スカーリー……っと、開くぜ」
「早!?」
トーラス社はコジマばかりが目立つが、ＦＣＳ等の電子系統も優れている。あの変態たちもコジマだけでなくこんな所でも変態製品を出しているのだ。因みにクリストフがやった作業は三秒ごとに変わるロックシステムへのアクセスコードを二十回ほど解析したのであって、学園のシステムを無理やり破壊した訳ではない。それでもコードの解析を短時間で終わらせるのだから、トーラスはやはり変態である。
「俺はこのまま他の出入り口を開放してくる。お前は？」
クリストフは端末をポケットにしまいながらジョルジュに尋ねる。細かい作業のできないジョルジュの答えは決まっている。
「直ぐにコンテナに向かう」
この緊急事態に対処するためにジョルジュは自分の機体を求めて駆け出す。

管制室では山田先生がアリーナに残る一夏と鈴に呼びかけていた。
「織斑君、凰さん、決して無理はしないでください。教師部隊が到着するまでですからね！」
当初は退避を呼びかけたが、本人たちが他の生徒が避難する時間を

稼ぐために戦うと主張したため、なにより有事の際に最高権限が与えられる織斑千冬の判断により二人は戦っているが、相手は所属不明機なのでどうしても心配である。
　そんな彼女の心臓を更に悪くする情報が入る。
「!?　織斑先生！　学園の連絡通路に侵入者です！　これは……ネクスト!?」
「なに?　機体は?」
　山田先生はコンソールを操作し電子妨害がある中で、連絡通路の監視カメラをモニターに映す。
「これです。［サラーフ］が四機、［サンシャイン］が二機です」
　［サラーフ］はアルゼブラ（旧イクバール）社の軽量機で装甲の薄さがネックだが、高い安定性と旋回性能を誇り、なによりパーツが安価なのが特徴だ。
　［サンシャイン］はＧＡ社の重量機でその高い防御力と扱いやすさが人気の機体だ。
「武装がバラバラだな……政府の救援にしてはおかしい。呼びかけは?」
「他の教員が散々やっていますが、応答がありません」
　アリーナに突入準備するために通りかかったＩＳ装備の教師が直接対応する様子が映る。
《止まれ！　所属を明かしなさい！　さもないと襲撃者として……あう！》
　制止しようとした教師が六機のネクストに撃たれる。
　マシンガンを、ショットガンを、バズーカを、突撃ライフルを、止めにサンシャインのミサイル斉射を受けて教師の打鉄がエネルギー切れを起こし行動不能になる。
《よし、一機確保した。お前たちは先にコレを運べ》
《　了解　》
　リーダー格のサンシャインが指示するとサラーフ二機が教師ごと打鉄を運び出す。
「あの六機をテロリストと断定。目的はＩＳの強奪と思われる。ア

リーナに突入準備している他の教師を回して対応しろ」
「もう少しでロックが解除されて突入できますが仕方ありません。戦力分散となりますがそのように……」
　未知の敵に対して万全な態勢で対応できないのはよろしくない。そう判断した織斑先生は背後を振り帰りセシリアに命令する。
「オルコット、聞いての通り突入部隊の戦力が下がる。お前の要望通り突入部隊に入れてやる」
「わかりましたわ」
「ただし、先ほども言った通り味方の邪魔をしないように戦え」
「わ、わかりました」
　一対多の戦いを前提としたセシリアの機体では仲間との連携に不安があるので、小走りで管制室から出て行こうとするセシリアに釘を刺しておく。
　アリーナのモニターでは白式のエネルギーが残りわずかで、一夏と鈴がピンチに陥っている。連絡通路の監視カメラを見ると異変が起こっている。
《ありったけ撃ちまくれそうすれば破れる！》
　隔壁を突破しようとしているのだろう。銃は勿論、ミサイルまで撃ち込んでいる。最後に爆発でカメラが壊れてしまいそれ以上の状況が分からなくなった。
「織斑先生、テロリストの侵入した入り口から教師部隊が突入しようとしたところ、外にもネクストが……」
「……状況は？」
「優勢ではありますが、時間がかかりそうです。ただ……攫われた教師の確保が……」
　学園の外を映すモニターでは教師部隊が足止めを受けており、その間に教師とＩＳを持って行かれるかもしれない。あの二機が外に出る前に確保しなければならないが、それが難しい。織斑先生が思案していると、新たな機影がモニターに映る。
「アレに通信を繋げ」
「はい」

「サンソン、聞こえるか？」
《聞こえます》
「何をしている？　お前に機体の使用許可を出していないぞ」
　織斑先生の追求にジョルジュは黙った。
「お前にはまだ何も指示を出していなかったがな」
《いやいや、ちょっとお手伝いをね！　っと思いまして……》
　ジョルジュはおどけた調子で答えてくる。緊急事態の対処として自分の行動に非があるのはわかっているが、説教など後でいくらでも受ける覚悟を持っているので、勝手に機体を動かした事を詫びるつもりがない。
　織斑先生は深く溜息をもらすと。
「勝手に動くな。お前に向かって欲しい方向と反対に向かっているのだよ」
《では、ルートを送ってください》
「山田先生」
「はい、サンソン君は連絡通路に向かってください。そこに戦闘不能にされた学園の教師とＩＳがテロリストに拉致されています。まずは敵の撃破と人質の確保を」
《ルートと任務を受諾。ジュスティス、これより作戦エリアに向かいます》
　方向転換したジョルジュはモニターに表示されたラインにそって高速で移動する。暫く進むと連絡通路に到着し入り口側（テロリストが侵入した方向）に向かって対象を追いかけると見つけた。両手にマシンガンを持ったサラーフとマシンガン、ショットガンを持ったサラーフの二機。
「ちっ追いついてきやがった。ネクストだと？　ああ、企業連が何か実験とか報道していたな」
「ということはガキか？　おい、悪いことは言わねぇから安全な隔壁の中で震えてな！」
　相手はジョルジュを舐めている。やることはどうあれ戦いに慣れているのだろうが、言動からチンピラ臭さが匂う。

「システム戦闘モード、対象を潰す」
武装の安全装置を解除し、マシンガンを乱射して牽制する。相手は実弾・レーザー共に弱く更にＰＡ整波性能も高くないサラーフだ。一対一なら撃ち合いで負けないだろうが相手は二機、武装もＰＡ剥がしに向いた物でコチラの分が悪い。得意の機動戦をしようにも狭い連絡通路では自由が利かない。ならば。
「後退するか、追いつめろ！」
「穴だらけにしてやるぜ！」
通路を縦にしか使えないので後退すると二機は追って来た。しかもご丁寧に並んで来るとは好都合だ。
「おぶぁ!?」
「Ｂ２!?」
左の敵にプラズマキャノンを撃つと回避しようとはしたが、隣にいる仲間のせいで動けず被弾する。残ったショットガン持ちにＱＢで突進しそのままドラスレで切り捨てる。斬った後は二機の間をすり抜けながらマシンガンで牽制しながら再度距離をとる。
「すまんＢ２」
「気にするなＢ４」
Ｂ２と呼ばれた方が両手マシンガンでＢ４がショットガン、マシンガンだ。今のところドラスレで斬ったＢ４の方がダメージはでかいだろう。再度引き撃ちをするが今度は二機とも追ってこない、遠くからマシンガンを撃ってくるが威力が落ちており、アリーヤのＰＡに弾かれている始末だ。
流石に良くないと思ったのか近づいてきた。先ほどの失敗を踏まえて今度は横に並ばず前後でずらして来る。これならどちらかがプラズマキャノンを撃たれても回避できる。だが、ジョルジュは左の武装をドラスレにしてＯＢで突貫する。
「ぐあああ！」
「Ｂ４!?　くっ、がああ！」
「……敵機、戦闘不能」
並ばずに来るなら一人ずつ切っていくまでだ。彼らの敗因は最初

から前後でずらしてジョルジュの後退に合わせて前進しなかったことだ。
拉致されていた教師に近づき安否を確かめていると、連絡通路の奥からサラーフとサンシャインがこちらに向かってくる。新たに何か奪取して撤退しているのだろうが、そうはさせない。やがて近づいてくるサラーフに向けてプラズマキャノンを撃つと一撃で倒れた。
「Ｂ３!?　くっそおおお！　どけー！」
サンシャインの敵は焦った調子でバズーカを撃ってくる。狭い通路で満足な回避がとれず二発共食らい衝撃の影響で機体が硬直する。
「ちっ、こんなモン……」
「動くな少年」
ジョルジュがＯＢで無理やり機体を動かし敵に切りかかろうとしたところ、通信で重く厳かな声が聞こえた。
「ひっ、来たぁ。ぎゃあああ！」
「うっわ！」
通路の奥、奴らが来た方向から壁が迫って来た。
否、装甲の塊と言うべきそれは重量に任せた原始的な攻撃［体当たり］によってサンシャインを撥ねた。撥ねられたサンシャインはレッグパーツ・コアパーツがひしゃげていた。中身がどうなったか心配だが些細な事だ。
「これは……少年がやったのか？　そんな機体で良く耐えたな、感心するよ」
「ありがとうございます。それよりも直々のご助力感謝します。有澤社長」
この鉄の塊に乗るこの男こそ有澤重工の５３代目社長、有澤隆文だ。社長自ら搭乗するＡＣはレッグパーツが普通と違う。キャタピラなのだ。
足ではないのだ。軽快な動きはできないが、それを補って余りある積載量により高火力の兵器を積み、反動にも負けず運用できるのが強みだ。そしてアームパーツは俗に［武器腕］と呼ばれる物で、ＡＭＳ適性の低い者に処理負荷を軽減するために作られた物だが、彼はグレ

ネードをより安定して運用できるようにこのパーツを使っている。
そしてなによりも目を引くのは背部武装、大口径グレネード［ＯＩＧＡＭＩ］だ。今は畳まれているが、畳むために両背部ユニットを占有するという巨大さからその威力は予想できる。
「念の為にトレーラーを用意させておいて正解だった。無粋なテロリスト共を吹き飛ばすことができたからな」
社長の行動にはＡＣが付いてくるようだ。
その後、外にいたテロリストは一掃され政府に拘束された。尋問によると彼らの目的はＩＳ学園のＩＳと専用機を持たない代表候補生の拉致だったらしい。常日頃から学園を監視していたところ警備が手薄になったので行動を起こしたとのこと、アリーナに出現した所属不明ＩＳも一夏・鈴・セシリアの活躍により撃破された。
この事件によりクラス対抗リーグマッチは全試合中止となった。また、事件解決に貢献してくれた有澤社長には感謝状が贈られた。

6．突然への対応

クレイドル０６――――

洋上に浮かぶ人工島。昨今の人口増加などにより土地不足となっていたところに立ち上げられたプロジェクト。国連が発信元で企業連がその支援のもとで最新技術をもって建造する。人工島は一島につき収容人口およそ二千万人の規模で、それが五島一セットでクレイドル（ゆりかご）と呼ばれている。（番号は建造された順番だ）

クレイドルを建造するには莫大な金が必要だが、企業連がそれに着手した目的は土地問題だけではない。

例えばコジマ除染施設アルテリア、かつての戦争で世界中にコジマ粒子が拡散し環境問題になったモノを解消しなければならないが、世界中の陸地に設置できるアルテリアだけでは効率が悪く先の土地問題もある。

そこで人工島を建造して海の上にもアルテリアを用意しようとなった。他にも自社の工場を建設する場所を作ったり、制限はあるものの敵対組織の重要施設の近くに自社の拠点を設けるという思惑がある。

クレイドル０６は企業連に参加する全ての企業が建造した物で、最も企業連内の公共性が高い。この日はオーメルの重役が同グループの基地を視察することになっていた。

「本社のお偉いさんが、いったい何の用だよ」

駐屯する兵たちにとっては、視察は迷惑千万である。いつものような勤労態度では上の者達に何を言われるかわかったモノではない。最悪、予算を減らされて飲める酒の量が減ってしまう。兵士たちは隠れながら雑談する。

「どうせ、このクレイドルにいる不倫相手と逢引だろうよ。その為に会社の金使ってしなくてもいい視察とは……偉い人の金の使い方は迷惑だね」

「人の使い方もな」

「つーかお前、あの爺さんの不倫相手知ってんの？」

「美人だよな？　歳は？　胸は!?」
　規則の多い場所ではどうしてもこういう下品な話が盛り上がる。
「なんか金髪のネーチャンだったな。胸は……なかなｋ」
「貴様ら！　そこで何をしている！」
　兵たちの隊長に見つかり、彼らは直立不動になる。
「また、くだらん話をしておったな!?」
「も、申し訳ありません」
「先ほどから、通信機から聞こえておったぞ」
「げっ!?」
　兵士たちは自身の通信機を確認する。点けっぱなしだった。
「猥談をするのは構わんが今度からは通信機を切って行え」
「「　ハッ　」」
　指摘するところがおかしいが、そこで管制室から通信が入った。
《あなたも大概ですよ。まず自分が通信機を切るべきです》
「私はいつ敵が来ても対応できるようにしているのです」
《よくもまぁ、そんな事を……》
　管制官は隊長の態度に呆れる。これでこの基地で最も優れた戦力なのだから困ったモノだ。
「もし敵が来ても隊長というネクスト戦力がいるんです。大したことありませんよね」
「そうだな俺にビビッて逃げてくれりゃいいんだが」
《――ザ――ザザ――》
　部下たちと笑い合っていると通信にノイズが混じり込んできた。部下たちは動揺しあたりを見回している。隊長はは管制室に情報を求めた。
「なんだ!?」
「管制室、この通信はどうなっている!?」
《わ――ん！　――!?　――明機――――近！》
　辛うじて聞き取れるのは、「不明機が接近」だけだ。
「方角、数は!?」
《――一機。――――!?　は――！　ＶＯＢ――》

最後に聞こえたＶＯＢとは、ヴァンガードオーバードブーストのことで機体背部に接続する巨大な追加ブースターで、これを使用することでネクストは時速２０００ｋｍにも達するスピードで飛行することが可能。

ＩＳは元々宇宙開発を目的としたこともあって機体にもよるが中量級のネクストを上回る速度が出せる。機動力は戦闘のあらゆる場面で重要な項目で遅いと攻撃を避けられない、攻撃を当てに行けない、それどころか戦闘エリアに到着できず友軍が壊滅するなんてこともあり得る。そんな事でＩＳに負けないように開発されたのがＶＯＢだ。

周囲を見るが目視はまだできない。レーダーを見ると僅かに反応があり、北西からそれが徐々に近づいてくるのがわかる。管制室が不明機に勧告を繰り返しているが、反応は何も無いようだ。

不明機を目視で確認できるくらいに接近された。機体は様々な企業のパーツを組み合わせた重量二脚で肩部に追加整波装置を装備している所を見るに、かなりタフな機体と判断できる。

ついに北西側のＢＦＦ製スナイパーキャノン砲台が砲撃を開始した。しかし不明機は上昇下降を使い分けて砲弾を避ける。通常なら小さな挙動だがＶＯＢによる超加速時には砲弾を避けるのに必要最低限の動きとなる。

それはまるで警備をしている者達を嘲笑うかのように――――

クラス対抗戦が終わって数日、いまだにあの日の出来事を話題にする生徒はいる。最初の内は皆恐怖や異例の出来事を珍しく思っていたようだが、今ではあの時に活躍した人たちを褒めそやす為に行われている。

「あの時の織斑君と凰さんはすごかったよね！」

「無人機に向かってズガーンって」

そんなクラスメイト達の雑談をジョルジュは聞き流していた。ジョルジュがあの日に遂行した「ちょっとしたお手伝い」は秘匿扱いとなった。ＩＳ学園の理事長がそう処理した。どうも事件自体を生

徒に知らせたくないようだし、ジョルジュ（ネクスト）が解決したということが気に食わないようだ。そのクセ体面を守るために有澤社長には感謝状を贈る。

緊急事態は学園の教師が対応することになっていることは説明を受けたので解っている。だが、テロリストが小さな戦争を仕掛けて来たのだ。黙って見ているのでは自分が何のためにネクスト（ちから）を持っているか解らないではないか？　それをＩＳとネクストの過去の軋轢を気にしているとは、実にくだらない。

「何のために」と思ってしまったが、競技の為だ。今ではそのように使用することを想定しているのだから、その為に訓練しているのだ。決して己から剣を振り回すようなマネはしてはならない。

――「正義を見いだせ」――師匠からの言葉を思い出しながら、自省する。

「そんな事よりも、あの噂知ってる？」

「アレでしょ？　知ってる、知ってる」

「今月の学年別トーナメントに勝つと……」

クラスメイト達の噂話は直ぐに別の物に変わった。女子の話は回りくどく、コロコロ変わる物だという事は、アスピナ機関にいた時に学習済みだ。教材は主にアンナ先生の四時間に渡る「ちょっと、お茶しましょ」から。

その例の噂は女子にしか回っていないようで、学園に僅かにいる男子の耳には入っていない。その気になれば段ボールやロッカーに隠れ潜んで、調査することができるが、噂話をする女子達の様子から、不穏な気配を感じないので、どうせくだらない事だろう。と決めつけた。

予冷が鳴り、朝のＳＨＲが始まる。

山田先生が開口一番にこんなことを言った。

「今日は転校生を紹介します」

教室がざわつく。女子達の反応から期待ではなく、戸惑いを感じることから、噂話が転校生だということはないだろう。一夏やジョルジュ達の転入は事前にテレビや新聞でニュースになっているから。

皆どんな男が来るのだろうと期待していが、今回は事前に知らされること無く転校生が来たのだ。
教室の扉が開き、四本の足が入室してくる。二人？
「はじめまして。フランスから来た。シャルル・デュノアです。よろしくお願いします」
片方は中性的な顔立ちで金髪を首の後ろで束ねた……少年？
「お、男……？」
「はい、僕と同じ境遇の方が日本にいらっしゃると聞いて、転校することに……」
ジョルジュはシャルルの話を聞きながら、周囲を観察する。理由は危険察知のため。ジョルジュは得た情報を元にこれから起きることを予測し、対応した。
動きにしては簡単、耳を塞ぐだけ。
「「　きゃあああ!!　」」
「　うわあっ!?　」
「……やはりな」
一夏の時は知らないが、自分が来た時と同じ反応だ。高い声が一斉に上げる歓声はスタングレネード程ではないが、耳に響く。驚きの声を上げたのは初見のシャルルと、一番多く経験しているはずの一夏。お前は何故対応できない？
「二人目！　ここでは五人目だよ！」
「これまでと違った雰囲気！」
「守ってあげたくなる系！」
始まったよ。質問タイム。教室の隅に立つ女性が溜息をついている。この先も予想できる。
「騒ぐな小娘共。一人増えた所で余る奴は余る」
一夏――正確には千冬本人――、ジョルジュ、に続いて三回も繰り返されて相当イラついているのだろう。というか言う事酷いな。
「静かにしてください。まだ一人、自己紹介が済んでいません」
山田先生の言う通り、もう一人の転校生、銀髪眼帯の少女が可哀想ではないか。といっても姿勢よく立ちながら口を閉じている。その

片目は先ほどからつまらない物を見るかのような眼だ。
教室が静かになっても口を開かないので織斑先生が促す。
「挨拶をしろ。ラウラ」
「はい、教官」
「……私はもう教官ではなく学園の教師だ。そしてお前も、ここではただの生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」
「了解しました」
織斑先生に声をかけられた少女は、直立不動――気をつけ――の姿勢で答える。入室した際の足運び、その身に纏う雰囲気、織斑先生に対しての態度、教官と言う発言から、確信した。軍人だ。
ＩＳの出現はソレを扱うパイロットの育成にまで影響している。ＩＳに関する教育は女子の場合は適正検査を受けた時期にもよるらしいが、早ければ小学生のうちから学習を始めてしまう。そして優秀な人材は国防の為に軍に招かれることもある。
「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」
「「　……　」」
「……え、えと……」
「以上だ」
「「　……　」」
クラスの誰も質問をしないので、ラウラの自己紹介は終了した。てっきり眼帯や、織斑先生との関係とか聞くのではないかと思ったが、それだけで済んだのだから、ジョルジュは羨ましく思った。
山田先生が困った顔をしているのはしょうがない。
「……貴様が」
周りをなんとも思ってないように見ていたラウラが、壇上から降りて直ぐの席の前に立つ。そしてそこに座っていた生徒――一夏――に平手を振る。いい音がした。
「……貴様があの人の弟だとは認めない」
叩かれた一夏はボケっとした顔をしている。理由が分からないのだろう。やがてハッと気が付くと。
「なにするんだよ！」

当然の文句を相手に伝えるが、ラウラは何も言わずに後ろの席に座る。
織斑先生はラウラの行動を何かしら叱る必要があるだろうが、思うところがあるのか、溜息をついて次の授業の説明をすると解散させた。
「えっと、織斑君だよね。初めまして……」
「いいから、いいから、すぐ移動するぞ。実習の時は女子は教室で、男子はアリーナの更衣室で着替えるから。早めに慣れてくれ」
「え、ひゃっ!?」
移動を急かす為に一夏はシャルルの手を掴んで走り出す。
「そうそう、堅苦しいから一夏でいいぞ」
「う、うん。じゃあこっちもシャルルでいいよ。あの……もう一人男子がいたよね？　彼は……」
シャルルが先に出て行ったジョルジュの事を聞こうとしたが、廊下の角から焦りを含んだジョルジュの声が聞こえた。
「クッソ！　こっちを抑えられたか!?　お、オイ！　何してんだ!?　もっと急げ！　奴らに捕まるぞ！」
「ジョルジュ？　どうして階段を昇るんだよ？　アリーナは下だぞ」
「バッカ！　こっちだ！　そっちにはッ……！」
階段を降りようとする一夏達をジョルジュは背中を押して無理やり昇らせる。その下からは――。
「今、織斑君の声がした！」
「じゃあこっちに……いた！」
「皆！　こっちよ！」
「「　転校生！　男！　」」
「シャルルの噂を聞き付けた他クラスの女子が追ってくるぞ！」
「「　!?　」」
階段からは目をハートマークさせた女子が、大挙して昇って来た。突然の転校のはずが、正体不明な女子のネットワークに引っかかり、新しい男子を一目見ようと行動しているのだ。別に見に来たければ好きにしたらいいが、時間が問題だ。これから遅刻者には厳格な織斑

先生の実習なのだ。捕まる訳にはいかない。
　ジョルジュが逃げる必要は無い？　それは間違いだ。あくまで念のためと思い、いつもより早く移動していたのだが、女子の集団に見つかり。
「噂の男子はどこ!?　教えて！」
「どんな子？　攻め？　受け？」
「この際、サンソン君とお話を――」
　と、他人事ですまない状況になっていた。
「どーすんだよ!?　アリーナに向かえないぞ！」
「プランＡ、昇るだけ昇った後に、窓から飛ぶ。プランＢ、消火器を使って煙幕を焚き、その隙に逃げる。プランＣ、実力行使で突破」
　混乱しながらも、アスピナ機関の先輩に習った通りに成功率の高い順番で作戦を立てる。
「ロクなプランがないぞ!?」
「大丈夫だプランＡなら、お前たちは専用機を展開すれば無傷だ。俺はベルトに仕込んだワイヤーで……」
「ハァ、ハァ、許可された範囲外で、ＩＳを展開すると、怒られちゃうよ」
　シャルルは体力が無いのか、もう息が上がっている。直ちに何か手を打たなければ、転校初日で哀れな目にあう。流石にそれは不憫だ。
「仕方がない。プランＤで行く」
「なんだよそれ!?」
「実行者が一番割を食うプランだ。今回の場合、お前たちは高確率で逃げられるが、俺がヤバいかもしれん。時間が無い！　階段を降りるぞ！」
　二人はジョルジュの作戦に従い、階段を降りるが、降りた先に女子達が待ち構えていた。
「キターーー!!」
「絶対逃がさないんだから！」
　捕まる。一夏とシャルルは観念し、一夏はこの後のヘッドクラッシャーチョップを覚悟したが、ジョルジュが制服――ブレザータイプ

――のボタンを外し、前を開いて少しだが動き易い格好になると、前に出た。
「二人共、行け！　ここは俺が止める！」
「そんな……ジョルジュっ！」
「駄目だよ！　元はといえば僕のせいなんだから……」
　一夏とシャルルは絶望に屈せず、立ちはだかる勇者の背中に手を伸ばした。だが、そんな物は要らんとばかりにジョルジュは叫ぶ。
「行け！　生きて授業を受けるんだ！　一夏、シャルルを無事に更衣室まで連れて行ってやれ……」
「っ！　わかったよ……必ずシャルルを守って見せる！」
「二分しか止められないからな」
「一分でもいい、逃げられるようだったら逃げてくれっ！」
「え……ちょっと」
　階段の踊り場で止めたことにより、二人へは追手が行かない。ＩＳ学園の、男に飢えた女子の巣窟での生き方をまだ知らないシャルルを守ることは一夏とジョルジュの共通した考えだ。一夏はジョルジュを信じているからこそ、背中を任せて走る。シャルルは右も左もわからない状況でも助けて貰えたことに対し、一言残して一夏に連れて行かれる。
「あ、後でちゃんと先生に事情話しておくから～～～」
　ジョルジュは目をぎらつかせた修羅達が伸ばす無数の魔手を受けながら、懸命に踏みとどまる。中には「男の肌……あふぅ……」「手、握っちゃった！　……ふぅ……」「ちょっと変わってよ！　きゃ、目が合った！　……ふぅ……」といったように労せず数を減らせている。体感で二分程経過した。これ以上ここに踏みとどまっていたら、授業に遅れる。　シャルルが事情を話してくれても、急いで行かなければならない。
「失礼お嬢さん方、ここらでお暇させていただく」
「あっ！　待ってよ、私はまだ……」
「私も、もっと触りたい」
　後ろに逃げようにも、回り込まれてしまっている。無理に押しのけ

てしまったら階段から落ちてしまうかもしれないので、前を掻き分ける。そして、
「結局プランＡになったな……では、さようなら」
窓を開けて飛び出すと女子達は悲鳴をあげたが、ベルトに仕込んであるＧＡ製の秘匿ワイヤーで降りていく。流石に一階まで降りられなかったので、途中の教室にお邪魔させてもらう。丁度良く窓が開いていたので、そこから入ると傍にいた生徒を驚かせてしまった。
「きゃっ……何……？」
眼鏡をかけたセミロングの少女は怯えた様子で、ジョルジュを見る。当然だ。普通窓から出入りする奴なんていないから。謝ろうにも怯えられては、声が届かないかもしれないので、少し茶目っ気を入れて謝った。
「失礼、アリャーマンの親戚です。急いでいるので、これで」
立場上あながち間違っていないので、それだけ言うと早足に教室を出る。プレートを見ると一年四組と書かれてある、心の中でもう一度四組の人達に謝ると、自分の機体が置かれているコンテナへ走り出す。

その後何とか間に合い実習に参加できた。実習内容としては、二組と合同でＩＳの着脱、動作確認を行った。生徒たちが実習をする前に山田先生　対　セシリア・鈴ペアで模擬戦があったが、大いに学べた。セシリア・鈴のチームワークが悪かったのもあるが、山田先生の射線・回避地点の誘導によって二人が連携を取れないように戦い事態をコントロールしていたのが大きい。
それができる人物はＡＣのカラードマッチでは有利に戦える。ＩＳの試合は何も障害物が無い空間での戦いだが、カラードマッチの会場はＩＳのアリーナより広く、障害物がある場合がある。その障害物を用いた戦術も勿論あるが、何も無い空間での戦いでは、素の力が試される。そういう奴は圧倒的な戦力差を覆すことができる。ジョルジュはいつかその域に至るために、山田先生（ヒント）の動きを何度も頭の中で分析する。

《作戦を確認する。目標はオーメル社重役、及びその護衛の排除だ。対象はクレイドル０６の基地に訪問している事が先ほど確認された。手順はこちらが遠隔操作で基地のシステムを無力化した後にＶＯＢで単騎で突撃。基地に到達したら、システムを直接破壊、その場の戦力を殲滅してくれ。あの老人を葬るのにまたとないチャンスだ。確実に遂行してくれ》

「……了解。確認するが、このミッションは俺一人か？」

《これから突撃するのはお前一人だな、下部組織を動かしているから、厳密に言えば一人じゃないな》

「それだけ聞ければ十分だ」

重量二脚のネクストに搭乗する男は、暗い空間で通信を使って仲間と連絡を取る。その背には大型のブースターＶＯＢが取り付けられていて、整備員によって最終調整を受けている。

「副団長殿、どうして今回の作戦で俺を選んでくれた？」

その男は闘争が好きだ。狂うほどではないにせよ、自他ともに認めることだ。そんな自分を何故使うか、旅団の頭脳たる通信相手に確認する。

《システムの無力化を徹底する理由は分かっているな？》

「旅団長が戻らぬ今はまだ、雌伏の時……そういうことだろう？」

《そうだ。それが分かっているから使う。更に他の者達は少々、制限があったり条件が合わない者が多い》

人材の問題。

通信相手が一番使いやすい手駒は実力は申し分ないが、単純馬鹿で、いちいち五月蠅い。隠密作戦などまずできない。

猟師や剣士なら、寡黙で強いのだから隠密にうってつけなのだが、武装の問題で一対一に特化していたり、サポート重視で僚機との共同でなければ真価を発揮できない。

翁やかつての傭兵は体調の問題から、出撃の時期を見合わせなけれ

ばならない。
後は、空席とかである。
「アンデスの奴は？」
《確かに頼りになるが……正直私は彼が苦手だ》
通信機越しに弱った声が聞こえる。気持ちはわからんでもない。本人のこともそうだが、よくペットを紹介してくるのが、非常に困る。
「だから一番弱い俺でも仕方なくを使うってか」
その男は自虐気味に笑う。あくまでシュミレーターでの結果だが、戦いが好きなくせに組織で一番弱いという事は、この男にとって屈辱であった。だが、扱う兵器はいろいろ変わったものの、長らく戦場にいた自分にとって自分を殺せる者達がいる現実は自身の戒めになった。
《ああ、そうだな……》
最弱を肯定されるも、しかたがない。血気に逸って蛮勇となれば死あるのみだ。
《……仕方がないが……》
通信相手は思い出したかのようにだが、あえて付け足す。
《最弱ではあるが、それがお前の旅団内での強みだ》
「……」
《先の人材の問題ではあるが、彼らは間違いなくお前より強い。時期が来れば彼らを起用することが増えるだろう。だが、今回のように隠密・工作・殲滅のように条件が定められた環境で起用できるのはお前だけだ》
他の者達の扱いにくさを補う。カバーができてこそプロフェッショナルだとでも言いたいのだろう。男は含み笑いと共に返答する。
「フフ……あんたが旅団長でもいいんじゃないか？」
《それは大袈裟だ。組織の長は狂気と謳われようとも、強い熱意と実力が必要だ。そうでなければ組織は方向性を失い霧散あるいは固形化する。私にはそれが備わっていない》
「難しい事を言う副団長さんだな」
《フッ……、基地のシステムダウンまで十秒前。おしゃべりはこれで

お仕舞だ》
男が乗っている潜水艦が浮上し、ハッチが開かれる。傍受した通信から兵士たちは油断しているようだ。
「遊ばせてもらうぞ。――――」
ＶＯＢが起動し超スピードで目標の基地へ飛ぶ。
数分後、基地の防衛設備、警備兵、は全滅。そして不運にも基地に居合わせたオーメルの重役が殺害された。基地の記録装置が全てシステムダウンしており、兵士一人一人のＡＣの記録媒体も破壊されていた為、襲撃者の足取りを追うことは困難となった。

7．ＩＳ学園にもあった。アノ部屋

一夏はいつもの様に訓練しているのだが、教官を務める箒、鈴、セシリアの指導は――。
「だからこう、ガイーン！　ズバ！　といった感じでだな」
「なんとなくわかるでしょ、はぁ？　なんでわからないのよ！」
「いいですか、ターンの際は足を三十度に開き、腕は二十五度から四十度開くのが一番……」
「全然わからん！」
　箒は擬音だらけの根性。鈴は感覚に頼った直感。セシリアは頭脳を使う理論。どれもこれも初心者に教えるのには向かない方法だ。
「一夏、射撃の訓練見てあげようか？」
「ん……ああ、頼む」
　一夏は三人の教鞭から逃げる為に、シャルルの射撃講座を受けた。だが、考えなしに受けたことにより大事なことを忘れていた。
「アレ？　俺の白式に射撃武器は無いぞ」
　先程、シャルルと模擬戦をしてボロ負けしたから、相手もそれをわかっているはずなのに何故射撃練習に誘ったのだろう？
「一夏が模擬戦に勝てないのは単純に射撃武器の特性を理解していないからだよ」
「？」
　シャルルの講義は分かり易かった。例え自分が装備できなくとも、相手は射撃武器で攻撃してくる。飛んでくる弾を避けたり防いだりするのにも、その特性を理解していなければどうにもならない。シャルルは自身のアサルトライフル［ヴェント］を一夏へ渡す。
「まず、口で話すより先に、実際に撃ってみよう」
「他の人の武器って使えないんじゃないか？」
「持ち主が使用許可（アンロック）すれば使えるようになるよ」
「へ～、じゃあちょっと借りるぜ」
　一夏は空中投影された的に向かってアサルトライフルを構える。その構え方を見てシャルルは後ろから補助する。

「えっと、左手はこうで、もっと脇を絞めると良いよ」
「うんっと、これでいいか？」
「うん、じゃあ行ってみようか」
「ねぇ、あの二人くっつきすぎじゃない？」
射撃の補助をしているのだから仕方がないのだが、鈴はぼやく。隣のセシリアはそれに同意している。
第一射は的の中心から外れる。第二射、第三射も同じような着弾。全ての的を撃ち終えて一夏は感嘆の声をあげる。
「どうだった？」
「なんていうか……速いって感じだ」
一夏が銃器の特性を体感したことから、シャルルは説明していく。
「そうだよ。もしＩＳと銃弾が同じ速度で発射されたとしたら、銃弾の方が小さくて空気抵抗が少ないからＩＳより速く飛ぶんだよ。一夏がいくら早く動いても躱せない理由はこういうところにあるね」
「う～ん。お前の説明分かり易いな」
一夏の素直な感想に後ろの三人は不満の声をあげる。シャルルの説明はとにかく体験させてから、相手の感じたことを説明する。自ら感じたことだから一夏も興味がある部分であり、その後の原因考察も頭に入り易いのだ。
「ジョルジュはどうなの？　教え方」
「アイツの教え方も上手かったけど、あんまり教えてくれなくなったな」
「どうして？」
「アイツが言うには、『基本になりそうな動きはいくつか教えた。後はそのパターンをどれだけ複雑にできるかだ』って、それ以降教えてもらおうとしたら、詰将棋をしろとさ」
「ああ、だから部屋に将棋盤があるんだ」
シャルルが転校してきてから、二人は同室になった。一夏の部屋には元々、箒がいたのだが、部屋替えされた。だが、この部屋替えによって学園の考えが読める。ＩＳの男性操縦者を保護しようとしているのだ。何から？　企業連の送ったテスト転校生からだ。当の一夏は

そんな事を露と知らずに生活している。
「でも、どうして詰将棋を薦めるんだろう？」
「理由は教えてくれたぜ」
　一夏の専用ＩＳ白式は高い機動力と現行ＩＳトップクラスの攻撃力［零落白夜］が特徴だ。欠点は［零落白夜］が自身のシールドエネルギーを消費して稼働する事。そして動きがまだ覚束ない一夏が他の専用機持ちに対抗するための手段、瞬間加速にもシールドエネルギーを消費するという二つ目の浪費点が一夏の強くなるための課題だ。
　動き方を変えたり、パーツの調整で消費を抑えることはできるが、どの道、短期決戦なのは変わらない。そこで詰将棋によって「どう動けば確実に仕留められるか」という、戦闘の組み立てを鍛えるのだ。
「成程、よく考えられているね。……そのジョルジュはどうしたの？
　今日は特訓に来てないね」
「なんか千冬姉に呼ばれていたな」
「織斑先生に？」
「ねぇアレって……」
「ウソ!?　ドイツの第三世代ＩＳじゃない？」
「まだ、本国でトライアル段階だって話じゃ……」
　ジョルジュの事も気なるところだが、一緒にアリーナを使っている生徒の声が気になった。ピットを見上げると先日シャルルと同時に転校してきたラウラが黒いＩＳに乗って周囲を見下ろしていた。一夏の姿を隻眼に映すとオープンチャンネルで呼びかけてきた。
「織斑一夏」
「なんだよ？」
「貴様も専用機持ちのようだな？……ならば話が早い。私と戦え」
「嫌だ。今じゃなくてもいいだろ？　もうすぐ学年別トーナメントなんだから、その時で」
　憎悪に濡れた瞳で一夏を見つめるラウラ。その理由に一夏は心当たりがある。自分の姉に向ける態度から強い敬意と憧れを感じる。それに関する事だ。だから一夏も彼女が望む戦いに応じるつもりは

ある。だが、ケジメをつけるなら公式の場で堂々としたい。勝つにしろ負けるにしろ一夏はその方がいいと考えている。
「……ならば」
「えっ!?」
　ラウラは一夏の返答に対して、レールカノンを放つ。戦いを拒否するなら、無理やり戦うまで、と考えたのだろう、しかしその攻撃はシャルルが物理シールドを展開して防ぐ。
「いきなり攻撃を仕掛けてくるなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね」
「フランスの第二世代型ごときで私の前に立ちふさがるとはな」
「未だに量産化の目途が立ってないドイツの第三世代型より動けるだろうからね」
　そうやって挑発の応酬と共に二人は互いに銃口を向け合いながら牽制する。ラウラが動こうとした時、
〈そこの生徒、何をやっている!〉
　険悪な雰囲気を察してか、学園の教員が制止を掛ける。戦いに熱くなるのはよくあることだが、最初から憎悪を持ってやり合ってはならないからだ。
「……フン、今日の所は引いてやろう」
　ラウラも教員の静止を無視しない程度には冷静であった。ＩＳを解除し踵を返した。
「どういうことだ一夏っ」
「あの方との間に何がありましたのっ?」
　箒とセシリアが訪ねてくるが、一夏は口を閉ざしたままだった。

　ラウラはアリーナから出た後、学園の廊下を歩いていた。元いた基地に比べると程度が低い訓練環境、何もかもが見劣って見える。学園の教員は流石にそこそこできそうだが、敬愛する教官と比べると子供だましだ。
　ドイツの代表候補生にして第三世代型ＩＳ［シュヴァルツェア・レーゲン］のテストパイロットになり、そのテストをするためとはい

えＩＳ学園に来たことはラウラ自身嫌だった。だが、ある目的のための一つのチャンスと考える事にしていた。
「ん？　……教官ッ」
　廊下を曲がると今しがた考えていた教官――織斑千冬――を見つける。彼女は扉を開けて部屋に入ろうとしていたので声をかけようとしたが、扉の陰に隠れて見えにくかったが隣に生徒を連れていた。声をかける間もなく扉が閉められてしまった。
「なっ……!?　これは……ッ」
　いったい何の部屋かと気になり扉に近づき部屋の名前を見る。漢字で書かれていたが、読むことができたラウラは驚愕した。
「そんな……、いや、しかしッ」
　あまりの驚きに口を押えて、後ずさりする。居ても立っても居られなくなり、ラウラはその場から逃げるように去った。

「先生……こんなところに呼び出して……何のつもりです……？」
「わかっている事だろう？　わざわざ言わせるな」
　ジョルジュは織斑先生と二人きりで部屋にいる。机を挟んで椅子が二つ。周囲には棚があり、いくつかのファイルが入っている。それだけが特徴の部屋だ。
　連れてこられるなり、「椅子に座れ」と言われ、面談だろうと思い指示に従ったが、織斑先生は立ったままだ。
「出せ」
「……何をですか？」
　主語が無い。だが、織斑先生はジョルジュの体の一点を見つめている。
「あの……あんまり見ないでください」

「別に構わんだろう？　それとも見せられないような粗末なモノなのか？」
「いえ、品質としては上等ですよ」
一歩、二歩、織斑先生がジョルジュに近づく。
「ならば見せてみるがいい。私の眼鏡にかなうモノなのか……」
織斑先生の有無を言わせぬ圧力に心臓の鼓動が早くなり、体温が上昇するが、それを感じられないくらい、ジョルジュは緊張していた。
「具体的に言わなければ応えてくれないのか？」
「それは……」
織斑先生がジョルジュの顔を覗き込むように屈む。スーツに隠された豊かな胸が僅かに自己主張する。その上にある顔は、鋭い目つき、そして口角を釣り上げた狼のような笑み。
お前は食われる羊だと言わんばかりの、獲物を狙う笑み。
「それが……欲しい。欲しいんだよ」
「だ、駄目です！」
ぐっと近づいた美しい顔から離れようと、腰を浮かせるが、肩を掴まれて押しとどめられる。椅子がギィと音を鳴らし、その響きが改めて二人きりだという事を認識させる。
「どうして駄目なんだ？」
「その……立場が……」
ジョルジュは冷や汗をかきながら、答える。絶対に守らなければならない。まだ未成年だが、そのくらいの常識を弁えている。昨今の若者はこういうモノを玩具（オモチャ）のように容易に扱うのだが、ジョルジュはそう言う事は「大事な時にこそ」と考えている。
堅いかもしれないが、ごく当たり前のことだと本人は思っている。
「気にするなこの事は外部の誰にも言わん」
「そ、それでも……ッ!?」
肩を抑えられていた手が下りて膝を抑えられ、驚きで声を詰まらせる。織斑先生のような女（ひと）にそんな事をされてゾクリと来ない男はいないだろう。
「こういう事は初めてか？」

「い、いいえ……」
ジョルジュの言葉に織斑先生は「……ほう」と感嘆した。
「それなのに私では駄目だというのか？」
「誰でもいいと言う訳ではありませんので……」
尚も誤魔化そうとするジョルジュの態度に織斑先生も焦れた。
「いいからベルトを外せ、何だ？　私が外してやろうか？」
「ま、待ってください！」
ジョルジュの静止も聞かず、織斑先生は強引に目の前の少年の股間に手を伸ばし、スラックスを縛る戒めを解いた。
「凄いな」
「あぁ……」
「これが……これが、大勢の女達に黄色い声をあげさせたモノか」
織斑先生は歓喜に満ちた声を一室に響かせる。今まで見たことが無い。黒くて、硬く、それでいて繊細な――。

「証拠の品はあがった。学園に暗器など持ち込みおって、馬鹿者が」
「痛ッ！」
織斑先生はＧＡ製の仕込みワイヤーを片手にジョルジュを殴る。先日、ジョルジュが窓を伝って移動したという報告を受けた織斑先生は証拠を押さえるべく尋問していたのだ。
「織斑先生、『大勢の女子に黄色い声』って、ちょっと違いますよ。あれは悲鳴……アダッ!?」
「馬鹿者が、悲鳴を上げさせるようなマネをするな」
それは彼女たちが追って来たからだという事を、シャルルが報告してたはずなのに……「それくらい撒いて来い」って厳しい事を言う。
「何故、コレを私に出し渋った？」

織斑先生はワイヤーを軽く上げて訪ねる。
「それ、ＧＡ社の試作品なんですよ。アスピナの奴らはレーション（食品）に限らず、衣料品、文具、暗器までいろいろ試してくれって、送られてくるんですよ」
「成程、企業の試作品を没収されるわけにはいかんな。それは良くわかったが、ならば何故お前はコレを使った？」
「あの状況で使えば、死ぬ確率が低……アデ!?」
「死ぬかもしれん脱出方法を実行するな」
「でも……ソレ使えば……フッ、!? グアアア！」
織斑先生のチョップを一度避けたが、もう片方の横殴りのチョップを躱せなかった。
「初めてでは無いと言っていたが、アスピナでもやらかしていたのか？」
「まぁ、殆どが冤罪です。あそこの教師は約一名、行き遅れがいたので……」
脳裏に小柄な女教官の笑顔が浮かぶ。ハリを一人にしてきてしまったが、大丈夫だろうか？
「……私も行き遅れだと言いたいのか？」
「滅相もありません！ ところでベルト返してください」
「駄目だ。こういうモノは没収だ。だが事情が事情だ。後でＧＡ社に送っておく」
それは、それで面倒だ。後で経緯を知らせる為のレポートを書かねば。
「それはいいんですけど、ここ出るときのベルトは？ ちょっとゆるいので降りてきちゃうんですけど」
「そうしたら女子達のいい的だな」
「勘弁してください！ 公序良俗を推奨するのですか!?」
このまま外に出れば変態扱いされる。（初日で「感性がズレた」という意味で既になっている）それだけでなく最悪捕まって部屋まで連れて行かれ、ヤバい事をされるかもしれない。
織斑先生は邪悪な笑みを浮かべて満足すると、代わりのベルトを差

し出す。
「市販の安物だが、くれてやる。二度とこんな物を使うなよ」
「はい。ありがとうございます」
　受け取ったベルトをスラックスに通していると、一枚の紙が机の上に置かれる。
「反省文ですか？」
「まぁ……似たような物だ。ローエンの奇行を止める手段を列挙してほしい」
「二種類ですよ。四肢の骨を折るか、トーラス製の食品を食わせるんです」
「教師が骨折に至るほどの暴力は振れんし、授業中に飲食などもっての外だ。というよりそれが問題だ」
　クリストフは二十四時間中、二十時間はコジマ（トーラスに関する事）に染まる生態をしている。時々、大好物のソルディキャンディーを咥えないと、本人曰く「禁断症状になっちまうぜ」らしい。
「ところで、あのキャンディーには何が含まれている？　麻薬の類いか？」
「内容物は普通の飴です。着色料でめっちゃ緑にしていますけど。トーラスの食品で個人的に意味不明なのは、殺菌消毒方法です。なんか『百二十度のコジマに浸けた』とか、『マイナス百度のコジマで二秒』とか……あ、いえ、殺菌消毒はできるらしいんですよ。ただ、表記が商品名の次にデカくしているのがわけわからないんですよ」
「……」
　クリストフが信教するトーラスのやることが、大多数の消費者に理解されないのは今に始まったことではないが、極少数の商品は他企業を抜きんでる性能を誇る。正直それだけを開発してほしいのだが、たぶん無理だろう。
「……あまり参考にならなかったが、まぁいい、三組の担任には頑張って貰うとしよう」
「そうですね頑張って貰いましょう」
「では、せめてもの罰だ。この紙いっぱいに此処に書いてある漢字を

書け」
「……はい。終わったら帰っていいですか？」
「表も裏も全て、使い切ったらな」
会話ができないことは無いが、ジョルジュは漢字の読み書きができない。平仮名、カタカナは知っているので、読み仮名が付いていれば読める。
織斑先生は漢字ドリルと追加の紙を適当に置いて出て行った。なにもさせないで帰らせては教師としての威厳に関わるであろうから、ジョルジュは大人しく漢字の書き取りを始めた。

夕暮れの帰り道、一夏はラウラの目を思い出していた。憎悪と、殺意させ浮かんでいた。恐らく、ＩＳの世界大会、第二回モンドグロッソの決勝戦に起きた事件を恨んでいるのだろう。
当時、姉の応援に会場に来ていた一夏は謎の組織に誘拐された。目的は不明。だが、その時に一夏を助けたのは決勝戦を放り出してきた千冬だった。その結果優勝候補にして二連覇を予想されていた千冬は不戦敗。事件は世間に報道されなかったが、千冬が連覇を逃したことは大きな話題となった。
その時にドイツ軍は独自の情報網から一夏の居場所を特定し事件の解決に貢献した。その借りを返す為に千冬は現役を引退した後、一年間ドイツ軍でＩＳの教官をしていた。ラウラはその時の教え子だろう。敬愛する教官の経歴に泥を塗った一夏の事を恨めしく思うのはわかる。何故なら一夏自身があの時の無力さを悔やんでいるのだから。
「何故ですか、何故こんな所でッ！」
「私はここの教師だからだが？」
学園内の噴水付きの池の前で、ラウラと千冬がいた。寮に帰るには傍にある橋を渡らなければならないが、このまま出て行くのは気まずいので、木の陰に隠れることにした。
「あんな者達に教官が教える必要があるのでしょうか!?　ＩＳをファッションの様に扱い。くだらない男達の前ではしゃいでいるよ

うな者達に、貴方が時間を割くなど……ッ！」
　軍人として兵器としてＩＳを扱ってきたラウラにとって、この学園の女子はそのように見えるようだ。実力で選ばれるモノだが、代表候補生は雑誌に載ったりするなど、アイドル的な面もあるので、セシリアや鈴ですらそう捉えているのだろう。
「どうか我ドイツで、もう一度ご指導を……」
「そこまでにしておけよ小娘」
「っ」
　千冬の声が少し低いトーンになった。
「少し見ない間に偉くなったな。確か少佐だったか？　十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」
「わ、私は……」
「寮に戻れ、私は忙しい」
　押さえつけるような威圧で、ラウラの主張を一蹴する。その背中は自分の役割に口を挟むなと言いたげだ。ラウラは目を伏せて恐る恐るだが、どうしても聞きたいことを問うた。
「で、では……あの首輪付きは選ばれた人間なのですか……？」
「？」
「あ、あの銀髪の男です！　あの男は選ばれた……教官が認める者なのですか⁉」
　銀髪の男はジョルジュしかいない。（ジェラルドとクリストフは金髪）どうしてここでアイツの名前が挙がる？
「サンソンは……そうだな。感性がややズレていて、時々可笑しなことをするが、基本的に優秀だな。それがどうした？」
「あの男のどこがいいのですか⁉　教官がそのように……楽しそうに人物評価をするのは、あまりにも……」
「なんだ、気になるのか？　銀髪で、なんだかんだで面倒見のいいアイツとは似合いかもしれんな」
「そのようなことはっ！」
「フン、これ以上からかわれたくなければ、寮に戻れ」

ラウラはこれ以上、ドイツへ戻ってもらうための説得ができないと、判断し、その場を去る。ラウラの後姿を見送った後、千冬は背後の木へ語り掛ける。
「そこの男子生徒、女の会話を盗み聞きする異常性癖は感心しないな」
「そりゃないだろ、千冬ｎ」
「学園では織斑先生と呼ばんか、馬鹿者」
「……はい」
バレていた様だが、その言い方は心外だ。
「くだらんことをするくらいなら、教科書を読み返していろ。月末のトーナメントもあるが、基本知識が未だに他の生徒に追いついていないのだからな」
「わかってるよ」
「ならいい」
「なぁ、待ってくれ」
千冬は仕事に戻ろうと、一夏に背を向けるが、呼び止める。
「千冬姉は二度目の優勝逃したこと、どう思ってる？」
今まで会う機会が少なかったのもあるが、あの事件が自分のせいである事から、怖くて聞けなかった。だが、ラウラのこともあって聞いておきたいと思い。心を震わせながら思い切って聞いた。
「……終わったことだ。お前が気にすることは無い。ではな……」
対する返答は姉弟だから予想できたモノ。それでも予想と千冬本人から聞かされるのでは大きな違いがある。千冬の背を見つめながら一夏は一つのケジメとした。

「ふ～、やっと終わった」
ジョルジュは漢字の書き取りを終え、疲れた手首を軽く回しながら部屋から出て来た。紙の枚数を数えてみたが五十三枚あった。適当に置いて行くにしても限度があると思うが、おかげでペンを持つ手が黒く汚れた。

「ん？」
「貴様……ッ」
　扉を開けたところ丁度前を走り抜けるところだったラウラとばっちり目が合う。驚かせてしまっただろうか、すごい睨まれる。
「ああ、悪い……」
「己惚れるなよ。教官が気にかけて下さっても、私は認めないからな！」
　いったい何を言っているのだろう？　言うだけ言って銀髪の少女は走っていった。話が読めない。このラウラ・ボーデヴィッヒは織斑一夏に何かしらの因縁を持っていたのではないのか？　何故自分に？　考えてもしょうがないので、夕飯をどうしようかと悩みながら生徒指導室を後にした。

翌日――――

「あら、鈴さんじゃないですか」
「セシリアじゃない、こんなところに来て、何か用？」
　放課後に自主訓練の為に解放されている第三アリーナで鈴とセシリアは出くわす。
「学年別トーナメントの特訓に決まっているではありませんか」
「奇遇ね。私も同じ理由よ」
　喧嘩するほど仲が良いと言い、二人は事あるごとに対立する。トーナメントまで日が無い、今日（こんにち）では更に拍車がかかっていた。
　理由は最近の噂である。学年別トーナメントで優勝すれば、織斑一夏と交際できるというモノだ。当人はおろか、学園内の男子全員が知らないことを特に気にせず進める行動力は恐ろしい物がある。
「ちょうどいい機会だし、此処でどっちが上かを、はっきりさせとくってのも悪くないわね」
「いいですわよ。どちらの方がより強く、より優雅であるか」
　二人はそれぞれのＩＳを展開すると構える。そして模擬戦を開始しようと同時に動いたところで。

「!?」
「ッ!?　クゥッ！」
　その間を割り込む砲弾。機体が近接よりの構成をしている鈴はセシリアに肉薄しようとしたところを撃たれたので急停止して砲弾をやり過ごす。その砲弾は誰にも当たらず、アリーナの壁に当たり轟音を轟かせる。
「どういうつもり!?　いきなりぶっ放すなんて、いい度胸してるわね！」
　鈴が怒鳴る相手、ラウラ・ボーデヴィッヒは、鈴の文句などどこ吹く風と受け流し、二人の機体を見比べる。
「中国の［甲龍（シェンロン）］」
　燃費と安定性を重視して作られ、両肩に第三世代兵器龍砲（りゅうほう）を装備した機体。その龍砲は空間自体に圧力をかけ砲身を作り、衝撃を砲弾として打ち出す衝撃砲。
「イギリスの［ブルー・ティアーズ］」
　射撃を重視した機体で、腰にスカート状に装備された第3世代兵器「ＢＴ兵器」ブルー・ティアーズを実験する為に作られたＩＳで、機体名と特殊兵装が同じ名前。
「データで見た時の方が、まだ強そうだな。数しかとりえのない国と、古いだけの国はよほど人材不足と見える」
「この人、スクラップがお望みみたいよ！」
「そのようですわね……」
　いきなり出てきて、あからさまな挑発をしてくるのだ。二人の怒りは武装の安全装置（セーフティ）を解除させた。それを警告表示で確認しながら、ラウラは更に煽る。
「二人がかりで来たらどうだ？　くだらん種馬を取り合うような雌（メス）に私が負けるハズがないのでな」
「今、『好きなだけ殴ってください』って言ったわね」
「この場にいない者の侮辱までするとは、許せません」
　二人が憧れている少年の事をこうも言われては、二人がかりではアンフェアなどと言う躊躇は無くなった。

「さっさと来い」
「「　上等（ですわ）！　」」

「なんか大事な戦いの前にはカツ丼を食うといいらしいぜ」
「なんでだよ？　油っぽい物食ったら調子悪くならないか？」
「ほら、料理名に［勝］って入ってるじゃん」
「おお！　成程、それで？」
　ジョルジュはクリストフと雑談しながら、第三アリーナへ歩いていた。クラスメイトの女子達から射撃を見てほしい、補助してほしいと、頼まれたからだ。これには先日、シャルルが一夏の射撃訓練を補助していたから、「こうすればくっつける！」と閃いたからである。
　その時に二人はいなかったので、そんな不純な理由など知らない。
「コジマを油で揚げるにはどうしたらいいんだろな？」
「やはりか、お前が久しぶりに普通の料理の話をすると思ったら、そう言う事か」
　クリストフは料理ができる方だ。理由は彼を知っている者が聞いたら驚くことだが、「コジマじゃ人間の体を作れない」と言うのだ。だが、これは裏を返すと「コジマで人間の体を作れたらいい」という意味だ。しかたなく、自身のデカい体を健康にしてコジマを愛でられるように料理を嗜んだそうだ。
　そんなくだらない話しをしながら、歩いていると第三アリーナのＢピットに到着した。既に鷹月をはじめとした面々が訓練機を準備していたが、様子がおかしい。
「すまない遅れた。どうしたんだ？」
「ジョルジュ君。アレ……」
「なんだ？　……うぁ」
「ワォ！　エキサイティング！」
　鷹月が指さす方を見ると、模擬戦をやっていたようだった。過去形

なのは、模擬戦ではなく蹂躙になっているからだ。ラウラの専用機シュヴァルツェア・レーゲンの六本のワイヤーブレードに首などを拘束された、セシリアと鈴の二人が抵抗する事もできず一方的に攻撃されている。

二人のＩＳは競技用なので搭乗者に異常があったりすると、ＩＳは周囲の人にもわかるように警告を発する。クリストフは呑気な事を言っているが、このまま続けると二人の命にかかわる。

「なんで誰も止めないんだよ？」

「何度も止めるように言ってるんだけど……その……」

「だったら……」

「止めろクリストフ。此処はアスピナじゃない」

クリストフの感嘆も疑問も間違いじゃない。アスピナのようなリンクス養成場では目の前の光景が珍しい事ではない。度を越したバトルがあり、それを囃し立てる奴もいる。だが、ヤバくなったら間に割って入って止める。そんなアスピナ（ＡＣ側）のような行動を実行できる奴が此処にはいない。

「おい！　ラウラ・ボーデヴィッヒ！　模擬戦はお前の勝ちだ。その二人を解放しろ！」

大声で呼びかけるが、ラウラはこちらを見るとニヤリと笑顔を向けた。それでわかった。彼女は熱くなってオーバーアタックをしているのではない。冷静に何かの意図があってやっているのだ。

「クリストフ！」

「ほいよ！」

呼んだ時にはクリストフは動きだしていた。ジョルジュにラファール・リヴァイヴの物理シールドを投げ、自身は打鉄の近接用ブレード［葵］と同じく物理シールドを担いでピットから飛び降りる。鷹月達が制止の声をあげるが、ジョルジュも飛び降り、二人でラウラの元へ走る。

「生身で来るとは、舐められたものだ」

ＡＣが無いのが悔やまれるが、ラウラの注意を引きつけ二人への攻撃を止めねばならない。生身でもできることはある。現に二人を拘

束していたワイヤーブレードを解いた。　何のためかは分かり切っているが。
「いいだろう。少し遊んでやる」
「ッ!?」
　ワイヤーブレードを六本あるうち二本ずつジョルジュとクリストフに仕向ける。動きが単調なところ、本当に遊ぶ気の様だ。
「ホッ！　ヨイ！　チョイヤー！」
「ッ！　……ッ！」
　変な掛け声と共にクリストフはワイヤーを避けている。跳ねて、屈んで、横に跳んで、時々盾で弾いている。
「いいぞ。踊ってみろ」
　ラウラは温存していた残りの二本も出して、三本ずつで攻める。更に動きにフェイントをつけるなどして、複雑なモノになってきた。
「ハハッ！　楽しいかジョルジュ!?」
「馬鹿か！　余裕なら一本貰ってくれ！」
「ヤ～だね！」
　頬を掠められても二人は会話しながら、ラウラに近づいて行く。距離を半分詰められて流石にラウラも表情に遊びを無くし、本気で蹴散らしにかかる。
「うおァ!?」
「ザマァ!!」
　ラウラはまず、余裕そうにしていたクリストフにワイヤーを四本使い、捕まえにかかる。ジョルジュの要求通りになったが、クリストフは［葵］という武器を持っているから、先に排除するのだ。
「クッ！　このッ！　あ、あれ～!?」
　四本相手に躱したり、弾いたり、切ったりと大分持ったが、足を捕まえられて、ジョルジュに向けて投げられる。クリストフが四本の間は、ジョルジュは二本だったので妨害が薄く、残り十メートルの距離に詰めていたからだ。だが、
「食らえ！」
「ちょっ!?　おま……ッ、ギバァ！」

持っていた物理シールドを自分に当たる前にぶつけることで、運動エネルギーを僅かに落とし、ジョルジュはクリストフ砲弾（？）を無慈悲に防ぐ。
「丸腰の貴様などに……ッ!?」
「持ってんだよォ！」
ジョルジュはアルゼブラ製のネクタイピンを乱暴にむしり取ると、手順に従って分解・再構築することで、カミソリ程のナイフを作る。ラウラの懐に飛び込み装甲の無い腹部に突き入れようとするが。
「無駄だったな」
「チィ!?」
ワイヤーでナイフを持つ左手を拘束し、そのまま空中に浮かせる。拘束から逃れようとしているのか、足をバタつかせるが無駄な抵抗だった。
「少し驚かされたぞ、さて生身の人間に攻撃を加えすぎるとよくないが、お前も餌になってもらう」
「餌？」
「そうだ。戦いを拒否するあの男に理由を作ってやるのさ」
ジョルジュの中で合点がいった。鈴とセシリアに対してのオーバーアタックは一夏への挑発なのだ。一夏と仲の良い者達を傷つければ、戦いに応じるだろう。だが、まるで。
「テロリストの戦争でっち上げと同じ手段だな」
「それがどうした？　軍人にあるまじき行為だと言いたいのか？」
信念ある兵士ならば唾棄すべき行為なのだろうが、ラウラにとってそんな事はお構いなしなのだろう。
「別に、軍人が当たり前にやる手法だと思うよ」
先の発言はラウラを責めるつもりで言った訳ではない。思ったままの感想だ。ＡＣの企業がその資本から独自の軍を持っているが、使う機会を作るために、小さな不満を持つ勢力を焚き付けて紛争を煽ることなど、表に出ないだけで当たり前のように行われている。
そうしてゲリラやテロリスト、政府の軍や民間の警備会社に自社の商品を売るのだ。

「フン、貴様如きに軍人のあり方を講釈されずとも……ッ!?」
ラウラはそこで自分のワイヤーが戻って来ないことを気付いた。原因は――。
「ジョ、ジョルジュ！　早く何とかしろよ！　俺がセルフＳＭプレイをしている間に～」
クリストフは自分に使われた四本のワイヤーを体に巻き付けるようにして封じていた。物理シールドに引っかけたり、[葵]を地面に突き立てて自分の体ごと引っ張られないように様々な工夫をしていた。
「あ、止めて！　締め付けられる～、どこがって？　具体的に言えないようなところが～」
「クッ、変態め！」
ラウラはワイヤーを巻き戻そうとするが、ブレードのせいで動かない。クリストフが喚くだけだ。
「だが、一本あれば貴様をいたぶる事など……」
「残念、時間切れだよ。お嬢さん」
「な!?」
ジョルジュが着ている制服の左肩口が千切れるように破けたのだ。縛られている左手は制服の内側に何か仕込んであるのかスルリと抜ける。更に足を振っていたが、それにより体が振り子のようになり、そのまま跳ぶ。ラウラの頭の左を抜けるようにして背後に着地する。
虚を突かれたが振り返り頭を掴んでやろうとした。そこで気付いたが左肩に何か乗っていた。よく見ると消しゴムだ。フィルムには[テクノクラート]と書かれているのだが、文字を消すときに使う上の部分が千切れたように抉れ、小さな金属が埋まっている。その正体に気付きかけたが、回答時間は恐ろしく短かった。
爆発。それはごく小さなモノだったが、至近距離でしかも顔の横で食らったラウラには絶対防御が発動し、シールドエネルギーが減る。その間にジョルジュは倒れているセシリアと鈴を抱えて反対側のピットへ走る。
「……貴様！」
油断していたとはいえ生身の人間にここまでシールドエネルギー

を減らされたのは初めてだった。屈辱を晴らそうとブースターを起動し、逃げる背を追う。後ろでクリストフが「アーーーー！」と叫んでいるが、お構いなしだ。
「待てーー！」
「今度は貴様かッ」
　追い付かれそうになった所で、ラウラの本来の目的、一夏がアリーナの遮断シールドを破って助けに来た。
「助かる」
「生身でＩＳとやり合うなんて無茶が過ぎるぞ」
「遮断シールドを壊すのも無茶だと思うよ」
　後ろの事は一夏と遅れて入って来たシャルルに任せて、ジョルジュは戦線離脱を計る。反対側のピットに着いたときに二人の容体を確認したが、意識があった。
「そこまでにしろ」
「教官！」
　決して大きな声ではないが、アリーナ全体に響く凛とした声に振り返る。そこにはクリストフが使っていた［葵］でラウラのプラズマ手刀を受け止めている織斑先生がいた。あの人は銃弾が飛び交うＩＳ同士が入り乱れている戦闘地帯に生身で突入し、その場にあった武器で戦闘に参加したことになる。いったいどんな動きをしたのだろう。
「模擬戦をするなとは言わん。だが、アリーナの隔壁を破られては黙認しかねる。この決着は学年別トーナメントでつけてもらう。いいな」
「教官がそうおっしゃるなら」
　ラウラは織斑先生の言葉には素直に従い、ＩＳを解除した。
「織斑、デュノア、お前たちもそれでいいな？」
「あ、ああ……」
「教師には『はい』と答えんか、馬鹿者が」
「は、はい！」
「僕もそれでいいです」
　一夏が姉弟にするような返事をしてしまい睨みつけられるが、離れ

ているここからでも、その威圧が伝わってくる。この厄介ごとに相当怒っているのだろう。
「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」
よし、場が収まり、解散宣言が下された。今日は早く帰って本を読もう。
「サンソン、ローエンは残れ！」
「……」
「俺もですか!?」
読まれていた。駄目だった。遅かった。逃走の一歩目すら踏めなかった。
「ＩＳに対して生身で挑んだ勇気を褒めてやろう。特にサンソン、お前は持ち前の道具で機転を利かせていたな？　二人きりでゆっくりと褒めてやるぞ」
終わりだ。あの目は徹底的にやると言っているようなモノだ。
せめて――――

せめて、パンツだけは死守しよう。

8．二人の憎悪（前編）

「もういいぞ。服を着ろ」
「　……はい　」
　ジョルジュとクリストフは生徒指導室で持ち物検査と指導を受けていた。織斑先生は二人から没収した道具を箱に詰める。
「アルゼブラ製ナイフ仕込みのネクタイピン、インテリオル製ハンドクリーム、オーメル製ボタン型のカメラ、テクノクラート製小型爆弾仕込みの消しゴム、本当に色々持っているな」
　織斑先生はその品揃えに溜息をつく。因みに改造した制服は許された。
「これらの道具がなかったら、どうするつもりだった？」
「どうするとは？」
「生身でＩＳに立ち向かった事だ」
　使わなかった物もあるが、これらの恩恵がなければあの時ラウラに近づけなかっただろう。
「下手をすればお前たちも大怪我を負っていたかもしれないのだぞ」
「あの時は運が良かったです。射撃武器はＩＤが必要なので生身では撃てませんでしたが、近接ブレードと盾は生身で使えましたからね。……重くはありましたが、そういう道具と相方（クリストフ）がいたからあの時行動しました」
「それに俺達も相手見て喧嘩したんですぜ。ラウラ・ボーデヴィッヒのＩＳは威力は高いが連射の利かないレールカノン、六本のワイヤーブレード、あとは両手のプラズマ手刀が主な武装。これにマシンガンだのグレネードだのと持っていたら手出ししませんでしたって」
　生身での対パワードスーツ戦で注意する事は、一人で向かわないこと、動きを制限する弾幕を張れる武器と爆風で防御ごと吹き飛ばされないようにすることだ。アスピナ機関で習って来たことがギリギリ適応範囲内だったわけだ。
　二人の釈明に対し織斑先生は机を叩いて、説教する。
「馬鹿者！　お前たちがアスピナで習って来たことは、ノーマルＡＣ

に対してだろうがッ！　ＩＳは違う。量子変換させて武器を取り出すことができる。それに第三世代ＩＳはイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器を搭載していてネクストＡＣとは一味違った脅威がある」

セシリアのブルー・ティアーズはＢＴ兵器を用いることで一人で多角的な戦闘ができる。鈴の甲龍は衝撃砲を用いることでネクストではあり得ない不可視の攻撃を放つ。そしてラウラのシュヴァルツェア・レーゲンはＡＩＣ（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）が搭載されており、展開した範囲に触れた対象の動きを停めることができた。あの時シャルルが撃ったマシンガンの弾を全て停止させていた。アレで機体を停められてしまえば何もすることができなくなる。

「ボーデヴィッヒが本気を出さないと読んで行動したのかもしれないが、お前たちの行動は軽率で、危険なものだった。ミイラ取りがミイラになったかもしれんぞ」

ジョルジュとクリストフは俯いて話を聞いている。表に出ている武装、余裕綽々なラウラ、ＩＳを使っているとはいえ危険域まで攻撃されたセシリアと鈴の姿。それだけで飛び出したのは早計だったかもしれない。あの時の自分は熱くなっていて冷静に行動出来ていなかったのかもしれない。

反省の色を示す二人に対し、織斑先生は溜息と共に続けた。

「あの時のお前たちがとった行動は立派な、褒められることかもしれない。だが、次からはもう少し考えろ。特にサンソン、お前はよく飛び出しそうだ」

「……はい」

お叱りを受けて、懲罰メニューとしてまたも漢字の書き取りをさせられた。生徒指導室を出られたのは夕暮れ時だった。

「［園］って字難しくね？　あの四角の中に収めるの難しいんだけど」

「俺は［機］って字の方が嫌だね。右側のアレ、細かくて書きづらい」

枚数的には前回よりも少なかったが、途中から早書き勝負になり手

が疲れてしまった。感覚がおかしい手首を回しながら廊下を歩く。部屋に戻るついでに保健室に向かいセシリアと鈴の様子を見に行くところだ。意識は確認したが、容体が気になる。
「おい、なんだあの人だかり？」
「見舞いにしては、賑やかだな」
　クリストフの言う通り、保健室には部屋からあふれ出す程の人が集まっていた。はしゃぎ方からして怪我人二人が深刻な状態ではないと察せられるが、なんなのだ？　と思いきや急に冷めた調子で立ち去って行く。
「お邪魔するぜ」
「お二人さん、調子如何～？」
「あ、ジョルジュ、クリストフ。特別指導は終わったか？」
　保健室には一夏とシャルルが残っており、負傷したセシリアと鈴が腕や頭に包帯を巻かれてベットに座っていた。顔色も悪くないようで良かった。
「指導は終わったよ。ところでさっき女子が沢山いたけどどうした？
　見舞いにの雰囲気には見えなかったのだが」
「学年別トーナメントがタッグ制になったんだよ。より実戦的模擬戦をしたいからって」
「それで申請に来た女子達がお前らに群がって来たのか」
　タッグを組む機会で男子とお近づきになりたいという魂胆だろう。
「二人は誰かと組んだのか？」
「僕は一夏と組むことにしたよ」
　という事は学年で二人しかいない男性のＩＳ操縦者はそれぞれの身を守ったということになる。それが賢明だろう。
「お前たちはどうなんだ。トーナメントに参加できるのか？」
「それが……私たちのＩＳはダメージレベルが高く、トーナメントまでに回復が間に合いませんの」
　ＩＳには自己修復機能があり、ダメージを受けても時間をかければ直すことができる。だが、今回セシリアと鈴は生命維持危険域までダメージを受けてしまったので修復に時間がかかり、無理に戦闘を行お

うとすれば後々重大な支障をきたす恐れがあるとのこと。これはＩＳの未だに解明されていない自己進化が関係しているのだろう。
「あんた達。絶対優勝しなさいよね！」
「私たちの分まで頑張ってくださいな。心から応援いたしますわ」
「お、おう。任せておけ」
「ありがとう。二人の気持ちに応えられるように頑張るよ」
「残念ながら俺達がいるぜ」
「そうだぜ。ジョルジュは雑魚いが、俺はそう簡単に越えられねえぞ」
　代表候補生でありながら公の試合に出られないのは悔しいだろうに二人は応援してくれる。その気持ちに応えてやりたい。だが、クリストフの言葉が癇に障る。
「あ〝？」
「まぁまぁ、二人で組むならチームワークをもっと……」
「俺達は組まねえぞ」
「なんだと、どういうつもりだ？」
　クリストフが煽ったのは最初から組む気がないからだった。何故わざわざそんな事をするのかわからなかった。此処は流れからして一夏とシャルルのように男同士で組んでしまった方がいいはずだ。
「ちっちっちっ、ジョルジュ君。考えてみたまえよ。学年全体での戦力差というモノをよ」
　学年別トーナメントにおいての戦力差は二人組なので数は考える必要はない。ここで考えるのは練度や装備の事だろう。普段の自主練習で学園の訓練用ＩＳの使用申請の度合いによるが、大半の生徒はＩＳに乗る機会がそう多くない。
　履き慣れない靴で激しい運動をすると足を痛めてしまうように、ＩＳという靴に体が馴染んでいないと思うように戦えない。そう考えると代表候補生が強いということになる。この者たちは自分のＩＳを持っているのだから時間のある時に使って訓練できる。その上、第三世代兵器を搭載しているため苦戦を強いられるだろう。
「この学園の他の生徒は正直弱い。一夏は専用機を持っているとは言え、最近ＩＳについて勉強し始めたルーキーだ。代表候補生のシャル

ルと組むのはまぁーハンデと考えようではないか。そうなると残りだよ。ご覧の通りセシリアと鈴の二人は怪我で出場できない。目玉の選手が二人少ないのだよ。ＹＯ！」
「……だから？」
「我々はトーナメントを盛り上げなければならない。そうは思わないか？」
「俺達が組んだら無敵だから、あえて別れようと言いたいのか？」
「そうだよ。ＹＯ！ＹＯ！」
　テンションがウザイがなんとなくわかる。ジョルジュもクリストフもお互いに自分の方が強いと自負している。だからこそ優勝は自分が掴むと信じている。互いに組んで分かり切った勝利を掴んで面白いか？　優勝を目指して相手を倒すのに歯ごたえのある敵は欲しくないか？
　そして何より――――。
「そうだな……タッグでやる以上、優勝者は二人なんだ。お前に優勝をくれてやるのは癪だな」
「その通り。本来俺達は［ＩＳとＡＣネクストの交流］を目的にしているんだぜ。データのパターンは多い方がいい。……まぁそんな建前はどうでもいい。同じ意見だ。おめーの優勝席ねぇから！」
「フン、決まりだ。当たった瞬間に対戦表から消してやる」
「じゃあ、二人は誰と組むの？」
　盛り上がる二人の間にシャルルが質問を落とす。
「……必ずペアを決めないと出場できねえの？」
「ううん、期限までにペアが決まらなかったら、当日に抽選で決められるそうだよ」
　それを聞いて二人は一度顔を見合わせて数秒考えて結論を出す。
「じゃあそれだ。抽選で決まった子と頑張って優勝を目指すってことで」
「応。さっきみたいにたくさん来られても決められないからな」
　こうしてジョルジュとクリストフは互いに組まずに優勝を目指すことになった。

学年別トーナメント当日――――

アリーナの中央でジョルジュは空を見上げていた。ただ広い空を見ていると緊張が霧散していくような気がする。トーナメントの発表と共に抽選組の振り分けが決まったのだが。
「まさかこんな組み合わせになるとはな……」
ジョルジュはＡブロック一回戦で早速、一夏・シャルルペアと戦うことになったが、自身のペアはなんとラウラになった。いろいろあったが、一声かけることにした。
「よろしく頼むぜ、ラウラ・ボーデヴィッヒ」
「……私は私で勝手にやる。慣れ合うつもりなど無い」
「手厳しいな」
最近のカラードマッチでは団体での競技が多くなってきたが、初期のころは一対一のみしかなく、それで順位を決めていた。元よりリンクスは単独での行動が多いのだ。彼女の言う通りでも構わない。
「一戦目で当たるとはな、待つ手間が省けたというものだ」
「そりゃあなによりだ。しかしジョルジュを相手するのは厄介だな」
「大丈夫だよ。僕が付いているから」
カウントダウン中の三人が言葉を掛け合い、挑発と鼓舞をする。ジョルジュは一人で深呼吸をしながら僅かな暇を持て余す。
「「　叩きのめす!!　」」
カウントがゼロになると同時にラウラと一夏が叫び、一夏は一直線にラウラに向かう。それをラウラは正面からＡＩＣで対応する。
「開幕直後の専制攻撃か、分かり易いな」
「以心伝心でなによりだ」
「ならば、この流れもわかるだろう？」

ラウラは動きを停めている一夏にレールカノンを向ける。ああやって零距離で砲撃を当てるのが、彼女の基本戦術なのだろう。だが、シャルルが一夏の背後からアサルトライフルを撃ち、狙いを逸らさせる。初撃に失敗したラウラはＡＩＣを解除し後退する。
「チッ」
「逃がさない」
飛びあがって射線を確保したシャルルはアサルトライフルを放棄し、新たにサブマシンガンを二丁呼び出し、ラウラに斉射する。
シャルルの専用機、［ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ］はデュノア社製の第二世代型ＩＳのカスタム機だ。操縦しやすく汎用性が高い原型機の基本装備の一部を外す代わりに、後付装備用に拡張領域（バススロット）を原型機の二倍にまで追加してある。
普通それだけの装備を戦闘中に扱えるかと言われれば、難しい。銃器の一つ一つを理解し、イメージし、展開するのに時間がかかるからだ。それをシャルルは自身の特技高速切替（ラピッド・スイッチ）で補っている。様々なカテゴリの武器を使うことで距離に関係なく、そして器用に戦えるのがシャルルの強みだ。
いつまでも撃たれているのは可哀想なので、ジョルジュはシャルルの射線に割り込み切りかかる。小さく浅く、ただし多連に突き入れる。シャルルは左腕部に小型化させて装備している物理シールドでジョルジュの攻撃を防ぎ、右手の武器をショットガンに切り替えて発砲。ジョルジュは至近距離から迫る散弾を躱す為にバックブースターのＱＢで後退する。
「ちょっと面倒だな、お前……」
ネクストは格納武器を使う以外に武器の切り替えはできない。シャルルの多彩な攻撃方法はネクストにとって脅威だ。一夏はブレードしかないので御しやすいが、シャルルは柔軟に対応されるので、戦いのペースを崩され易い。
「早めに削っとくか」
「シャルル、代われ！」
ＱＢで急接近しドラスレを振るうとシャルルは飛びあがる。シャ

ルルの後ろにいた一夏が切りかかって来るので加速を止めずに一夏と鍔迫り合う。そのまま雪片弐型とドラスレを数回打ち合う。中学の頃に剣道をしていただけあり、その剣は悪くはなかった。
「やあああ！」
「隙ありだぞ」
やや無理やりな、上段切りをあえて受け止め、右手のマシンガンを一夏に向ける。方法は違えど、やることは先のラウラと同じことだ。学習しないのかと思ったが、ジョルジュは自身の行動も制限された事に気付く。斜め前方でシャルルがショットガンを構えている。しかも二丁だ。一夏はシャルルに確実に当てさせるために無理な攻撃をしたのだ。その行動にジョルジュは被弾を割り切り、一夏にダメージを与えるべきと判断する。
どうせ切り札の零落白夜を使えば自分を殺すからだ。右手のトリガーを引こうとした時――――。
「あっ！」
「うおぁ!?」
右腕、両足にラウラのワイヤーブレードが巻き付き、強引に後ろに飛ばされた。そのおかげでシャルルの攻撃は当たらなかったが。
「助かっ……おぉわ!?」
そのまま容赦なく地面に叩き付けられた。ショットガンを食らうよりはマシだったかもしれないが、僅かにＡＰが減った。素早く身を起こしラウラを見ると両手のプラズマ手刀で一夏と格闘していた。どうやらお目当ての一夏との戦いに邪魔だったモノ（ジョルジュ）を退かしたかったからあんなことをしたらしい。一夏と格闘しながらワイヤーブレードでシャルルを牽制している様から、「お前はいらん」という意思が伝わってくる。
「けど、俺も戦っているんでねっ！」
ボケっとアリーナの隅で立っていてもいいが、衆人観衆の中それはカッコ悪い。一先ずラウラが邪魔だと思っているシャルルにプラズマキャノンを撃ち、注意を向けさせる。
シャルルもサブマシンガンとショットガンで対応してくる。ＰＡ

に有効な武器でしっかり削りに来る。棒立ちになって撃ち合わず、ジョルジュは左へ回り込もうと動き、シャルルは後ろを取られないように同じように左へ動く。結果、二人で円を描くように踊ることになった。たしか円状制御飛翔（サークル・ロンド）とか言う動きだったか。

「すごいねジョルジュ。この動きで対応できるなんて」

「大した動きじゃないだろ」

ＩＳの浮遊・加減速――要は機動――に使われるＰＩＣ（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）は基本的に自動らしい。それをマニュアル制御しより柔軟な動きができるようにする訓練を円状制御飛翔と言うらしいが、この程度の機動ができないようでは中堅リンクスも名乗れない。

「そらぁ！」

「クッ！　ジョルジュか!?」

シャルルとの攻防の間に一夏に切りかかる。乱戦の最中に標的を変えるのは一時的に二対一を作りだせる有効な手だ。意外にも反応されたが、反対側からラウラが迫る。これで一夏は甚大なダメージを被るだろう。ジョルジュはそう思っていたが、右腕にワイヤーブレードが絡みつく。

「お、おい!?　まさか!!」

「邪魔だ」

「　ぐあああ!?　」

方やジョルジュは投げられ、アリーナの壁に叩き付けられる。方や一夏はプラズマ手刀の斬撃でそれぞれダメージを受ける。咄嗟にブースターを吹かしたが勢いを完全に殺せなかった。

「今のは邪魔してないだろうが！」

「教官の弟は私が手ずから倒す。先に倒されては困るのでな」

ジョルジュは呆れながら納得した。射線の妨害のみならず攻撃チャンスを作ってやっても拒絶する。そこまで一夏にご執心ならばそちらを存分にやればいい。ジョルジュはシャルルに専念することにした。

「パートナーに嫌われちゃっているね」

「ああ、デートプランが気に入らないってよ。エスコートの下手な男は背が高くても嫌われるらしいからシャルルは気を付けろよ」
「うーん、じゃあ僕のプランを評価してみてよッ」
「何が悲しくて男のデートなんかに付き合わなきゃならねえんだよッ」
　今度は銃撃戦ではなく、ドラスレによる近接戦闘に持ち込む。これまでシャルルが使って来たのは対応距離が違うが、全て射撃武器。ショットガンが危険だが自分が最も得意とする戦い方で挑む。
　シャルルはジョルジュの連続ＱＢの突進をギリギリで防ぎ続ける。高速で変則的に動くジョルジュに狙いを定められず、シールドや近接ブレード［ブレッド・スライサー］で防御してもじわじわこちらが負けてしまう。攻防の合間に相方にプライベートチャンネルで作戦を話し合う。
《一夏、大丈夫？》
《くっ……ちょっとキツイかもな》
　ラウラのプラズマ手刀は両手にある。二本のブレードを一本のブレードで防がなければならない一夏は、ワイヤーブレードの追加も受けて苦しそうだ。なんとか空いている手で払ったり、足で蹴ったりとかなりアクロバティックな動きをしているが、防戦一方だ。
《一つ作戦があるんだ。聞いてくれる？》
《もちろんだぜ。俺はどうすればいい？》
　一夏はシャルルの言葉を信じて、即答する。技量で負けていても二人はチームワークでは確実に勝っていた。やがて作戦を確認すると二人は動きだす。
「男ならチマチマ撃ってないで、ガツンと斬り合わないかよ？」
「男の子なら女の子を追わせる恋をさせるのが、良いって言うじゃない？」
「成程、確かにこっちはさっきから情熱的なアプローチをしてるなッ！」
（ここー）
　何度目かのジョルジュの突進を位置を合わせて流す。向かってき

た後には必ず後ろに駆け抜けなければならない。その先には――。
「うおおおお!!」
「一夏!?」
一夏はラウラの攻撃を掻い潜って傍まで飛んできたジョルジュに目標を変更する。先ほどの意趣返しだ。
「っと……!」
最初に乱戦を仕掛けた以上、ジョルジュに対応できないはずがなかった。適当に弾き飛ばしてシャルルに向かおうとするが、一夏はしつこくジョルジュに挑む。
「邪魔をするなと言ったはずだ」
「おまっ!? 普通に援護できないのか!」
ラウラはジョルジュも巻き込むこともお構いなしにレールカノンを連撃し、二人にダメージを与える。一夏は突然の横槍に堪らず後退するが、ジョルジュはそれができなかった。何故なら。
「クッソ! なんで二人から撃たれなきゃいけないんだよ!」
「ゴメンね。僕は敵だから」
シャルルに逃げられるコースをサブマシンガンの雨あられとアサルトカノンで牽制される。前からは大威力のレールカノン、一夏と反対方向にはサブマシンガン、その他はアサルトカノンの弾幕が待ち構えている。その撃ち方で一夏・シャルルペアの考えが読める。
ラウラは一夏を自分の力だけで倒したがっている。ジョルジュが一夏に干渉すれば、それを邪魔と判断しジョルジュも攻撃する。ラウラは自分が複数での戦いを想定していないようなのでそれでいいかもしれないが、一応の仲間であるジョルジュにとってそれは困る。
(恐らく一夏は俺を狙ってひたすら攻撃するだろう。クソッ、何で俺だけが一対三になるんだよ?)
「おおおお!」
「目につく奴から潰してやる!」
零落白夜を発動させ黄金を纏いながら一夏がまたも切りかかって来るので、決めた。ラウラのこだわりなど関係ない。自分を狙ってくる奴を倒して何が悪い? ラウラがいかに邪魔してこようとここで

一夏を脱落させる。
その後にラウラがどんな行動をとるか知らないが、もし向かってくるようなら叩きのめす。
「動くな」
「！？」
ジョルジュから見て左、一夏から見て右から、ラウラのＡＩＣにより一夏共々ジョルジュは動きを停められた。衝撃力の高い武器を受けると一瞬機体の立て直しが困難になるが、これは全く動けない。
（マジでステイシス（停止）だな。身動きが一切……ん？）
左半身はピクリとも動かないが右腕は動いた。どうやらＡＩＣにも範囲が限られているようだが、動くなら僥倖。一夏にマシンガンを向けた。
「二人の動きが停まったね」
「クッ!?」
「あっ！　野郎なんてことをっ！」
動きの停まったラウラとジョルジュにスナイパーライフルを撃つシャルルだが、抜け目のない事にジョルジュが動かせたマシンガンを撃ち抜いた。ラウラがＡＩＣを解除したことにより自由を取り戻したジョルジュは直ぐに後退しマシンガンの状態を確認する。
「……クソが！　イカレちまったぞ！」
「ごめんね」
「馬鹿野郎！　お前はたくさん銃持ってるからいいけど。こっちは火力っていうか、戦闘効率ガタ落ちだ！」
どんな戦闘をするかは機体構成（アセンブル）にかかってくるが、ジョルジュが言いたいのは、同時に使える武器の数だ。ロックオンすれば対象との距離や速度を出し、銃器ごとの有効距離を示すなどサポートを受けられるのだが、ＡＣの武装は［右腕・左腕］や［右腕・左背］のように左右の武装でないと使えない。
これは火器管制システム（ＦＣＳ）の処理ができないからだ。サポートを受けてもそれらを受け入れるのはリンクスだ。
例えるならばボール遊びだ。右手でお手玉しながら右足でリフ

ティングができるか？
　答えはできる奴はそういないだ。凡な者たちは大人しく両手でお手玉したほうがマダいい。ジョルジュは今、右側唯一の武装を喪失し、片側の武装で戦わなければならない。
「面倒な事をッ！」
《あっ、逃げられた》
《一先ず、ラウラを先に倒そう》
　ジョルジュはＯＢで一気に空へと逃げ、そこで静止した。撃破までいけなかったが、戦力を一人に絞れるので一夏とシャルルはラウラに集中する事にした。
「無駄だ。私の停止結界の前では……」
「はあああ!!」
「!?」
　ＡＩＣがサブマシンガンを撃つシャルルの動きを停めるが、ラウラは背後から迫る一夏から逃げる。
「……もしかして」
　その対応に一夏は違和感を感じ、一つの仮説を立てそれを試す為にワイヤーブレードを掻い潜ってラウラに迫るが、ＡＩＣでまたしても動きを停められ、レールカノンの砲身が一夏の顔を覗く。
「愚かな。何度やっても無駄だ……」
「……忘れているのか？　いや、意識できないのか？」
　眼前に置かれた砲身に目もくれず、一夏はラウラの余裕綽々な顔を見て満足そうに笑う。仮説は正解だ。背後から弾丸をまき散らしながら自分を追い抜く相棒が後を続ける。
「僕たちは二人なんだよ」
「くぅ!?」
　レールカノンを破壊され、苦しげに距離を取るラウラ。ＡＩＣは対象を集中しなければ効果を持続できない。誰かを停められている間に攻撃されると集中が乱され効果を無くす。更にワイヤーブレードの動きもラウラの意思によって操作されているため、ＡＩＣと併用できない。発生装置も手にあるのでプラズマ手刀も使いずらいだろう。

だから唯一自由に使えるレールカノンによる零距離射撃に拘ったのだろう。だが、そのレールカノンも壊された。

「行ける！」

一夏はもう一度零落白夜を発動しラウラに切りかかるが、その左手は開いたり閉じたりしていた。雪片弐型の白刃がラウラに届く寸前――――。

「あっ!?」

白式のシールドエネルギーが二桁になり、零落白夜が強制解除された。

「限界まで消耗してはもう戦えまい！」

「うわあああ！」

ラウラは最早満足に戦えなくなった一夏を蹴り飛ばし地面に叩き付ける。追撃しようとするが、シャルルが間に入り近接ブレードで切りかかる。

「一人ならば停止結界で……ぐぁ!?」

ラウラは一瞬この衝撃の意味がわからなかった。背後から撃たれた？ 何故？ 振り返ると一夏が相棒が放棄していたアサルトライフルを構えている。事前に使用許可(アンロック)してある銃ならばこうして消耗した一夏でも戦うことができる。

「この死にぞこないが――」

「何処を見ているの？」

「!?」

「この距離ならッ！」

ラウラの注意が一瞬、一夏に向かった隙に零まで距離を詰めたシャルルは左の小型シールドの中に隠してあった切り札を切る。

「盾殺し(シールド・ピアス)!?」

正式名称、灰色の鱗殻(グレー・スケール)というパイルバンカーだ。リボルバー機構にすることで、炸薬交換による連続打撃が可能となっており、第二世代では最高クラスの威力を持つ。

それがラウラの腹部に押し当てられ、シリンダーが回り出す。

「がはっ!?」

シールドバリアーがラウラの身を守るが、シールドエネルギーが大幅に減少する。シャルルは容赦なくラウラをアリーナの壁に押しやり連撃するが、一発のプラズマキャノンが紫電を散らす。
「ラウラ！」
「うわっ!?」
「大丈夫かラウラ？　システムの調整に時間がかかって……おい？」
今まで空にいたジョルジュがプラズマキャノンを撃って、シャルルを吹き飛ばし、ラウラの傍に着地する。状態を確認するが返事がない。シュヴァルツェア・レーゲンは激しい電撃を放っており、活動限界と見受けられたが――――。

「ぐぅあああああ!!」
ラウラの叫びと共にそれは醜く再起動した。

9．二人の憎悪（後編）

右手のマシンガンを壊されたジョルジュは一旦空に逃げた。片方が追ってくるならば、それの相手をしている間にラウラがもう片方を倒せると思ったからだ。ＡＩＣは解除条件が他者からの妨害なので、一対一の状況では無敵だろう。二人共、追って来なくてもラウラの戦闘技術ならば耐えられる。もしかしたら本人の希望通り単独で勝利してしまうかもしれない。

連携はともかくジョルジュはラウラの実力を信じていた。

「だからちょっと待ってくれよ」

ジョルジュが空に来た理由は、片側装備（このまま）で戦ってもラウラの足を引っ張るから。日々ＡＭＳの反応訓練をしているがまだ、同列処理ができない。ならば、裏ワザで並列にするまで。

「レフトアーム、パージ」

左腕に付けられたドラスレを外し、右手でキャッチし左手に持ち変える。ＡＭＳから右腕の武装固定具を解除し、ドラスレを装着し固定。

「エネルギーケーブル接続。レーザーブレード０２―ＤＲＡＧＯＮＳＬＡＹＥＲを確認。両腕部共に出力を調整。左は下げて右は上げる」

ドラスレを装備したことにより常態エネルギーが必要なので右腕により多くのエネルギーを回す。逆に使わなくなった左腕のエネルギーを下げて全体的な燃費の改善を図る。

「ああ、やっぱり難しいな……」

本来、整備用の器具を使ってやる作業なのに、ＡＭＳからの直接な調整は難しいに決まっている。だが、ゆっくり邪魔されず調整できるだけマシだ。

「テスト……あ、間違った」

一通りの調整ができたので、試しにドラスレを起動したが、刃渡り（ブレードレンジ）が半分ほどしか出なかった。元から短いドラスレがこれでは、下に戻っても満足に斬り合えない。やり直した。

「ムズイしマズイし、ヤバい」

眼下ではラウラが一夏とシャルルのコンビネーションでレールカノンを壊された。あれでレールカノンは勿論だが、ＡＩＣの優位性も無くなった。
「威力も低いし、燃費もちょっとイマイチだな……せめてレンジを……」
ＡＭＳの酷使で頭が痛くなる。それだけやってブレードレンジを調整できても本来のドラスレの性能は出せない。だから、裏ワザなのだ。満足に使えない装備は間違いなく戦力の低下。しかし今回は効率を優先する。滞空するためのブースターを停止させ、自由落下する。
「ＦＣＳの調整……両サイド共に良し。戦線復帰する」
地面に着く前にＯＢを起動させ、パイルバンカーでラウラを苛めるシャルルに接近しプラズマキャノンを撃つ。シャルルは完全に虚を突かれ、吹き飛ぶ。素早く銀髪の相方に無事を確かめる。
「大丈夫かラウラ？　システムの調整に時間がかかって……おい？」
シュヴァルツェア・レーゲンは激しい電撃を放っており、活動限界と見受けられた。ジョルジュは遅参を悔やんだ。あともう少し処理を早くできれば間に合うことができた。

（何故だ？　何故私が負ける!?）
シュヴァルツェア・レーゲンのシールドエネルギーは底を尽きそうだ。だが相手も、一夏も同じだ。あと二、いや一撃当てれば勝てる。それなのに機体は動いてくれない。
敬愛する教官の輝かしい経歴に泥をなじったくせに、遠く離れた異国に居ながら優しげな表情を浮かべて想われていた。それが実際に会ってみれば、へらへらと笑いながら雌に囲まれているロクデナシ。戦ってみれば大したことはない。自分のいた部隊の新兵にも劣る出来損ない。それなのに。
（どうして私が負けなければならない!?　方や新兵にも劣る愚図。方や一世代下の旧型。私の方が強いのに何故!?）

目の前でＡＣネクストがこちらを覗き込んで何か言っている。かつての敗北企業レイレナード社の機体アリーヤをベースにしたジュスティス。その複眼の下には銀髪紅眼の首輪付きがいる。コイツも教官に何かを評価された男。教官にあの表情をさせた男。
（私は認めない。この二人を認められない）
自分の方が優れている。遺伝子強化試験体（アドヴァンスド）として戦うために生まれた自分が強さにおいて負けるわけにはいかない。勝つための力が欲しい。そう願ったとき機械的な声が頭に響く。
【汝、力を、より強い力を欲するか？】
当たり前だ。織斑一夏を、ジョルジュ・サンソンを降す力を、奴らを倒す力を、奴らを排除する力が手に入るなら。何を捧げても構わない。だから――――。

「ぐぅあああああっ!!」
「「 !? 」」
ラウラの叫びと共にシュヴァルツェア・レーゲンは醜く再起動した。装甲が泥のように形質を変え肥大化して叫び声を上げるラウラを飲み込んでしまう。やがてそれは人の形を成していく。この状況に学園はアナウンスを響かせる。
〈非常事態発令。状況をレベルＤと認定。生徒は直ぐに非難。鎮圧のため教師部隊を送り込む……繰り返す……〉
閉じられる隔壁。鳴り響くアナウンス。一先ず生徒たちの身の安全を確保しているようだが、ジョルジュは目の前の光景を呆然と見ていた。黒い人形とでも言うべきか、シュヴァルツェア・レーゲンの原型を無くし、両肩に盾を浮かせた打鉄に似た近接型の機体。その手に持つのは。
「雪片……!」
一夏の持っている雪片弐型によく似た近接ブレード。それを見て怒りの雄叫びを上げる男がいた。
「千冬姉の真似しやがってええええ!!」

「お、おい!?」
千冬姉の真似ということは、現役時代の織斑先生のＩＳだというのか？　ジョルジュの脇をすり抜けて切りかかるその剣は荒々しく技が無い。ただ、渾身の怒りをぶつける為の剣であった。
「――――！」
「ぐぁ!?」
「……ぁ!?」
技は無い。だが怒りの勢いに乗せられた怯えも躊躇いの無い踏み込み、速度、そして威力を併せ持つ剛剣は呆気なく弾かれた。雪片弐型が手元から弾かれた一夏に追撃の縦切りが振り下される。一夏は徒手ながら左腕で身を庇った。その一撃で白式のエネルギーが尽きたのだろう。光を散らして白式が解除され一夏が生身になって膝をつく。盾にした左腕から血が流れている。
その間ジョルジュは情けない声を上げて驚いた。なんだあの動きは？　黒い人形の雪片がどう動いたかわからなかった。始点と終点は見えた。それくらい誰でもわかるが、その程度しか見えなかった。だが我に返る。弾き飛ばされたはずの一夏が、なんと生身で向かっていたからだ。
「この野郎おぉぉッ！」
「待て、一夏！」
黒い人形に向かって行こうとする一夏を無理やり抱えて飛ぶ。三十メートルは離れたあたりで一夏を降ろしてやろうと確認のために一瞬振り返った時だった。
「――――！」
「はっ!?」
黒い刃が眼前に迫っていた。虚を突かれた情けない声を上げながらドラスレで弾く。反射してくれた体に感謝するが、それはまだまだ早かった。
「――！――！――！」
「ッ！　ハァッ！　ガッ!?」
続く連撃をジョルジュは薄氷を踏むが如く思いで弾き続ける。そ

ここに銃弾の雨が降り注ぎ、黒い人形は後退する。ジョルジュもついでにプラズマキャノンを撃って牽制し後退する。
「ここは私たちに任せなさい」
「君たちは直ぐに避難を」
　四人のＩＳ装備の教師達が到着した。黒い人形を包囲しながら銃弾を浴びせるが、黒い人形は人で出来た檻を壊そうと暴れ回り、四人の教師達は互いを庇いながら戦う。
「ッ――ハァ、ハァ」
　突然、喉に込み上げてきた空気塊が、それまで息を一切吸っていなかったことを思い出させた。短い打ち合いだったが、ここまで緊張したのは久しぶりだった。
「降ろせよジョルジュ！　あいつをブッ飛ばしてやるんだ！」
　左腕に抱えられた一夏が何か暴れている。ジョルジュは自分の呼吸と感情とＡＭＳをできるだけ落ち着かせてから、一夏を放り捨てるように乱暴に降ろす。
「……落ち着けよ。アイツにムカついてんのはわかるが、アレをぶちのめす具体的な手段を教えろよ」
　白式のエネルギーは先ほど無くなった。一夏はＩＳを展開できない。いくら複数のパワードスーツ（ＡＣネクストとＩＳ）がいても黒い人形の動きは早すぎる。もしジョルジュが今の一夏と同じ状態ならば、大人しく退く。あの時と違い今のラウラは意識が無い。
　そう意識が無いのだ。さっきから教師部隊が呼びかけているが、返答は強力な剣のみ。例え生身であっても油断も容赦なく切り捨てるだろう。
「落ち着いてボーデヴィッヒさん！」
「――――！」
「抵抗を止めろ！　ＩＳを解除して……!?」
　黒い人形が教師を一人連れて行く形で包囲を破った。その後の連撃に耐えられずに一人脱落する。四人で作っていた均衡が崩れ始めた。
「下がれ！　私達が受ける！」

「――――！」
「任せ……きゃあ!?」
「！　!?」
　黒い人形はブレードを構えて前へ出た教師二人を追い抜き、後方支援に回った教師を切り伏せる。脱落までいかなかったが、連携を完全に崩された教師部隊は互いを庇い合いながら戦うが、苦戦していると言える。いつまでもつかわかったものではない。

「見たか？　この間、俺とクリストフがやったような無茶は今のラウラに通じない。そのまま行けば死ぬぞ！」
「それでもっ、俺がやらなきゃならねえ。あれは、千冬姉の剣だ。千冬姉だけの剣だ。それを、あんな風に真似しやがって」
　一夏の目には憤りと悔しさが同居していた。敬愛する姉の、世界最強の剣が粗末に模倣された事から湧き上がる感情で僅かに目がうるんでいる。
「千冬姉が初めて剣を教えてくれた時に、真剣を持たされたんだ。とても重くて、持ち上げることが難しくて、『それが人の命を絶つ重さだ』って、教えられた。だから剣を振る時にそれだけの覚悟が、心がいるのに、アイツは！」
　確かにそれまでの黒い人形の動きは相も変わらず、無駄がなく。恐ろしく。凄まじい太刀筋をしていた。ただ、気迫が無い。今も助けを求めるようにラウラの名を呼び続けている教師の言葉も聞こえないかのように、淡々と剣を振るう。
　何事も達人の技は無駄がなく。見入るような気がある。あの黒い人形はその達人並の動きを再現しているだけ。人がその域に至るまで積み上げた物、代わりに犠牲にしてきた物で綴られた物語（ドラマ）など知らないとばかりの棒振り。
「だから俺がぶちのめしたいんだ！」
「……」
　動機を聞いてジョルジュは一夏を見直した。自分と同じような憤りを持っていると。これでは分際を弁えて抑え

ている自分が馬鹿ではないかとも思った。黒い人形と最初に剣を交えた時にラウラの意識が無いことはわかった。コイツ(ラウラ)は無人機(自分がゾウオする)と同じような物になったと。一夏の言う通りだ。何を使おうが、人を傷つけるんだ。俺(ひと)の命はそんなに軽くないハズだろう？

「……つまり一夏。お前は自己満足のために、あのお人形さんをバラしたいのか？」

「そうだ。どう言葉を言い繕っても俺の自己満足だ！　それでも！俺がアイツを倒すんだ！　……バラす……まではいかないよ。中にラウラがいるハズだから」

一夏の回答にジョルジュは安心した。中身ごと切ってしまう程ならば、任かせられない。自分がやっても変わらないから。

「ならいい。後はエネルギーだな。直ぐにピットに戻って補給を……」

「待ってよ。二人共やる気なの!?」

それまで黒い人形がこちらに来ないか警戒していてくれたシャルルが、慌ててジョルジュと一夏を止める。

「先生たちが、あんな目にあっているのに勝てると思っているの!?」

大方、ジョルジュが一夏を説得させて退避させると思っていたのだろう。それなのに現在進行形で鎮圧に来た教師部隊が苦戦している戦場(ソコ)へ突っ込む気でいるのだから、慌てているのだろう。

「だから少しでも戦えるように補給しに行く」

「戦わなくても増援が来れば、状況は収拾されるんだよ。だから危ない目には……」

「シャルル」

「！」

大きな声ではないが、一夏が名前を呼んだけでシャルルは言葉を詰まらせた。

「心配してくれているのは嬉しいよ。だけどシャルルには理解できないかもしれないけど、男には[譲れない戦い]ってモノがあるんだ。だから許してくれ」

「そうだ。俺達の自己満足で突っ込むから、シャルルは付いて来なく

ていい」
「え……あ、うん」
　シャルルは一夏の言葉に何故か赤くなって俯く。どうして？　そういえば一夏の今の台詞に何か違和感がある。
「じゃあ、俺はピットに行くぞ！」
「あ、待って」
　補給のために走り出そうとする一夏を再度シャルルが引き止める。
「そんな事しなくてもエネルギーならあるよ」
「え？」
「エ？」
「ＩＳはコア・バイパスを介して、他の機体にエネルギーを譲渡することができるんだよ」
　シャルルはケーブルを取り出しチラつかせながら、説明してくれる。
「たぶん補給所には先生たちがいると思うから、引き止められて戻ってこれなくなるかもしれないから」
「そ、それならシャルルのエネルギーを貰おうかな」
　ここで覚悟を決めておいて戻れませんでした。というのはカッコが悪い。一夏は危うくそうなるところだった。
「ただし、僕の残りエネルギーも少ないから、たぶん部分展開しかできないよ。だからスラスター無しで近づかなきゃならないけど、あんな動きをする奴に近寄れる？」
「それは……」
「俺ガ抑える」
　ジョルジュが即答する。元よりそういう段取りを考えていたのだから。
「俺が抑えルカら一夏は止めを頼む。いいか？　絶対に俺がラウラを殺ス前にやってくれ」
「ちょ、殺すって!?」
　二人がジョルジュのイキ過ぎな発言に驚いているが、最初に一夏を連れて逃げようと抑えたＡＭＳの接触感度が、これから戦えるとなっ

て、再上昇してきているのだ。もしかしたら精神的にキテいるかもしれない。相手が一応有人なおかげだろうか、ラウラの事を気にかけていられるだけ、まだマシだ。
「時間が無い。行くゾ」
ブースターを吹かし、黒い人形に挑む。先ほどより動きが視えるようになっている。剣が振られてできる扇状の残像を捉えられる程に。まず、プラズマキャノンを撃って黒い人形に自分の存在を知らしめる。
「――！」
「そウだ。こっちで遊ぼう」
「――！」
黒い人形は限界近くまで追い込まれた教師から、ジョルジュにターゲットを変えた。上段突きが迫ってくるのを防ぐためにドラスレをかざすが、
「――――！――――！」
「ッ!?」
ドラスレをかざした瞬間に上段からブレードが消失し、下段から逆袈裟にせり上がってくる。やや遅れながら反応したが、またブレードが消え、今度は左から横薙ぎに振られる。その狙いは首。早すぎる切り替えしに、今度は防御が間に合わなかった。
「にっギィィイイッ!!」
首を捻って回避しようとしたが、躱しきれず、ヘッドパーツから火花が散り、深く抉られてしまった。アリーヤは複眼ではあるが左側のカメラアイが切り裂かれ、その下の肌を僅かに切られた。切られたのは目元。涙のように血が流れているが、目元は表情を現す部位の中でも特徴的な場所だ。そこから読みとれる彼の表情は――――。
「……痛イなッ！」
「――!?」
「お前はどウだ？　痛くナいのか？」
お返しとばかりの剣閃が黒い人形の胸部を激しくなぞる。その傷は黒い人形が後退したからできた物だ。少しでも後退が遅れていた

ら、黒い塊が二つに分かれていたであろう一撃。顔を全く変化させない黒い人形と対象にジョルジュは僅かに見える目元を緩めていた。
笑み。
ジョルジュは痛みが嬉しかった。マゾヒズムに似た感覚かもしれない。だけど、今の攻撃を受けて痛みも、悔しさも、怒りも表さない黒い人形と違うことを、ここに証明できたことが堪らなく嬉しかった。
「俺は痛いヨ。生きているんだ。痛みヲ感じられる人でアることが、嬉しくて、嬉しくて。お前より強い事がコの上なく楽しい」
再度接近し互いの刃をぶつけ合い。装甲を斬り合う殺陣にあることが楽しい。ああそうだとも、自分の命を賭けているこの瞬間が最高のスリルだ。惜しむべき事は相手が無人機（イシキ）と同じ（がない）ような物だということ。
「ケド、ムカつくんだヨォォォォ!!」
「――!?」
ジョルジュは、ＯＢの超加速で黒い人形を飛び越し、その背後に回る。今自分を殺しかねない刃に殺意が感じられないこと。それは彼にとって人（ヒト）への許しがたい侮辱だ。
忌々しい過去の記憶が脳裏に浮かんだ。自分たちの自由（せんじょう）を、その場にいない、遠くから眺めている誰かが、ボタン一つで蹂躙していく。そして自分たちに聞こえない高笑いを上げられるのが悔しくてならない。視界が徐々に暗くなる中で感情が激しく隆起する。怒りでも悲しみでも憎しみでも何でもいいのだ。心を籠めて殺して欲しい。自分たちは人なのだから。
「――!」
「消えろ、消えろ、消えろ……!!」
その殺刃を受け入れたくないという想いを黒い人形という機械的なナニかに対してか、意識を手放したラウラに対してか、もしくは両方に向けた斬撃を見舞う。黒い人形は背後に回られた不利を前進と

急旋回で対応する。回避のオマケとばかりに切りかかるジョルジュに回し蹴りを入れる。
「アッ、ガァ!?」
「――!」
腹に入った蹴りで体が［くの字］に曲がるが、吹き飛ばされないようにＱＢを吹かす。敵を確認しようと上体を起こした時に目に入ったのは、彼が嫌う殺意の無い刃。回避は間に合わない。ドラスレを装備する右腕は後ろに流れて直ぐにかざせない。ならば――――。
「――!?」
「レフトバック、パージ」
プラズマキャノンの閃光が黒い人形を貫く。残弾がゼロになり最後の仕事を終えたプラズマキャノンを機体から外す。これで武装は先ほど繋ぎ直した急ごしらえなドラスレのみ。軽くなった機体でＯＢによる突撃を行う。
「オオォォォォ!!」
黒い人形の中では自動学習機能でジュスティスのＯＢの推力が記録されている。記録された技の中で最も効果的な居合の型を選択し、迎撃の構えをとる。プログラムの中ではジュスティスが両断され、搭乗するジョルジュの無残な姿がシュミレーションされた。
「――!!??」
居合の有効範囲内に入りかけた時、ジュスティスが想定外の急加速をした。ＱＢで加速することも想定してあったが、それ以上だ。その誤差が感情のない黒い人形にとっての隙となった。

暗い視界の中で、あの人形が構えるのが見えた。恐らくこのまま突っ込んでも、チーズのように切られる。これまでの切り合いで、黒い人形に学習機能があるのは感じられた――もっともソレがない無人機は戦場で鉄屑をばら撒くだけになるのだが――ＯＢ、ＱＢは対応される。ならばそれを上回る速さが必要だ。
いつもはできないが、ここまで深く繋がったならばできるかもしれ

ない。視界は暗く霞む、だけど様々な感覚が鋭敏だ。日常生活では絶対に感じず、戦闘中に増えるブースターの感覚も。
信号を送れば自動的に動くブースターに少しだけ、少しだけ細かく信号を送る。返ってくる情報量も増えるが、今のジョルジュには処理できた。そして情報としてジュスティスとやり取りした事が現象となる。それは普段より多くの光をもって機体を押し出す。

［二段クイックブースト］、それはＱＢを一瞬で二回発動させるだけの事。言ってしまえば簡単な事だが、これを実行するには普通に操縦するよりも多くの情報を処理しなければならない。その為元からＡＭＳ適性の高いリンクスか、精神負荷を受け入れて無理に繋げた者にしか実行できない。
「単純なハードウェアにハ勘がないノか？」
だがその成果は大きく、雪片を握った黒い腕が宙を舞う。
ブツリ――
一瞬、そんな音が聞こえた気がした。ジュスティスの全ブースターが停止し、ジョルジュはＯＢの推力を殺せずアリーナの地面を滑走し壁に激突することで停止する。ぶつかった衝撃で機体が仰向けになり空を仰ぐ。頭はＡＭＳの酷使と地面の滑走でグラグラする。視界には砂嵐のようなフィルター越しだが、綺麗な青空が広がっている。そして耳には――――。
「零落白夜、発動ォォ!!」
約束通りに動いてくれた。イレギュラーな友人の声が届いた。それを最後にジョルジュは意識を沈めた。

「……」
眠りからの覚醒は陰りのある紅い天井が出迎えた。夕暮れの保健

室に自分はいる。
「私は……」
ＩＳを外され、その下に着ていたＩＳスーツを着ているが、右肩に包帯が巻かれている状態でベットに横たわっていた。金色に輝く左目［ヴォーダン・オージェ］を隠していた眼帯がない。傍らにあるかと、首を捻ると。
「気がついたか」
敬愛する教官――織斑千冬――が、椅子に座っていた。少しだけ覚えている記憶。だけどハッキリしないあの時の事が気になり、思わず聞いてしまった。
「何が……起きたのですか？」
「一応、機密事項ではあるのだがな……」
教官はそこで言葉を切る。この先を聞くか？　という意味だろう。軍人として機密に対しての重要性も、それに対する義務・罰則は知っている。ラウラは自分に起きたことを知るためにも静かに頷く。
「ＶＴシステムは知っているな？」
［ヴァルキリー・トレース・システム］、過去のモンド・グロッソの部門受賞者（ヴァルキリー）の動きを模倣（トレース）しパイロットに能力以上のスペックを付与するシステム。ただし、使用者の肉体に莫大な負荷が掛かり、場合によっては生命が危ぶまれる為、ＩＳ条約によりどの国家・組織・企業においても、研究・開発・使用すべてが禁止されている。
「それが、お前の機体に条件付きで起動するように隠されていた」
「……条件？」
「ああ、本当に巧妙に隠されていた。精神状態、蓄積ダメージ、そして……操縦者の意思。……いや、願望か……」
「私の……望み……」
心当たりがある。あの時の自分は何者にも負けない力が欲しいと願ったから。その力のイメージは――――。
「……」
「……ラウラ・ボーデヴィッヒ」
「は、はい」

沈黙のなかで、突然名前を呼ばれ、驚きはあったが、昔の習慣で顔を上げる。
「お前は……誰だ？」
「私は……」
今、名を呼んでくれたではないか？　だが、ラウラ・ボーデヴィッヒは今の識別記号。かつてはC―００３７と呼ばれていた。そう考えれば、私は、本当に誰なのだろう？　答えに窮していると教官が続ける。
「誰でもないなら丁度いい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィッヒだ」
「え……？」
どういう意味だろう？　それでは変わらないではないか？
「お前は私になれんぞ。いいや……なる必要がない」
「……!?」
その言葉で自分が抱いていた届かない願望を自覚した。自分が追い求めた力は、教官――織斑千冬――のような力。だが、それは教官の強さであって、自分――ラウラ・ボーデヴィッヒ――の力ではない。強さを求めても、自分にできない強さは危険な物なのだと。
ラウラの反応に満足したのか、教官は席を立ち、保健室を出ようとする。去り際に振り返らずに一言置いて行く。
「そうだ。隣にお前の相方が寝ているが、意外と寝顔が可愛いぞ、見ておくといい」
「……？」
相方？　ジョルジュ・サンソンのことだろうか？　寝顔を見ておけとはどういうことだろうか？　教官の指示ということもあり、ＶＴシステムの影響で痛む体を無理に起こし、カーテンで間切られている隣のベットへ近づこうとする。
「……ッ！」
「……無理に動くなよ。怪我させてんだから」
不貞腐れながら自分でカーテンを開いたジョルジュがラウラに声をかける。

「起きていたのか？」
「ちょっと前にな、先生は話を聞いていた俺にあてつけの意味で、あんな事を言ったんだ。馬鹿真面目に聞き入れるな」
　ジョルジュは頭に包帯を巻いて、左頬に大きなガーゼを張り付けていた。そんな彼の枕元にラウラの眼帯が置いてあった。
「おい、それは私の物だぞ」
「ん？　ああ、コレね。しかし……なんたってこんな眼帯を……！」
　それまで天井を見上げていたジョルジュが、初めてラウラを見た。そのまま硬直している。
「おい、どうした？」
「……いや、綺麗だなって」
「はぁっ!?　お、お前はいったい何を、言っている!?」
「その左目が綺麗だって言った。窓から夕陽が見えるけど、月も浮かんでいる」
「あ、な、なななな!?」
　ラウラは夕陽に負けないくらい赤くなり、窓の先に浮かぶ夕陽とジョルジュを見比べている。その様子を見てジョルジュは浅い息を吐く。
「その調子なら大丈夫そうだな」
「な、何がだ!?」
「体の調子。特に右肩は俺がちょっと切ったみたいだから」
「……ああ、これか」
　熱が一気に引いたが、肩を抱く。あの時に肩に痛みが走り、少しだけ意識を取り戻した。直後に目の前が開かれ、織斑一夏が受け止めてくれたのを覚えている。短い時間のハズだが、沢山質問した。
　何故強いのか？
「守りたいモノがあるから」、そう彼は答えていた。目の前の少年はどうだろう？
「ジョルジュ・サンソン」
「なんだよ？」
「お前はどうして強い？」

「……」
突然の質問に困っているのだろうか。少し考えてから彼は答えてくれた。
「……最初に俺がいた場所は……なんて言うか……生き残れる奴が強かった。たまたま強い奴が少なくて、弱い奴が多かった。だから俺は強い部類に入ってしまった」
一夏とは違う。一夏は自分の強さを否定して、やりたいことがあるから強くなりたいと言っていた。ジョルジュは自身の強さを否定していないが、まるで強くなりたくなかったかのように話す。
「今日みたいな戦い方は強さじゃない。みっともない私怨だ。最初にいたトコでちょっと……な……」
どんな戦いをして暴走した自分を倒したかはラウラにはわからなかったが、ジョルジュが過去を引きづっているのは伝わった。
「それから……いろいろあって、アスピナに流れ着いた。そこで良い指導者に会えた」
ラウラは親近感を感じた。戦うために作られた自分は最高レベルを維持することで、その有用性を証明し続けた。しかし、ＩＳの登場と、擬似ハイパー・センサーの移植手術の失敗により、出来損ないの烙印を押された。危うく居場所が無くなりかけたが、教官の指導で部隊最強に戻れたのだから。
「けど、ある日……最後の教えを残して別の場所へ行った。今の俺は強くなるために、その教えを反復している」
「……それは何だ？」
今、この男が強くある為にしている事とは？　ジョルジュは首のチョーカーをつつく。ネクストと繋がるためのＡＭＳを示しているのだろうか。
「この力（ネクスト）で何を守るのか？　何を変えるのか？　それが定まらないと強くなれないから『戦いの正義を見いだせ』って、機体（ジュステイス）をくれたよ」
「……正義」
軍隊でも戦うための大義名分が必要だ。軍人は任務を遂行するのみ。ただ強くなる事だけを考えていればよかったので、気付きもしな

かった。
　だがこれで、一つ合点がいった。織斑姉弟が何故強くあるのか。それは、大切な物を守りたいという強い信念があるからだ。先ほど気付けたから良かったものの、おこがましい事を考えていたとラウラは自虐する。そんな強い信念を持つ千冬（ヒト）になりたいだなんて、自分が一番になる為に、ただ他者を降すことを目的にしていた自分が、なれるはずがない。
「私は……私は戦うことでしか自分を表現できない。だが、それだけでは駄目なのだな」
「そうだな。中身空っぽじゃ、全部壊すだけのただの暴力だ。お前も探さないと駄目だな。はい、眼帯」
　ジョルジュがラウラに眼帯を返すが、何故ここにあるのだろう。自分は織斑先生とラウラが話している時に目が覚めた。織斑先生が眼帯を移動させた素振りはないのだから、それより前からここにあったことになる。
　その時、保健室の扉が開いて騒がしいのが入って来た。
「ジョルちゃーん！　起きた～？」
「うるさいな。頭にガンガン響く」
　本音が付けたあだ名を大声で呼ぶクリストフ。ここは病人が寝る場所だというのにお構いなしのテンションで迷惑だ。
「ガンガンする頭があるだけマシじゃん。お前、最悪戻って来れなかったかもしれないんだぞ」
「戻って来れたんだから良いだろ。で、見舞いなら十分だから帰れ」
　鬱陶しい奴が傍にいるとよくなるモノも悪くなる。出て行くように頼んだが、クリストフはジョルジュとラウラを見比べると、気味の悪い笑顔を浮かべて頷いている。
「あら、あらあら～。もしかしてお邪魔？　いや～ジョルジョルが女との会話を邪魔されたくないなんて、珍しい～。友達として女に興味持たないお前のこと心配してたけど、上手くいってよかったな～」
「そ、そんなんじゃねえよ。……ていうか上手くいったって何が？」
　可笑しな誤解をされては困るので言い繕うが、上手くいったとは何

だ？　まるで何かやったみたいに聞こえる。クリストフは眼帯を付け直したラウラに指さす。
「ん。その眼帯をお前の枕元に置いたの俺」
「は？　貴様、何のためにそんな事をした」
　自分の持ち物を勝手に動かされたラウラは、やや怒りながら追及する。
「二人が話すきっかけを作ろうと思ってね。ほら、お前らなんかギスギスしてたじゃん？　特にジョルジョルは激おこぷんぷん丸だったろ」
「……」
　表現がウザイが、確かにあの時の戦いは連携が取れていたとは思えない。邪魔されたとはいえ別にそこまで怒っていないが、
「すまなかったジョルジュ・サンソン」
「え……」
　ラウラが頭を下げていた。
「お前は勝負のために戦ってくれていたのに、私は足を引っ張ってばかりいた。すまなかった」
「……それはいいよ。今度また組むことがあったら、その時はよろしく」
「ああ……」
　ここで謝ることができたという事は、ラウラの中で大きな成長があったのだろう。周りを歯牙にもかけないあの態度が無くなったのであれば、それは嬉しい事だった。
「イイ話だな〜。……そんなジョルジュさんに残念なお知らせ！　はい!!」
　空気をぶち壊すクリストフが持っていたのはジョルジュの携帯端末だった。待ち受け画面にレイレナード社の連絡要員からのメールが届いていた。
「内容は見てないけどさ、ジェラルド先輩がローゼンタールから呼び出しメール貰っていたからさ……」

『貴君が出場した学年別トーナメントにて想定外の事態が起きたようですが、その収集に尽力したと報告を受けました。お疲れ様でした。本題に入りますが、貴君にやってもらいたいことがあります。２０：００に迎えのスタッフを送るので、彼らとともに――』

「どっか飛ばされるかもよ？」

『フランスへ行ってもらいたい。詳しい内容は現地で説明する。以上』

ジョルジュは深いため息をつき。ベットに身を沈めた。支援を受けている身なので基本的に断れない。まだ少し時間があるなら、それまでにできるだけ良い夢を観よう。

１０．フランスに泳ぐ者達

ある音声会議――――

「老人達は取引に応じたよ。あとは哀れな娘が到着するのを待つだけだ」
「それで、誰が行くんだ？」
「既に彼が発った」
「ん？　ああ……あの男か、いつも会議に参加しないが珍しく動いたな」
「フランスということもあって、思うところもあるのだろう。口が利けない訳ではないのだから、この件はあの男に任せておけばいいだろう」
「この取引の御かげでフランス政府に潜む［奴ら］をあぶり出し口止めとして活動資金を得られる」
「向こうからすれば後ろめたい事ばかり。それを始末する便利な手が伸びてきた。掴まずにはおれんだろう。我々の思惑は一致していた。それだけだ」
「それにしても国を振り回す程とは、奴らの影響力も侮れんな」
「恐らくだが貴方が産まれるより前から奴らは潜伏していたのかもしれない。それだけ底が知れない」
「成程、木の葉を隠すなら森の中……とは言うが、種の段階から隠しておけば、それはわからんよな」
「そうだ。こうして少しずつ排除しているが、既に手遅れだ」
「団長の帰還はどうする？　オーメルに潜む奴らは始末したのだろう？　そろそろ戻ってもいいんじゃないか？」
「それについては段取りが整いつつある。まぁ……今回と同じような方法だがな」
「芸がないな」
「だが、効果的だ。それで候補者の選定はどうなっている？」
「一人、面白そうな経歴を見つけた。既に実力を計る為に呼び出した。といっても足元を［さ迷っていた］のだがな」

デュノア家本邸――――

「お父さん……」

シャルル・デュノアは本邸に呼び出されていた。学年別トーナメントが終わった日の夜。一夏と夕飯を食べている時に迎えの役員が来た。デュノア社の社長にしてシャルルの父親が倒れたというのだ。何が起きるかわからないので直ぐに来てほしいとのことで、フランス政府が急遽手配した飛行機に乗って日本を発ったのだ。

一夏にこれからの事を話そうと決心した矢先に来た迎えが恨めしかったが、命には変えられないので指示に従った。

本当はある理由からフランス政府ともデュノア社とも縁を切ろうとしていたが、今は亡き母が愛していた男(ヒト)が最後かもしれないと思うと、非情になれなかった。

「こちらです。ここからはお一人で……」

「……ありがとうございます」

屈強な体格をした案内役が父親がいる一室の前から下がる。治療の際にシャルルと血の繋がりの無い義母が病院ではなく自宅を要請したそうだ。

フランスに到着したのは02：00だが、移動している間に明け方になっていた。それでも見舞うように政府の役員が催促したのでシャルルはここにいる。

ゆっくりと扉を開ける。部屋にはベットで寝る父と傍らにもう一人男が座っていた。

「初めましてシャルロット・デュノアさん」

「……!?」

「驚くことはない私は秘密を共有する者だよ」

「……そうですか……」

シャルルには秘密があった。本名：シャルロット・デュノア、デュノア社社長の愛人の娘として産まれ、会社の広告塔と織斑一夏のＩＳ白式のデータ奪取の為にＩＳ学園に送られた。
その際にフランス代表候補生として送られているので、政府もこの件には一枚も二枚も噛んでいる。
「父の容体は……？」
「今は落ち着いている。薬の効果で眠っているよ」
「そうですか……」
シャルルは一安心した。家族としては余りにも希薄な関係にあったが、どうやら自分は心配していたらしい。だが、それを知ったはいいが、これからどうしようと考えた。普段は別邸に住んでいた為、本邸（ここ）での居場所はない。
目の前の男が話しかけてきた。
「ＩＳ学園での生活はどうですか？」
「……充実しています」
「それは良かった」

男はしばらく月並みな内容ではあったが、初対面な自分との緊張をほぐそうと、会話を続けた。そして肝心なことを聞かれた。

「データは盗れましたか？」
「いいえ。チャンスがなくて」
シャルルの答えに目の前の男はあからさまにガッカリしたが、ハッと何かに気付いたように再度問う。
「じゃあさ。彼とヤッタりした？」
「……なんの事ですか？」
「ナニって、愛人の子なら得意でしょ？　そういうの」
「お母さんを悪く言うのは止めて下さい！」
母を侮辱されてシャルルは激昂した。愛人の事を何も教えてくれなかったとはいえ十年近く自分を育ててくれた大好きな母を悪く言われるのは嫌だった。それに同室の自分に居場所を提示してくれた

少年との関係をからかわれたようで腹が立つ。
「マジかよ。元から無茶だと思っていたけど、何の成果も無しかよ。使えなかったな」
「……使えなかった？」
　過去形で語られるのがおかしい。それではまるで――。
「用済みなんだよ君ら」
「何を言って……!?」
　男は眠る父親の頭をグリグリ撫でながら楽しそうに語る。
「社長の容体？　ウソウソ。薬で眠らせたのは事実だけど、元気にしているんだよ彼」
「……え？」
　呆ける中性的な子供の顔を見て男は笑い出す。
『ＩＳ学園特記事項、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない』だってさ。この特記事項は君が本国への帰国命令を突っぱねる手段になり得る。使いようによってはそのまま三年間学園に居座ることもできる。まぁそんな馬鹿な真似しても意味ないけどね」
「!?」
　シャルルは戦慄した。見抜かれていた？　確かに今の操られる生活から抜け出す為に、その特記事項を使って時間を稼ぎ、なにか交渉のカードを探そうとはしていたが、父親の仮病を使っておびき寄せられた。
　特記事項は頑丈な盾だが、本人が反応するような事態を用意すれば簡単にすり抜けられる盾でもあった。
「ハハ……アハハハハ！　いいね！　その表情。もしかして本当に居座ろうとでも？　馬鹿だよね～青春は早く過ぎるから三年なんてあっという間だよ。それに君はここで終わりだから」
　男はシャルルに銃を突きつける。
「!?」
「ある筋から君が、男ではなく女であるとバレちゃってね。公表される前に情報だけでもと思ったんだけど。何も無いとはね……せめて

対象を色仕掛けできていれば、君の体に付着したであろう遺伝子を使って解析を……」
そこまで言いかけて男は野卑な笑みを浮かべた。
「ちょっと待てよ。ヤッテないなら、女としての価値は高いな。なら殺したり牢屋に送り込むよりどこかに売り飛ばした方が……その前に僕が……」
「や、やだ。嫌だ!!」
銃をしまった男がゆっくりと近づく。シャルルは――シャルロットは女の声を上げて後退りする。そんな様子を嗜虐的な目で見た男は少女の後ろにある扉にむかって命ずる。
「この娘を取り押さえろ！　後でお前にも分けてやる！」
「……は」
「ひっ……!?」
扉が開き。先ほどの屈強な案内役が立っていた。代表候補生として生身での戦いは修めているが、体格が違いすぎる。雰囲気からしてかなり腕が立ちそうなのは会った時から察した。出口にこんな男がいては逃げられない。
案内役が一歩前に出る。シャルロットは恐怖で身が竦み、目を瞑る。心の中で祈った。
（お母さん……一夏……助けて……）
亡き母との十数年の思い出。
数日間の学園での生活。
帰りたいと願った。
心から信頼できる人達はそれぞれ別の意味で遠くにいる。助けを乞うても物理的に叶わない願いであった。
案内役の影がシャルロットに伸びて――。
「お、おい!?」
「？」
先ほどまでの優位性はどこへ行ったのか男が急に狼狽えた。
恐る恐る目を開けると、案内役が倒れていた。大柄な案内役の陰に

隠れる形になっていたのだろう。その後ろに立っていたのは――。
「……」
日本刀を持った黒い髪と眼の青年だった。
「な、なんだ!? お前はッ、お前なん……」
「……疾ッ」
「か……ぁ!?」
シャルロットは風を浴びた。感じたのはそれだけ。
青年は十メートル近くの距離を一瞬で詰めて、再び銃を取り出そうとした男の胸に日本刀の柄を打ち込む。距離もさることながら、青年と男の間には倒れた案内役と自分がいたのに、それを避けて走ったことになる。青年の身体能力、戦闘技術を物語る五秒だった。
「……」
「あ、あの……」
男が気を失い。助けられたのはわかるが、青年はこちらをじっと見て動かない。一体どういう状況なのだろう。混乱するがシャルロットは礼を言おうとする。
「た、助けてくれて……」
「……シャルル・デュノア」
「は、はい!」
礼を遮るように名を呼ばれる。シャルルの名で反応できるように教え込まれたので、反射的に返事をする。青年は今まで抜かなかった日本刀を抜くと、簡潔に用件を告げた。

「……死せ」
「……え?」
抜身の日本刀が金髪に振り下された。

フランス某ホテル――――

「フランスに来てもな……することなんて……」

レイレナード社が会社のジェット機を用意してくれたが、フランスに着いたのは現地時間の０２：００。ジョルジュはレイレナードのスタッフにホテルに案内された。準備が整っていないということで、二日の待機時間――ほぼ自由時間――を与えられた。

一日目は大分マシになったがＡＭＳの過剰接続の後遺症回復に努めたり本を読んだりと、インドアな休日を過ごした。だが、部屋に篭ってばかりも流石に飽きが来るので、散歩に出かけた。

「これも何かの機会だ。挨拶に行って来よう」

ただぶらつくのも味気ないので、目的地を決めた。幸いホテルから離れていないので簡単に行ける。途中で花を買い、一度だけ師匠に連れてこられたその地へ向かう。

「……？」

目的地は普段人気が少ないところだ。そこに一人だけ先客がいた。黒い髪と目を持つ青年。日本人だろうか。その青年は用が済んだのか、ジョルジュが立っている出入り口に歩く。

「……」

「……」

同じ場所に用があるだけの赤の他人なので、声をかけたりはしない。だが、すれ違いざまに二人は同じことを気にしただろう。

首。

チョーカー型ＡＭＳコネクタを付けていた。リンクスがここに訪れることは珍しくはなかった。此処はそう言う場所なのだから。ジョルジュは目的の場所に立つと、花を添えた。

「なにこれ？」

そこには独特の匂いを発する香が煙を揺らしていた。

翌日、レイレナード・フランス支社――――

ジョルジュは休憩室の長椅子に横たわって呟く。
「……疲れた」
支社に行くと、レイレナード・フランス支社の専属リンクス達三名がお出迎えしてくれた。
シュミレーションによる連戦というお出迎えを――。
最初に三人全員とタイマンでやり合った後に状況を変えて、一対多を行った。ノーマルを含む十三機を相手にしたり。仮想防衛目標を設けて守ったり攻めたり。時間制限を付けられたりと軽くシゴカれた気分だ。
喉の渇きを覚え、自販機へ行こうかと考え出したところ、対戦相手の一人がコーヒーを持って休憩室に入って来た。
「お疲れ様です。サンソンさん」
「ありがとうございます。マドレーヌさん。［さん］は付けないでください。僕の方が歳が下なので」
身を起こしコーヒーを受け取る。マドレーヌはレイレナード・フランス支社所属のリンクスで、白金色の髪を腰まで伸ばした泣き黒子が特徴的な女性だ。彼女は二十三歳。ジョルジュは十五歳だ。
「でも、訓練プログラムを全勝した凄腕じゃない」
「それでも年上の人に敬語とか［さん］付けは困ります」
「謙虚ね。じゃあ、ジョルジュ君って呼んでもいい？」
「はい」
「じゃあ、そうするわ。でも、少しは誇ってくれないと支社最強のお姉さんの立つ瀬がないのだけど」

今回、ジョルジュがフランスに飛ばされたのはフランス支社のリンクスとシュミレーションで訓練するためだ。時折こうして専属リンクスと契約リンクスとの間で戦力把握と交流を目的に企業が行う行事だ。

勿論、このことはＩＳ学園は了承している。

企業が専属にする理由は彼女のような信頼に足る人材を企業が常備軍として確保するためと、企業独自でネクスト技術を開発するためである。

ジョルジュはレイレナード社と支援契約を結んだ身だ。契約内容はカラードマッチおよび、その訓練などで消費する武器弾薬・機体の修理を負担してもらう代わりに、その戦力を契約する企業に提供すること。

正式な専属とは給金が違うことぐらいだ。

「一応、支援者として一段下の立場ですから」

「それでもやっぱりアスピナの人って事で皆ジョルジュ君の事、一目置いているわよ」

「まるで他の養成機関の人達は違うみたいですね」

「そりゃね。かつてのレイレナードは少数精鋭を謳っていたけど、今じゃそれなりの奴を抑えるために必死だもの」

ＡＭＳは先天的な才能によるものだ。よってその才能に鼻をかけて野心的な人物がいたりする。高い戦力だとしても企業が扱いに困る者なら抱えていても不利益しか生まない場合がある。

そんな人達は支援契約として一段下の扱いで一応傘下に抑えておく。専属になってもっと金が欲しいなら、相応の結果を示して企業に貢献しろという意味もある。

ちなみにジョルジュはレイレナード社とアスピナ機関の二つの組織からお金を貰っている。

アスピナ機関はオーメル社からの支援で運営しているが、他の企業

からも資金・物資の支援が行われている。その為、ＡＭＳ適性が高い。もしくは何か特異であったりすると、研究のために金を払って招待される。
　しかも衣食住は勿論、若者には一般的な教育も行う。そのおかげでジョルジュのような孤児でもそれなりの生活ができる。
　もっとも、リンクスになる為のＡＭＳ手術によって我が子を改造人間にしたがらない親が大半なので、アスピナ機関には元孤児が多い。
　上記の理由からジョルジュの生活は悪いものではない。企業の専属になる必要を本人は感じていないし、彼の師匠が『立場を固めてしまうと見えなくなる事実もある。若いうちは沢山の事を見なさい』という事でジョルジュは専属になることを遠慮している。
　コーヒーを飲み干した頃、マドレーヌが時計を見ながら立ち上がる。
「そろそろ時間ね。着替えましょう」
「何処かへ行かれるのですか？」
「何を言っているの？　ジョルジュ君も出席するのよ」
「……は？」
「もしかして聞いてないの？」
　どこかへ行く予定など聞いていない。フランス支社のリンクスとシュミレーションで訓練するとしか聞いていない。
「これからフランスの主だった企業が集まるパーティーがあるのだけど、うちからは支社長と私、そしてジョルジュ君が出席するのよ」
「は？　パーティー？　ちょっと待ってください。正装なんて持ってませんよ」
「大丈夫よ。支社から貸し出されるから。ほら、行こう」
　案内された更衣室にはベスト付きの黒いスーツが用意されていた。身長体重を始め、その他の身体的特徴はレイレナード社に登録されているのでサイズは丁度だった。師匠に連れて行かれて何度か参加したことがあるのでパーティーは初めてではない。そのおかげで年配の人への対応も学習した。
　ただ水面下の腹の探り合いとかを見ていたので、あまり楽しい印象

はない。
　更衣室を出てしばらく待つと、マドレーヌが隣の女子更衣室から出てきた。
「よく似合っているわ」
「ありがとうございます。マドレーヌさんも、綺麗です」
「ふふ、ありがと」
　マドレーヌの衣装は胸元と背中が開いた赤色のイブニングドレス。後頭部をリボンで装飾し、わざわざ調整室に行ったのだろう。首のチョーカー型ＡＭＳコネクタも華美な柄になっている。ジョルジュは自分の格好を見直して、尋ねる。
「本当に可笑しなところないですか？　初めてじゃないのですが、ドレスマナーに疎くて」
「大丈夫よ。いい男してるから自信持って。それにパーティーと言ってもそんなに厳しくないらしいから」
　マドレーヌはそう言って、ジョルジュの腕を組む。化粧によって更に美しくなった顔が近くなり、ジョルジュは慌てる。
「え、ちょ!?」
「エスコートよろしく！　どうしたの？　初めてじゃないんでしょ？」
「パ、パーティーは初めてじゃないですけど、その……女性の同伴は……」
「それは嬉しいわね！　お姉さんが初めてなんだ！」
　ジョルジュは嬉しそうに燥ぐマドレーヌに引かれながら、支社の車に乗り込んだ。

11．夜会と出会い

パーティー会場に着いたジョルジュは酒が飲めない歳なので、ジュースが入ったグラスを受け取る。マドレーヌはシャンパンだ。
「支社長はどうしたんですか？」
「あの人は気にしなくてもいいわ。それに顔見せみたいな目的で参加するのだから、私たちはのびのび楽しめばいいわ」
どうやら、レイレナード・フランス支社の者がパーティーに出席したという事実があればそれでいいみたいだ。要は体面だけ果たしておけば好きに飲み食いして帰ればいいのだ。
「フランスのお偉いさんたちか……」
周囲には派手な正装をした老若男女が思い思いに食べ・飲み・談笑している。会場に着いてから一度離してくれたが、また腕を絡めてマドレーヌが耳に顔を寄せてくる。
「どこかに可愛い女の子がいたら声をかけてもいいのよ？」
「マドレーヌさんのエスコートは……」
「気にしなくてもいいのよ。それにホラ、よーく見てご覧。ジョルジュ君が視線を向けると顔を背ける子達がさっきから沢山いるわ」
言われてみれば何人かの女子達が恥ずかしそうに照れ笑いを浮かべて、そのような振る舞いをしている。だがそれよりも気になるのは十代、二十代の若者が多い気がする。それに伴って老人たちがやる黒々しい腹の探り合いとかがなくて会場が和やかだ。
「可愛いわね。顔を背けてもチラチラ見ようとしてるのが……なんだか誇らしいわね」
「マドレーヌさんはカッコイイ男に声かけないんですか？」
「あら、言うわね君」
軽口を叩きながら二人は食事が乗ったテーブルに向かう。

あるテーブルの会話――

「それにしても随分大胆だな」

「仕方なかろう。今我々が会うにはこうするのが一番だろうて」

「その通りだ。諸君久しぶりだな」

「と言っても。直ぐにまた会えるがな」

「フン、その話は今はいいだろう。で、あれが候補者か？」

「まぁそうだな」

「戦闘データは送ったが見たか？」

「ああ」

「どうなのだ？」

「合格だ。フン……さすがだよ」

「……これまでの候補者と合わせて二十二人……か」

「時期もある。今回が最後の機会だ」

「では二次選考だな。さて、残れるかな」

「……」

「遅かったじゃないか」

「首尾はどうだ？」

「……」

「言葉は不要か……」

「小娘の事は終わりだ。今は久しぶりに集まれたささやかな時を楽しもうではないか」

「そうだな。最後の晩餐となるかもしれんからな」

「これ美味しいわね。隣のお肉よりソースがいいわね」

「そうなんですか？　どれも似たような味に感じます」

肉が置いてあるテーブルでマドレーヌとジョルジュは食べ比べをしていた。牛・豚・鳥、それらが様々な味付けがされて置いてある。ジョルジュには解らないが、どれも高級品だ。

「ジョルジュ君ってもしかして味音痴？」
「どうでしょう？　とりあえず肉の食感と味がするのは解ります」
「これと……これ……どう？　同じ牛肉でも違いがあるでしょう？　解らない？」
「……そうですね……肉です」
　マドレーヌが小さく切り分けた牛肉を食べさせるが、ジョルジュは簡潔に肉としか言わない。脂が大分違う物を選んだのだが、彼女は溜息をついた。
「顔が整っていて、強くて、礼儀正しくて、この歳にしては完璧なジョルジュ君にこんな弱点があったのね……」
「栄養になればいいじゃないですか？　それに何でも食べられますよ」
「そんな野性児みたいのじゃ勿体ないわよ」
　ジョルジュにとっては肉は［美味い食べ物］という認識だ。魚の味だって知っているし、焦げたモノの味も知っている。だが体を動かすエネルギーとなり、死なない為の食物の美味い・不味いを気にして食べたことはあまり無い。
　納豆が臭い。牛乳が不味い。魚を生で食べるのに抵抗がある。コッペパンが硬い。ＩＳ学園の食堂でそんな雑談が聞こえるが、ジョルジュにとっては溜息が出る話だ。

　それを食わなくても別の物が与えられ、受け取れるのだから。

　別に彼女たちを軽蔑などしていないし、嫌いな物は誰にだってある。中にはアレルギーで食べられない人もいる。しょうがない。
　しかし、そういう人達も食べる物を選べるように環境が整えられている。整えた大人達は立派だと思うし、その与えられた選択権で好きな物を選んでる彼女たちは幸せそうだから、それでいい。
　だから、目の前のマドレーヌのように食べ比べすることで味を楽しめることが、羨ましいのだ。
　そんな事を考えていたが、マドレーヌはふっと笑った。

「まぁでも生きることに真摯なようで良いと思うわ」
「ありがとうございます」

そうだ。その場にある物の何を飲み、何を食べても味を楽しめない。けれどそれで上等だ。生きている事が大事だ。ジョルジュはマドレーヌの言葉が素直に嬉しかった。

「ふ～、ちょっと疲れたよ……」
人の輪から少女が抜け出てきて、ジョルジュ達がいる肉のテーブルにやって来た。先ほどから随分と人が集まっていたので気になっていたが、少女が抜けると少しずつ散開していくので、彼女が中心人物だったのだろう。

「……」
「どうしたの？」
「あ、いえ……」
ボーっと、少女を見ていたジョルジュにマドレーヌが声をかける。
なんだかＩＳ学園にいる同級生に似ているなと思った。
身長が百五十ちょっとで、金髪を解いたら、たぶんあんな風に流れるかもしれない。中性的な顔立ちだからドレスを着たら、たぶんこんな風に似合うかもしれない。でも絶対にあんなに胸はデカくない。デカかったらおかしいが。
少女が皿を取ろうとこちらに近づき、目が合う。
「え!?」
「はい!?」
少女が何故か驚きの声を上げる。思わずジョルジュも驚く。
「どうかしたのお嬢さん」
マドレーヌが少女に声をかけた。
「あ、えと……か、かかか、カッコいい人だなー……って思いまして。すいません急に大声出してしまって」
「あら、奇遇じゃない。この人もあなたに見とれていたわよ」

「え!?」
「は!?　ちょ!?」
　少女の受け答えに何か察したようでマドレーヌが何かよからぬことを考えたようで、ジョルジュの背中を押す。
「よかったら二人で話してらっしゃいよ」
「何言ってるんですか!?」
（私の事は気にしなくてもいいの。男の子ならここで行っときなさい）
　小声でそう言うや自分の皿を持ってテーブルを離れていく。置き去りにされたジョルジュはこのまま少女を放置しては失礼になると思い。自分の口でもう一度誘った。
「えと、ご迷惑でなければ少しだけお話ししませんか？」
「……はい」
　少女は少しだけ考えてから了承してくれた。
　二人は自分たちの料理と飲み物を持って、会場の隅に置いてある休憩用の椅子に腰かける。
「申し遅れましたジョルジュ・サンソンと申します」
「えと、シャルロット・デュノアです」
「デュノアといえばシェア第三位のＩＳラファール・リヴァイヴの？」
「はい。そのデュノア社の娘です」
　顔立ち、名前と続いてやはり友人の関係者だった。
「もしや、お兄さんがいらっしゃるのでは？」
「はい。代表候補生に選ばれてＩＳ学園に転校しています。やっぱり男でＩＳを使えるというのは有名になっていますね」
「それだけではありませんよ。実は俺もＩＳ学園に在籍していて、彼の事は知っています」
「もしかして、カラードとＩＳ委員会の交流実験の選抜者ですか!?」
「はい」
「そうなんですか!?　兄の生活はどうですか？」
「まぁ、マジメな優等生ですね。着替えが異様に早くて可笑しなところがありますが、いい友人ですよ」

他にも女子に対して押しが弱くていつも苦労していそうだとか、時々余計な事を言う奴だとかあるが、身内のマイナス面を知らされたくないだろうから月並みなことを言っておく。シャルロットは笑って答えてくれた。
「兄は少し恥ずかしがりやなところがりますから。一緒に着替える時だって女の子の僕より恥ずかしがって……実は今実家に帰ってきているのですが、新パーツのテストの為にここにはいません。ジョルジュさんはどうして此処へ？」
「俺は支援企業との交流戦の為にＩＳ学園での試合後に直ぐ飛ばされたんですよ。……あれ？　どうしてわざわざフランスに呼び戻したりするんですか？」
ＩＳ学園は国家がお互いの新ＩＳとの比較や新技術の試験に適した環境だ。学園にパーツや最低限の役員を送り込みその場で試験すればいいはずだ。ジョルジュの場合はフランス支社の者達がマドレーヌの他にも多数いたから（ノーマル乗りを含む）ジョルジュ一人が来た方が手間がかからず、安上がりだからそうしたのだ。
シャルロットは目を泳がせながら答える。
「あ、えと……そ、その。まだ公開したくない製品なのではないでしょうか!?　すみません。僕は今回の開発にあまり関わっていなくて知らないんです……」
いくら身内とはいえ、会社の製品に関する事を全て聞いていないだろうし、もし知っていてもそれをジョルジュに教える義務など無いし、ジョルジュが聞く権利は無かった。
「……俺の方こそ無粋な詮索を申し訳ない」
ジョルジュは思い付きで聞いてしまった事をシャルロットに謝罪する。
「気にしないでください！　僕もその……上手い答えができなくて、ごめんなさい」
空気が悪くなってしまったが、学園での話に戻すことで何とかなった。その会話はマドレーヌがジョルジュを呼びに来るまで続いた。

空港――――

「お世話になりました」
「こちらこそ。世話になったわ」
パーティーから三日が過ぎた日。ジョルジュは日本に戻る為に空港に来ていた。見送りはマドレーヌ一人だ。必要ないと言ったが、彼女が車で送ってくれたので必然的に見送りに来た。
「またフランスに来ることがあったら、知らせて頂戴。デートしましょう」
「機会があれば、お願いします。見送りはここまでいいです」
「そう。じゃあ元気で」
「そちらこそお元気で」
別れの挨拶を残して空港に入る。
窓口で簡単な手続きをして、時間まで椅子で休むことにした。
「あれ？」
見覚えのある人物が座っていた。近づいてみたが、間違いなかった。
「ジュリアス先輩？」
「ん？　おお、ジョルジュか……」
長い髪をポニーテールでまとめた女性。アスピナ機関の先輩、ジュリアス・エメリーだ。高い身長とスレンダーな体型を持ちクリストフから「スーツ着たら良い意味で男に見える」と評されている。
「先輩どうしてここへ？」
「インテリオルからパーツテストを依頼されて、いくつかの施設を回っていた。これからアスピナへ帰るところだ。お前こそジェラルドとＩＳ学園にいるはずでは？」
彼女はインテリオルと支援契約している立場だ。だが、その機体は

オーメルグループのパーツが多く使われている。これは本人の希望でそうしている。
　アスピナ機関はオーメルから支援を受けて運営しているので、テストパイロット達に機体を与えてテストする際にはオーメルグループのパーツが推奨される。理由は簡単だ。アスピナ機関としてはその方が割引が効いて安上がりだからだ。ジュリアスはアスピナ・インテリオル両支援組織の特性を惜しみなく使っているといえる。
　ジョルジュはジュリアスに今回のフランス出張について説明した。
「そうか……パーティーがあったのか。楽しかったか？」
「ええ、老醜に満ちたパーティーじゃなかったので、初めて若者らしく楽しめたと言いますか……ええ、いい夜でした」
「なんだ？　よき出会いでもあったかのような顔だな」
　ふっと笑いながらジュリアスが目を細めてそんな事を言ってくるので、背筋がゾクリとした。
「……見ていたかのように言いますね？」
「図星か？　まぁ……女の感だ。どうした？　ガラにも無いと言いたいのか？」
「いいえ。電話で話しているようですが、ジェラルド先輩の学園での様子でも話しましょうか？」
「それで上手く逃げたつもりか？　いいだろう。お前たちの学園での暮らしぶりを聞かせてくれ。私も久しぶりの施設外なのでな。楽しい話を沢山持ち帰りたい」
　別に話を逸らしたつもりはないが、久しぶりに会った先輩との話を楽しみたかった。

　ジョルジュが日本に着いてから一つの大きな事件が報じられた。

【フランス代表候補生にして世界で二人目の男性操縦者、シャルル・デュノアが死亡した】

詳細はデュノア本社の施設で実験中に事故が起き。その爆発に巻き込まれたらしい。不運にもその時にシャルルはＩＳを持っておらず、絶対防御を展開することができずに爆発に巻き込まれ亡くなったらしい。死体はバラバラになって原型を留めていなかったそうだ。

このニュースは世界中で悲しまれた。純粋に一人の少年が死んだこともそうだが、非情な見解だがＩＳの研究において特異なサンプルが一人減ったのだから。

葬儀は粛々と行われ、シャルルのＩＳは後任の者に託されたそうだ。

その後任が――――――

「初めまして。シャルロット・デュノアです。兄の代わりのようではありますが……皆さんよろしく願いします」

フランスで会った金髪の少女がＩＳ学園一年一組の教壇で自己紹介していた。

「……」

「ひとまず後処理は完了した」

「……応」

「こちらとしては今騒がれては困るので手を出したが、珍しく積極的に動いたな」

「……」

「盟友の友人の娘……義理としては遠いと思われる」
「……最後」
「そうであってくれ。ただ存在を消すのは簡単だが、再び表の世界に出すのはかなり無理があるのでな。いずれどこかで綻びが生じ彼女に困難が訪れるであろうが、下手に手を出すなよ」
「……了承」

１２．臨海学校

シャルロットが転校してきて数日。
「お休みなさい。デュノアさん」
「お休みなさい。みんなもまた明日ね」
放課後の自主訓練を終え、寮への帰り時につくシャルロット、ジョルジュ、一夏は他の生徒と別れの挨拶を交わす。
「ここでの生活も大分、慣れたようだな」
「うん。二人のおかげだよ」
「気にすんなよ。こうして訓練に付き合ってくれてるんだからな」
最初は皆、兄の不幸を憐れんだりして、少し近づきがたい空気になっていたが、フランスでの面識があったジョルジュと元から優しい一夏の協力で今はクラスの人たちと友人と呼べる関係になっている。
「シャルロットの戦い方は変幻自在だ。遠距離から抑えつけてもいいし、近距離で削ることもできる。恐らく誰にとっても脅威になるから、いい相手になるな。俺にとっても一夏にとっても」
「やっぱり豊富な武装は羨ましいな」
射撃武装を一切持たない（機体の都合上持てない）一夏はシャルロットとの戦いには煮え切らないものがある。ライフルの攻撃を掻い潜ったらサブマシンガンやショットガンの弾幕を受け、それを越えても近接ブレードで受け止められる。そしてショットガンや牽制行動で距離を取られて、またライフルで撃たれる。これの繰り返しだ。
「わかっているだろう？　近づいたら何としてでも離れちゃいけないんだ。鈴と切り合っている時も時々離れようとするが、アレは駄目だ」
「でも、甲龍の双天牙月は二振りで手数が……」
「だから、それが駄目なんだ。一度距離を置いて立て直そうにも格闘しかできないんだから、不利でも格闘で削らなきゃお前は勝てん」
「それはわかっているだけどなー」
「でも、組んだ時の一夏は頼りになるよ」
戦闘について語り合っている間に三人は寮の２０１５室の前に来

ていた。フランス遠征から帰った後に部屋の再調整がされジョルジュはこの部屋で一夏と二人で寝起きするようになった。
「じゃあ、またなシャル」
「うん。またね二人共」
　シャルロットと別れたが一夏の呼び方に違和感がある。
「なんだ今の？」
「なにがだ？」
「いや……シャルって……」
「ああ、愛称だよ。付けてくれって言われたから……」
「なるほど。鈴と同じか……」
　鈴は自分から簡単に呼ばれるように周囲に愛称を勧めている。呼びやすいのでジョルジュもそうさせてもらっているが、シャルロットにも今度呼んでもいいか尋ねようと考える。
　寮とはいえ自分たちの部屋なので寛ごうと一夏は自分の荷物を机に置くが、ジョルジュは窓側の自分のベットにカバンを投げる。すると「ムグ……」とくぐもった声が聞こえた。その正体は――。
「……何をするのだ」
「俺の寝床で何をしているんだラウラ？」
「その前にどうして気付いたかを教えて欲しい」
　ラウラが布団を跳ね上げてカバンを除ける。彼女は小柄な体をしているので、布団に隠れていてもわかりにくかった。実際に一夏はラウラの登場に驚いている。
「布団の右側に印があるだろう。それと左下にも？　それが今朝あった位置よりずれている」
　ラウラと一夏は言われた印を探した。すると二か所に裁縫の時に作る玉止めで印されていた。やろうと思えば中学生にもできそうな初歩的なマーキングだが、使われた糸が布団と同じ白色であったせいで気付きにくいモノになっていた。
「むう……今度からは位置を修正して潜ろう」
「やめろ。で、なんでそこに居た？」
「嫁と一緒に寝るのは当然だろう？」

「その意味が分からないよ」
フランス遠征から帰った日にラウラに無理やり唇を奪われて「お前を嫁にする！」と宣言された。その動機が「気に入った相手を嫁にする風習があるから」だからしい。
「そ、その……私は恋愛ごとに疎くてな。本国の副官に聞いたのだ」
「俺も経験が無いが、その部下は優秀なのか？」
「ああ、今の私には心強いアドバイザーだ！」
「そうかい……」
遠征から帰って来てから何度もこんなことがあった。夜中に気配がして起きてみれば何故か全裸のラウラと格闘することになったり、朝方に顔面を近づけて来たりといろいろだ。その元凶がドイツにいるのでは止めようがない。なんとか説得するしかない。
「あのなラウラ……」
「あと、あのクリストフ・ローエンという男からも助言を……」
「わかった。アイツの口が二度と開かないようにしてやる」
ジョルジュは部屋から飛び出て数日前まで寝起きしていた部屋を目指す。あの戯けは余計な事をしてくれる。苛立ちを露わにしながら扉を開けると。

「頑張れー!!　ビットマン!!」
元凶はアニメを見ていた。
「そのタイミングでＡＡは駄目だ！　そこで使っても威力は低いし、目くらましも効果は薄い！　ああ、ＧＡマンが来てくれた！　一旦下がってコジマチャージを！」
「オラァ！」
「うわ!?　いきなり蹴ってくるなんてどうしたんだい？　アリャーマン」
「俺は！　企業戦士じゃ！　ねぇ！」
「でも、去年アスピナの劇で、ハリと二人でやってたじゃん。『スーパーアリャーブラザーズ』を……」
「あれは！　他が！　やらなかったからだー!!」

クリストフはこちらの攻撃を上手く躱しながら、昔の恥ずかしい話をぶり返してくる。アレは恥ずかしかった。年少の被験者達との交流を目的に毎年劇をやっているが、運悪く担当になってしまった。
特に「「　俺達が正義の味方。アリャーブラザーズ!!　」」とか二度とやりたくない。というより。
「昔の事はどうでもいいんだよ！　ラウラに適当なこと吹き込みやがったな！」
「適当じゃないよ～。お前の気を引くにはどうしたらいいか、聞かれたから真剣に考えて教えたぜ」
「例えば……？」
「お前と会うときはできるだけ肌を露出するといいとか……」
「『できるだけ』どころか、全部脱いだぞ！」
「それだけ頑張ったってことさ！　いいねぇ！　色男!!」
「やっぱり遊びじゃねえか！」
案の定クリストフはジョルジュをからかう気満々でラウラに余計な事を吹き込んだようだ。テレビの画面でもアクアビットマンとアリャーマンが戦っているが、あちら（ビットマン）は瀕死にも関わらず、こちら（クリストフ）は余裕そうにジョルジュの足を避ける。お互いに部屋の物を壊さないように配慮しているが、部屋中を使った大立ち回りだ。
画面の中ではオーメルマンの一角、弟のオーギルが登場し瀕死のアクアビットマンを抱えて飛び去って行く。そしてこちらも――――。
「やぁ。ただいま」
ジェラルドが部屋に帰って来た。
「あ、お疲れ様でーす」
「お帰りなさい先輩」
「いやぁ疲れたよ」
表情と声から察することができたが、随分と疲れているので、ジョルジュは邪魔にならないようにクリストフから手を退いた。それをいいことにニヤケながら口笛を吹くクリストフを明日の朝一でぶちのめすと心に誓う。
「新パーツはどうでした？」

「ああ、良いパーツだと思うよ……」
　ジェラルドは先ほどまでローゼンタール社から送られてきたパーツをテストしていたらしい。
「そういえば来週から君ら臨海学校じゃないか？」
「そういえば、そんな事言ってましたね」
「たぶんそこでＩＳの専用機持ちは各国・企業から試作パーツが届けられて、試験するだろう。ＩＳもＡＣもこの時期は試作品を出しまくるな」
　ジェラルドはベットに腰を下ろしながら二人の後輩に尋ねる。
「君たちには何か試験依頼は来ていないのか？」
「自分には何も……」
「俺にはトーラスから『すんごいの』が届きますね」
　クリストフは相変わらずだが、コジマ系兵器に扱いに企業連で名が通っており、コジマパンチはオーメルが開発した物だが、アレに限っての話だがデータ取を任されている。本来ならトーラスから新フレーム［アルギュロス］を使って微調整範囲のテストをしてくれと言われているが、本人曰く「あっちも可愛いけど、ランスタンはアンティークだ！」という我が儘が通っている。
　ジョルジュは完全に戦力として支援を期待されているので、あまりパーツテストの話は回って来ない。
「テストも勿論大事だが、初日は自由行動らしいじゃないか、遊べるのか？」
　ジェラルドはどこかズレた感性を持つ二人の後輩を心配する。
「海って遊ぶところなのか？」
「実験するところだろう!?　ＰＡが高密度の水の中でどれだけ展開できるか、これは全てのリンクスの行動範囲に関わる重大なテーマだお！」
「いやいや……海は足場の悪い砂浜を使った訓練のためにある。蹴ったはずの地面が陥没・滑ることによって、素早い行動ができなくなり、その分体力を使うから整備されたグラウンドを走るのとは別な要領が必要とされ……」

「あーもうわかった」
思った通りの反応をする後輩二人にジェラルドは溜息をつく。
「二人のその考えはそれぞれ間違っていないけど、ゆとりのある考えを持たないと周囲を疲れさせてしまう。これを機に二人は海で遊ぶことを覚えよう」
「でも、どうすれば……」
「そこはクラスメイト達に合わせればいい」
二人はやや納得がいかないものの、頷きジョルジュは部屋を出て行った。ジェラルドは最後に一つ心配事をした。
「水着……大丈夫だよな……」

七月六日――臨海学校初日

「「海だーーー!!」」
宿泊先の旅館に挨拶をして荷物を置くと一同は水着に着替えて白い砂浜に出た。少女達は状態の違う二種類の青を前にして叫ぶ。まるで突撃前の死兵だ。
「あれぇ？　男子は？」
「織斑君はさっきまでセシリアにサンオイル塗ってたけど、泳ぎに行っちゃった」
「あと二人は……」
男子を探す女子生徒達は旅館から歩いてくる二つの影を認めて、硬直する。
「何の実験をするかわからないけど、ソレ意味ないだろ？」
「ジェラルド先輩に言われただろう？　海にいるという気分を持ったまま難問に挑むための格好だよ」
クリストフは何が入っているか不明だが大きな荷物を背負っている。それはそれで怪しいのだが、問題は格好だ。大きなその身体を日に晒しながら男物の水着を履いているのだが、その形状は逆三角。所謂ブーメランパンツだ。股関節の拘束が無く、泳ぐの適した水着なの

だが、その上に白衣を着ているのだ。
一目見ていったい何をしたいのかわからない格好だ。
「そう言うお前もヤリ過ぎだろ？」
「そうか？　海で泳ぐのが遊びなのだろう？」
クリストフの格好も奇怪だが、隣のジョルジュはある意味クリストフより海に相応しいが、やはり目立つ格好だった。
「ダイビングスーツなんてガチじゃねえか！」
全身を黒いスーツで覆い。頭には潜水用のゴーグルを付けている。酸素ボンベが無いのは重量の問題で運べなかったからだろうか、これに銛を持っていれば極限生活番組に出演できそうである。
「ホラ見ろ！　お前の格好に皆が引いているぞ！」
「馬鹿な！　どう考えても変質者はお前だろ！」
「「　二人共だよ!!　」」
お互いに責任を擦り付け合っていると一斉に言われた。
「クリストフ君は何がしたいかわからない！」
「ジョルジュ君は目的地が深すぎて付いて行けない！」
「俺はこの中にある装置を……」
「俺は海の遊びといえば魚の鑑賞かと……」
「あ～もう！　いろいろ置いて来て！」
結局、鷹月に二人共引きずられ旅館へ連れて行かれた。彼女の指示により、潜水ゴーグルと怪しげなカバンを旅館に置いた二人は再び海に出ることを許された。
「海で遊ぶって言うのは何も考えずのびのびと泳いだり、ビーチバレーをしたり、そこまでの準備は要らないんだよ」
「そういうモノなのか……」
「そういうモノ！　気を張らずにちょっとやってみよ」
「……」
鷹月達に誘われてビーチバレーをしてみたが、戦闘と似たモノでチームでの連携が難しかった。だが、徐々に連携が上手くいくようになり相手のコートにボールを叩き付けることができた時は思わず拳を握った。アスピナではあまり野外での遊びをしたことがなかった

が、なかなか楽しいモノだと思った。
その後、全身をタオルで包んだ最初のジョルジュ（変質者）とクリストフと同じような目で見られていたラウラが恥ずかしがりながらも水着姿を晒して、数分で逃げたり。一夏と合流して男子チーム対女子選抜チームで試合をしたりと楽しい時間は直ぐに過ぎて行った。

海での自由時間の後は夕飯。ＩＳ学園は多国籍の生徒が集まる学園なので、正座の文化が無い生徒がいる。慣れていないと正座は苦しく食事を楽しめないので膳の席とテーブルの席を用意された。ジョルジュは楽なテーブル席を選んだ。
「ほう……」
主に外国籍の生徒は揃って美しく盛りつけられた料理に感嘆する。日本の食事は綺麗に盛られており視覚から楽しむ事ができるのは味覚が正常ではないジョルジュにとって嬉しい。
膳の席で一夏がセシリアに刺身を食べさせている。まるで恋人のようなその行為に回りが憤慨するが、織斑先生が現れて一喝して鎮まる。いつもの事だが、「鎮めるのが面倒だ」なんて酷い事を言う。
「……ッ!?」
刺身の横にあった緑の塊を食べた時に鼻に何かが突き刺さるような感覚がした。昔ＡＣを池にいるときに落とされ溺れた時に感じた鼻を詰める感じじゃない。なんだコレは!?
「わ、わわ……大丈夫!?」
「……ッ」
正面に座る眼鏡の少女がお茶をくれる。火傷に気を付けて飲むといくらかマシになった。
「……ありがとう今、鼻がこう……ナニカされたんだけど、何なのコレ？」
「わ、山葵……それに含まれるアリルイソチオシアネートは揮発性の物質で殺菌効果あるけど、それが舌や鼻を刺激するから……」
「成程。俺の舌の痛覚は正常なんだな……」
「……」

迂闊だった。周囲の食べ方をよく観察してから箸を伸ばせば良かった。その証拠に離れた席でクリストフが「ブッ!? なんじゃコリャ!? こんな緑は許せねえぞ!」なんてお手本をやってくれたのに。その後も相変わらず味はあまり感じなかったが、食事を楽しんだ。

正面に座った眼鏡の少女をどこかで見たと思ったが、彼女の事を四組の生徒だと思い出したのは食事が終わり、風呂に入っている時だった。

「部屋割りはまぁ……妥当だな。位置も」

一夏、ジョルジュ、クリストフの三人の男達は織斑先生の隣の部屋で寝ることになっている。これは旅行ということで気分が舞い上がった女子達の襲撃を備える為らしい。

「こうやって室内でできるなら何で昼間にやろうとしたんだよ?」

「海水に触れた場合も試したかったからな……十三番のデータを」

「うい」

現在。クリストフが昼間に持ち出そうとした小型の粒子実験装置を使っていくつかの実験をしている。装置は歪なダンベルのような形をしている。球状の粒子を生成し任意の機動をさせる空間に通路で繋がれた先には粒子に対してアプローチする物を置く場がある。

コジマ粒子の生成は例え無害化があっても厳重に注意しなければならない。その事を考慮しているのかクリストフはコジマとは別の無害な粒子を用いている。

「十三番回ったぞ」

「よし。そんじゃ観測開始」

クリストフはそう言うと紙屑を装置の中に入れ粒子の流れを見る。そしてエアガンを装置に入れ発砲する。粒子がどのくらい乱れるのかを観察するためだ。他にもレーザーポインターで光の曲がりを見たり、小型の扇風機で風を入れたりする。

「エアガンは二番より弾いたな。だけど風でスゲー乱れたな。これじゃ空気抵抗軽減が生かされないな」

「並べると、エアガンは十三番、レーザーは五番、風は八番だな」
彼らがやっていたのはＰＡの整波パターンの検証だ。エアガンは実弾、レーザーはそのままレーザー兵器、風は機動をそれぞれ想定している。ＰＡは実弾・レーザー兵器への防御だけでなく、空気抵抗を軽減し機体の高速機動に大きく貢献している。
「まぁ使い分ければいいか……」
「そんな余裕があんのかよ……」
今回のクリストフ自作の整波パターンだが、大概のリンクスはこんな事を自分で調整しない。各企業の専門のコジマ技師がやるようなデリケートな事だからだ。下手ないじり方をして機体の防御力を下げてしまったりジェネレーターへの負荷を上げて継戦能力を落とすからだ。
紙屑や道具を片付けてクリストフはトランプを出す。
「さーて実験も大体終わったし遊ぼうぜ！　ポーカーしようぜ！」
ここで検証したデータは明日からの機体の運用試験で実際に試す。今日できることはここまでなので、アスピナで良く――ほぼ――やっていた遊びをする。
「なんか賭けるか？」
アスピナでも簡単な娯楽としてカードゲームは流行っていた。大概そういう時はくだらない物事を賭けていた。
「じゃあ五回負けた奴はビール飲む。どうだ？」
「教師の隣室で飲酒か……恐ろしいな」
ジョルジュは了承の意でカードをシャッフルし三つの山札を作る。双方共に三つの山札から好きにカードを引いて五枚の手札を作る。
「そういえば一夏は？」
「隣の部屋だ。お前が長風呂に浸かっている間に呼ばれていた」
「姉弟水入らずってか……」
「……」
ジョルジュは黙ってハートとクラブの２を残し三枚のカードを捨てる。そしてもう一度三つの山札からカードを引き交換する。クリストフも二枚のカードを交換する。

「すまねぇ……」
「気にするな……お互い様だろ」
ジョルジュもクリストフも親兄弟などいない。元からいない者を悲しんだりすることは無い。羨ましくは思うが。アスピナで目の前のクリストフ（コイツ）やハリという友人が得られ、優秀な先輩たちや後輩もいる。親代わりなら師匠もいた。それでも過去の境遇を引きずっているのは確かだ。
どうやってそれを脱却するかは検討もつかないが、いくら後悔を積んでも人生だ。師匠も後悔を積んできた。何も言わないがコイツだってなにか積んでいる。だったら、どれだけ後悔を積んでも自分に納得のいくように先を生きるべきだ。
「カードの交換は済んだな。どうする？　勝負するか？」
「するさ、お隣のご一家にあてられて勝負の熱を逃がしたりはしない」
ポーカーに限らずいろんなゲームに自分たちでルールを付けることがある。アスピナのローカル・ルールでは持ち札が悪いときは勝負を降りることができる。ただし、三回降りたら一回負けにカウントされるが、ジョルジュは自信があったので勝負に出た。
「せーので、ドン！」
同時に場に出した手札を見てジョルジュは天井を仰ぐ。
「早速負けかよ」
「あと四回でビールな」
「アレ？　でも確か俺って何かの書類でフランス国籍だったから、飲酒ＯＫかも」
あの国では酒の種類によるが十六歳から飲酒が可能だったはず。誕生すら曖昧だが、検査では推定、六月十日生まれと言われた記憶があるので、ジョルジュはもう十六歳と言える。
「じゃあ負けて一緒に飲んじゃえよ」
「バーカ。あの織斑先生だぞ。消灯時間の見回りとか勤務が残っているのに酒なんか飲むかよ」
いくら成人でも、あの真面目な先生がこんな時間から飲むはずがない。ありえない。ありえない。と言いながら負けた人がシャッフル

するというルールによりジョルジュはカードに手を伸ばした。家族ネタであえてこちらの手札をほのめかしたのにコレは負けるハズだ。

１１が二枚、２が三枚でフルハウス。
ジョーカーを混ぜての９のファイブカード。
次は勝ってやる。そう意気込みジョルジュは三つの山札を作った。

13．暴走する祝福

七月七日――臨海学校二日目

初日は自由時間だったが、二日目からはＩＳの実地訓練だ。学内のアリーナより広く地形も海が加わり大きく変化した環境ならではの訓練ができる。専用機持ちは企業や国から送られてきたパーツのテストも同時に行う。

「ふわぁ～ぁ」

「クリロ～。大きな欠伸して眠れなかったの～？」

「ま～枕変わったら寝つきがな～」

本音とクリストフが話をしている。結局あの後のポーカーでクリストフは五連敗しビールを飲むハメになった。いざ飲もうとしたところ織斑先生が巡回してきたので飲むことはなかったが、あの男は布団で寝るのが初めてだったので寝付きにくかったのだろう。他の生徒たちも何人かそんな様子だ。

「苦手競技やる前に体調崩していたらキッチーわ」

「がんばろ～」

「お～」

二人で独特な会話をしているが、今日行う訓練にはカラードマッチの競技「スピード・ストライク」も予定されている。

スピード・ストライクは海上に浮かべた多数のターゲットビットを攻撃し点数を奪い合う競技だ。ビット自体は攻撃をしないで海上を漂うだけだが、ある程度のダメージを与えないと点数に加算されないのでラストアタックを奪い合ったり、策敵と移動の速度で相手より多くのビットを仕留めることが重要だ。

クリストフがこの競技を苦手とするのはアルビートルではこの競技は絶対勝てないからだ。総弾数六発のコジマライフル、使用回数の限られた近接武器コジマパンチ、軽量二脚だが速度が遅い方のフレーム。彼はせめて武装を変える事を強いられる。

「さて、俺も武装を変えないとな……」

人の心配などしてられない。ジョルジュも機体構成（アセンブル）をブレード主体の近接機から射撃機体に換装した方が有利だ。
「やっーーーほーーー!!」
突撃型ライフル０４—ＭＡＲＶＥ（レイレナード）を用意していると遠くから女性の声がした。あまりにも場違いな声なので思わず作業の手を止めて周囲を見回す。
織斑先生が頭を抱えて深い溜息をついていた。
「ちーーちゃーーーーん!!」
青と白のワンピース、頭には機械の兎の耳、満面の笑みを浮かべた女性が砂塵を巻き上げながら織斑先生へ飛び掛かるが。
ガシッ！
そんな音が聞こえそうなくらい見事なアイアンクローで織斑先生は騒がしい女性を抑え込む。頬に指が食い込むくらいの剛力で締め上げられても女性は騒がしさを抑えず、むしろ嬉しそうに叫ぶ。
「会いたかったよ。ちーちゃん！　さあ、さぁ、ハグハグしよう愛を確かめ……」
「うるさいぞ束」
「相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ！」
織斑先生の容赦ないアイアンクローを受けても普通に喋れる時点でこの女性が只者ではないとジョルジュは察した。女性はアイアンクローを容易く抜けると、頭を抱えて屈みこむ女子——箒——に向き直る。
「やあ！」
「……どうも」
テンションが正反対な挨拶を交わしている。
「久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。おっきくなったね、箒ちゃん。特におっ……」
女性が指先をくねくねさせながら、箒の身体的特徴を言おうとしたところ、箒は無言で木刀を女性を突き入れた。剣術を修めているだけあって見事であったが、防具もないのでかなり危険なのだが。
「殴りますよ」

「殴ってから言ったぁ……酷いよう……」
元気そうだった。ジョルジュだけでなく他の生徒、クリストフまでもがこの突然の侵入者に困惑していた。それを見かねたのか織斑先生は女性に面倒くさそうに言う。
「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」
「えー、めんどくさいなぁ」
そう言いながらもクルリと回ってやってくれた。
「私が天才の束さんだよ。ハロ～。終わり」
極めて簡潔に、大雑把で速攻で自己紹介されたが、周囲の生徒は騒がしくなる。ＩＳに携わる者なら勿論、世界的に有名な人物なのだから。
「束って……」
「ＩＳの開発者にして天才科学者の……」
「篠ノ之束……」
世界のパワーバランスを変えた双璧。ＩＳの開発者が目の前にいた。ある日突然、行方をくらませ世界中から捜索（追わ）ている人物が姿を現した。何の目的で？
「さあ、大空をご覧あれっ!!」
「「「？」」」
その場に居合わせた全員が束の指さす空を見上げた。すると――
キィーン――ドカーン!!
「「「!?」」」
砂浜が揺れるほどの勢いで空から正八面体の塊が落ちてきた。機体運搬用のカプセルだろうか？
束が手に持つリモコンを操作するとカプセルが量子変換され中にあった赤色が日の光を受ける。
「ジャーン！　箒ちゃんの専用機こと紅椿（あかつばき）！　全スペックが現行ＩＳを上回る、束さんお手製のＩＳだよ！」
「私の……専用機……」
真っ赤な装甲。打鉄を更に流形にしたような箒に似合う機体だった。

「さあ！　箒ちゃん、さっそく最適化（フィッティング）を始めようか。事前に情報は入れてあるし、最新データを入力するだけだけどね」
「……」
　箒は心奪われたように、紅椿を見上げてから乗り込んだ。初めて自分専用の機体を与えられた時はああゆうモノだろう。自分が扱い易いように調整することができ、ＩＳの専用機となればいつも身に付けることができる。それもＩＳの開発者お手製ともあれば最高の力だろう。
「身内ってだけで専用機って……」
「Ｃランクで特に優秀ってわけでもないのに……なんか、ずるいね」
　そんな様子を嫉妬と妬みを持って見ている生徒たち。それに対しも束はヘラヘラと反応した。
「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？　有史以来、世界が平等であったことなんて一度もないよ」
「「　……　」」
　生徒たちは押し黙るが、ジョルジュは無意識に首のチョーカー型ＡＭＳコネクタを弄る。
　生まれる環境や才能が変われば、みんなと一緒なら、そう考えたこともある。
　だけどこの世で平等を実行しようとしたら何も残らなくなると過去に解を出した。
　腹を空かせた十人の子供がいてパンは一日に一つだけ、飢えを凌げるのは一日に一人だけだとしたら？
　一日ごとに食べる人を順番に決める？　七人目あたりから後ろは死ぬ。
　分ける？　皆十分に満ちることができず、緩やかに衰弱していき果てには死ぬ。
　皆食べない？　数日後に皆死ぬ。
　例え話が極端ではあるが、皆が毎晩パーティーをやって豪勢に食えるか？　それができるなら今頃世界中でやっているハズができていない。高い水準で平等は不可能。低い水準で平等は可能だ。だけど、

万人に平等に与えられたモノはちゃんとある。それは――
「おい」
「!?　クリストフ……」
「どうした？　コネクタの調子が悪いのか？」
「いや。そろそろ新しいのを買おうかと思ってな……」
「なんだ？　自分に気にかけてくる女ができて色めいてんのか？」
「そんなんじゃねぇよ」
リンクスにとって命綱となるコネクタの不調を心配されたのに、くだらない考えをしていた何て言えないので適当に誤魔化した。
束は空中投影型のディスプレイを六枚呼び出し、膨大なデータをなんでもないように処理していく。あっという間に処理が進められ。
「はい終わり。んじゃ、試運転といこうか！　まずは飛んでみよう！
箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」
ＩＳの調整については無知な二人にとっても早すぎることがわかった。やはり彼女は天才なのだろう。箒が紅椿で飛びあがるが。
「すごい」
「なんて速さ……」
専用機持ちの中でも速度を競えばセシリアのブルー・ティアーズか一夏の白式が挙げられるが、紅椿の加速はそれに匹敵するか凌駕している。
「じゃあ刀を使ってみよう！　右のが雨月（あまづき）で、左のが空裂（からわれ）ね。それじゃ、武器特性のデータ送るよー！」
束がまたもや空中投影ディスプレイで高速タイピングし紅椿へデータを送信する。受け取った箒は一通りデータに目を通すと二刀を抜いて構えた。
「行くぞ雨月！」
箒の繰り出す刺突と同時にエネルギー刃が放出され空に浮かんでいた雲を吹き飛ばした。雨月の威力を満足そうに確認すると束はミサイルポッドを展開した。
「じゃあ今度はこれを撃ち落してよ。はーいっと」
撃ち出されるミサイルに動じることなく箒は空裂を横薙ぎに振る

うと帯状にエネルギー刃が放出され、全てのミサイルを撃ち落とした。
　その場にいた生徒たちは戦慄した。現行ＩＳを上回るというというだけあって、圧倒的だった。高速で動き回り攻撃を当てさせない。どんなに逃げても、その速度と雨月の刺突レーザーで撃ち抜かれる。雑兵や先ほどのような弾幕攻撃は空裂で払い飛ばされる。
「やれる……！　この紅椿ならっ！」
　今のところの付け入る隙はパイロットが未熟というところだろう。その場に居合わせた実力者達はそう判断した。
「たっ、た、大変です！　お、おお織斑先生っ!!」
　山田先生が慌てた声で叫びながらこちらにやってくる。彼女が慌てているのはいつものことだが、しかし表情から察するに今回はいつも以上の慌てようだった。
「……山田先生、どうしました？」
「こっ、これをっ！」
　山田先生が織斑先生に小型端末を渡すと、その画面を見た織斑先生の表情が曇った。
「……特命任務レベルＡ、現時刻より対策を始められたし……」
「そ、それが、その……」
「……ここでは生徒たちに聞こえるな。詳細は後にしましょう」
「は、はい」
　小さな声でそこまで話し、それからは軍用の暗号手話で遣り取りを始めた。周囲の生徒に内容を知られないようにだろう。
「そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますので」
「了解した。……全員、注目！」
　山田先生が走り去ると、織斑先生は手を叩いて生徒たちの注意を引き付ける。
「現時刻より、ＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。本日のテスト稼働は中止。各班、機材を片付けて旅館に戻れ。指示があるまで各自室内待機。以上だ！」
「え……？」

「まだ準備しか……」
「何が起きたのですか?」
突然の事態に生徒たちが騒ぎ出す。織斑先生はざわめく生徒たちに一喝した。
「とっとと戻れ！　なお、許可無く自室から出た者は身柄を拘束する！　いいな!!」
「「　は、はいっ!!　」」
織斑先生の剣幕から、ただ事ではないと感じた生徒たちは慌てて片づけを始めた。生徒たちが動きだしたのを確認すると織斑先生は向き直る。
「専用機持ちにはやってもらいたいことがある。それからサンソン、ローエン……篠ノ之も来い」
織斑先生の剣幕に加えてＩＳの専用機持ちとリンクスが呼ばれた。どんなことが起きたかジョルジュはおぼろげながら予想した。

作戦本部となった大座敷の畳の上に投影型ディスプレイを映し、周囲には教員たちが何らかの情報をモニターしたり解析したりしている。呼ばれた八人は織斑先生の話を座って聞いている。
「これから話す内容は、全てが要軍事機密だ。口外することは許されない。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と、最低でも二年の監視がつけられる。覚悟のない者は今すぐに退室して構わない」
誰も退室しようとしないので、織斑先生は先を続けた。
「二時間前、ハワイ沖で試験稼働中だった、アメリカ、イスラエル共同開発の第三世代型ＩＳ、銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）が暴走し、監視空域を離脱したとの連絡があった。以後これを福音（ふくいん）と呼称するが、情報によれば無人のＩＳらしい」
「無人……」
ガリィ――

一夏の呟きと同時に異音が大座敷に響いた。
「おいジョルジュ……」
「ウルセエ。黙って聞いている」
ジョルジュが歯を食いしばった音だ。クリストフが後ろからジョルジュの肩に振れるが、当人は煩わしげに振り払う。学年別トーナメントの時に見せたあの状態だ。
「サンソン。感情的になって作戦に支障がきたすようならばお前を外すぞ」
「問題ありません。続けて下さい」
普段と様子の違うジョルジュに織斑先生は確認をとるが、溜息をついて説明を続けた。
「その後、衛星による追跡の結果、福音は約五十分後、ここからニキロ先の空域を通過することが分かった。学園上層部からの通達により我々がこの事態に対処することとなった」
学園上層部からの通達？　どういう経緯でそうなったかはわからないが、確かに数台の訓練機と専用機が五、いや今は六機になったが、それだけのＩＳと二機のネクストを用意している今のＩＳ学園は強力な遊撃隊とも言える。
だが、話が出来過ぎではないか？　軍は何をやっているのだろう？
動けない理由でもあるのか？
「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」
極秘任務という性質上、部外者の介入を阻止しなければならない。それに暴走しているのは第三世代のＩＳだ。中途半端な武装では戦うこともできないかもしれない。学生とはいえ専用機持ちが駆り出されたのはそういう理由だろう。
「それでは作戦会議をはじめる。意見があるものは挙手するように」
「はい」
セシリアが手を挙げる。
「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」

織斑先生が頷くとディスプレイにデータが表示される。
「広域殲滅用の特殊武装……私と同じようにオールレンジ攻撃が可能ですわね」
「威力と機動の特化型……厄介ね」
「この特殊武装が気になるね。連続しての防御ができるといいんだけど……」
セシリア、鈴、シャルロットがそれぞれの見解を述べる。ラウラが手を挙げた。
「このデータでは格闘性能が未知数です。偵察は行えないのですか？」
「無理だな。目標は現在も超高速飛行を続けている。アプローチできるのは一回が限界だ」
一同が更に作戦を練っていると、パソコンに向かっていた山田先生がこちらを振り返る。
「今、偵察のデータが届きました」
「何!?」
未知の敵が動いている姿を見れるのは大きな材料だ。一同はディスプレイを凝視する。
「私たちよりも近い場所で別の試験を行っていた一団が同じような任務を受け、先に仕掛けたそうです。これはその映像です」

白い雲の間を飛び回り時折、空と海の青が映りこむ。高速戦闘中に撮られた物だからだろうか、映像は少し粗いが目標を映している。
銀色の装甲。背後に大型のウィングスラスターを構えたＩＳ。あれが福音だろう。その福音が高速で動き回る何かと戦っている。
《残弾、残り三十パーセント》
淡々とした調子で時機の確認をする声が入る。恐らくカメラの視点主だろう。ジョルジュとクリストフは聞き覚えがあった。リンクスＣＵＢＥ。ジョルジュ達の先輩で、高いＡＭＳ適性とひょろりとした体型の持ち主で、その体型とＡＭＳからアスピナ機関の実験機「ソブレロ」をベースにした「フラジール」に搭乗している。

ソブレロは空力特性を極限まで突き詰めた超軽量級の二脚型ネクスト。空力・空気抵抗はＰＡで解決できているのに装甲・体積を犠牲にしてまで速度を突き詰めた、ある意味狂気の機体だ。
だが、その速度は馬鹿にできずパーツによってはＶＯＢに匹敵する速度を単独で出せる。
しかしそのフレームはジョルジュが最近覚えた漢字【穴】のような形をしているので細い体型の人しか乗れない。視点主なので映像にその機体は映っていないが、もし映っていたらこの場にいる者達は引くだろう。
《パートナー、そちらの弾数は？》
《心配するな。足りる》
「まさか!?」
聞き覚えのある声が入る。記憶が正しければ、その男はオッツダルヴァ。彼はリンクス戦争時にレイレナードに所属し、主に本社［エグザウィル］の防衛に努めた。戦時中あらゆる組織の攻撃をことごとく撃退しその名をあげた。
今はレイレナードが傘下に入る条件として引き抜きを受け、オーメルに所属している。
オッツダルヴァの搭乗機［ステイシス］はオーメル製新型フレーム［ライール］をベースにしている。ライールはレイレナードの技術をふんだんに使われ、アリーヤ由来の高速機動を軽量化したことにより一層速くなっている。今のＩＳ学園より先に仕掛けたと聞いてフラジール以外でどれ程の戦力で挑んだか気になったが、納得した。
カラードマッチの一対一の記録に置いて一位。現役リンクス最強と言われるこの男が出撃したならば戦力に不足はない。
戦闘の構図としては高速で逃げ回りながら、特殊兵装のレーザーを放ち逃げ回る福音をステイシスとフラジールが追い回している。と言っても、フラジールは雲海の中を複雑に飛び回りながら戦う二機にやっとのことで付いて行っている状態だ。福音がステイシスの攻撃にたまらず厚い雲の中に逃げ込む。
《まだ行けるな、フラジール？》

《はい。そのつもりです》
《フン……それは良かった》
オッツダルヴァはＣＵＢＥに簡単なやり取りをするとＯＢを起動し逃げた福音を追う。勝負を決めるつもりなのだろう。ＣＵＢＥもＯＢを起動し後を追う。雲を抜けるがフラジールの視界には福音が映らない。
《こっちだ》
速度はフラジールの方が早いが、ステイシスにはレーダーが搭載されている。その都合上、先に再補足したのはオッツダルヴァのようだ。ＣＵＢＥは知らされた方向に飛ぶが。
《グッ!?》
オッツダルヴァのくぐもった声が入る。
《パートナー?》
《メインブースターがイカれただと!?　馬鹿な。よりによって海上で!?》
どうやら福音の攻撃を躱しきれず被弾したが、メインブースターを潰されたらしい。基本的にＡＣの上昇に使う垂直推力はメインブースターに依存している。そのため。
《くっ、駄目だ飛べん。浸水だと……!?》
飛翔することができなくなる。そして海上で飛び続けることができなくなれば、着水・水没していく。こうなってはいかに高性能なパワードスーツでも重りとなって搭乗者を水底へ誘う。
《馬鹿な。これが私の最後というのか!?　認めん。認められるか……こんな事……》
あまりにも突然であっけなく訪れた最強の退場に、ＣＵＢＥはやはり淡々とした調子でいた。
《……プランＤ》
視界に福音が映りこみ、翼を広げている。
《所謂。ピンチです》
翼から放たれたレーザーの掃射に両背のチェーンガンで応戦したが、脆い者（フラジール）は空から落ちた。

「「　……　」」
　映像が終わって大広間には沈黙が降りた。直接的な描写は無かったが、二人の死人が出た。しかも片方は直前まで優位でいた最強だ。敵の行動パターンをある程度知れたが、同時に恐怖も伝えられた。
「ＣＵＢＥ先輩死んだな」
　沈黙を破ったのはクリストフだった。鈴が二人に尋ねる。
「知り合いだったの？」
「ああ。ひょろっとして、ＡＭＳの酷使のせいかヤバい感じで話す人だった」
「けれど、ＡＭＳの負担を軽くする処理の仕方を後輩たちによく教えてくれた良い先輩でもあった」
　恐らく自身の機体がよほど高度な負荷を必要とした影響だろう。同様の苦しみを持つ者達を放っておけなかったのだろう。ジョルジュとクリストフは数時間前に亡くなった先輩に対し黙祷する。
「んで、結局どうすっかな」
　数秒目を閉じた後にけろりとした調子でクリストフが作戦会議を再開させる。二人を破った福音は今も暴走状態で飛び続けているのだから。
「先ほどの映像を見るに、長時間張りつくことは難しいな。こちらはエネルギーの制限もあることだしな」
「ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」
　山田先生の結論に一同の視線が一夏に集まる。
「一撃必殺と言ったら、一夏の零落白夜かしら？」
「それしかありませんわね。ただ、問題は――」
「一夏をどうやってそこまで運ぶかだね。零落白夜はエネルギーを使うから、攻撃回数を考えると全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」
「しかも、目標に追いつける速度が出せるＩＳでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

一夏は緊張した面持ちでいた。無理もない。ついこの間まで一般人として暮らしてきたのに、人を殺した兵器に挑めと言われているのだから。
「織斑、これは訓練ではない。実戦だ……覚悟が無いなら、別の方法を考えるがどうだ？」
「……やります。俺にやらせてください」
織斑先生の問いかけに一夏は喉を鳴らして覚悟を決めながら答えた。
「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体は誰だ？」
「待った、待っーた。その作戦はちょっと待ったなんだよ！」
いきなり天井から声が聞こえた。見上げると、そこには天井の板を外した束が頭だけを出していた。その束は天井から降りると、サササっと織斑先生に寄る。
「出て行け束」
「ちーちゃん。ここは断然、紅椿の出番なんだよ～」
「何？」
部屋から追い出そうとしていた織斑先生だが、束の発言に思いとどまる。
「紅椿はパッケージなんかなくても、高速機動ができるんだよ！」
そう言って端末からディスプレイを出し紅椿のスペックデータを並べる。パッケージとは防御型、速度型などといった風に用途に応じて機体の特徴を変えるＩＳの換装装備一式だ。データ中で一際目立つ文字があった。
「この［展開装甲］は簡単に言うと雪片弐型みたいな物で、天才束さんが作った第四世代型ＩＳの兵装なんだよ。それを紅椿は全身のアーマーに使っていて、これをチョイチョイっと調整すれば高速戦闘が可能に～！」
「「　は？　」」
束はさらっと、とんでもない事を言った。第四世代？　現在世界各国は、第三世代型ＩＳの開発に漕ぎつけた段階だ。第四世代型など夢

のまた夢、机上の空論だというのに、流石開発者というところか……各国の人・金・時間を無駄にする行為を個人でやってのけたことになる。

更に言い方によると、雪片弐型も展開装甲を搭載している。という事は白式も束お手製で、第四世代型に当てはまる。いや、紅椿は全身に対し、白式は刀一本という事は白式は展開装甲の実験機ということだ。ならば三・五世代型？　もう意味が分からない。

「ふむ……」

織斑先生が紅椿を交えた作戦を考えているようだが、セシリアが手を挙げる。

「織斑先生。わたくしのブルー・ティアーズにも高機動パッケージ「ストライク・ガンナー」が届いております」

「そのパッケージはもう量子変換はされているのか？」

「……それは、まだですが」

「紅椿の調整は私がやれば、七分もあれば余裕だね！」

「……ならば、本作戦は織斑・篠ノ之、で行く。作戦の開始は三十分後だ」

ジョルジュは詳しくないが、パッケージのインストールには相当な時間がかかるようだ。福音がいつまでも予測範囲を飛ぶとは限らないので、作戦の開始も急がねばならない。それらを考えて織斑先生は判断したようだ。

「ＶＯＢがあったら俺達も参加できたんだろうけど今回はお留守番だな」

「……」

クリストフの言葉にジョルジュは無視する。実際そうだ。偵察となった二人のリンクスも恐らく最初はＶＯＢで接近したのだろう。その後は、技術と機体性能で食らいついていたに違いない。

「どこ行くんだよ？」

「念のための準備だ。何が起きるかわからないのが実戦だ」

言葉通りではあるが、ＶＯＢ以外にも今のジョルジュには戦闘に参加する手段がある。それを用意するために時機の置かれたコンテナ

に向かった。

１４．不穏な初陣

《教師部隊の展開が完了。二人共準備しろ》
　織斑先生の指示で一夏と箒は砂浜でＩＳを展開した。
「じゃあ箒。よろしく頼む」
「本来なら女の上に男が乗るなど、私のプライドに障るが、今回だけは特別だぞ」
　一夏にとっても同意見だが、今回の作戦は白式のエネルギーを全て攻撃に使いたいので、いたしかたない。一夏は箒の背中に乗っかる。
《女に乗るのは男の……》
《黙りなさいよアンタ！》
　通信越しに鈴がクリストフを殴る音がする。なんとなく言いたい事が分かるのが少し悲しい。それよりも気になるのは目の前の幼馴染だった。
「……あのな、箒。これは訓練じゃない実戦なんだよ。何が起きるか分からない。十分注意して――」
「無論、そんなことは分かっているさ。……心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいいさ」
「……」
　浮かれている。一夏は古馴染だからよくわかる。いつも凛とした彼女が微笑みを絶やさず、強気なことを並べているのだ。
《織斑、篠ノ之、聞こえるか》
「はい」
「よく聞こえます」
《先ほども説明したが、今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がけろ》
「了解」
「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」
《そうだな……だが、無理はするな。お前はその機体では訓練すらしていない。性能を十分に把握していないだろうから不測の事態が起

きれば対応出来ん》
「分かりました。しかし、出来る範囲で支援をします」
織斑先生への受け答えも声が弾んでいる。プライベートチャンネルに切り替わり一夏にだけ通信が繋がる。
《織斑。どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態ではなにかを仕損じるかもしれん。いざというときはサポートしてやれ》
「分かりました。意識しておきます」
言われるまでもないが、一夏は指揮官に意思を伝えた。
《始め！》
「行くぞ！」
「おう！」
十一時三十分。織斑先生の号令と共に紅椿が発進し、空へ飛んでいく。

「位置情報をリンク。アレだな」
箒は作戦室から送られてくる福音の位置情報と紅椿の策敵を同期させ、対象の位置と姿を補足した。偵察映像でも観た銀色の装甲と大きな翼。ブースターでありレーザーを発射する特殊兵器だ。
「加速するぞ！　目標まで十秒！」
この高速機動から更に加速するという紅椿の性能に驚きながらも一夏は雪片弐型を展開し、零落白夜を発動する。
「うおおおお!!」
箒の突撃に合わせてブレードを振り抜くが福音はそれを避け、レーザーを乱射する。レーザーを回避するために二人は離れ、狙いを分散させる。
「ちっ」
「箒！　二方向から同時に！」
「わかった！」
一夏は右から、箒は二刀を展開すると左から攻める。福音は二人か

ら距離をとりながらレーザーを引き撃ちする。広域殲滅を想定しているだけあって、広がる二人に対して福音の射角は追い付いている。二人はあしらわれている。
「一夏。私が動きを止める」
「わかった」
埒があかないと判断した箒は背部展開装甲を分離し福音に向かわせる。束の力作というだけあって、セシリアのブルー・ティアーズのようにＢＴ兵器としても機能するようだ。しかも二機という限界はあるようだが、紅椿の自動操縦のようだ。
一夏は箒の攻撃を援護するために、福音の眼前で派手に動きレーザーの目標を一瞬だけ自分に集める。
一つ目の自律機は牽制で飛び、福音の回避コースを限定。二つ目の自律機は福音の翼を掠める。体勢が崩れたところを箒が飛びこむ。その二刀は福音に掴まれて機体を傷つけることはできなかったが、目的は達した。
「――！」
「一夏！　今だ！」
「応！」
二刀を掴み身動きのとれなくなった福音は箒を振り払おうとレーザーを乱射する。箒は上手く機体を振り回して回避するが、そこらを漂う雲に穴が開く。一夏も飛び込もうとするが、視界の端に異変を見つける。
「一夏!?　グゥッ！」
福音を無視し、流れ弾を回避するにしては大きく降下していく一夏に箒は声を荒げる。その一瞬の隙を突かれ箒は福音のレーザーを受けた。一部は展開装甲のシールドモードが防いでくれたおでダメージは少ないが、攻撃チャンスを逃した。
眼下を見ると一夏が流れ弾を切り払っている。
「何をしている!?」
「船がいるんだ。海上は先生たちが封鎖したハズなのに」
拡大すると確かに国籍不明船が海上を漂っていた。

「こんな時にっ！」
福音の斉射が放たれる。箒は上昇することで回避するが、一夏はその場で船に直撃するレーザーを切り払っている。エネルギーを無効化する零落白夜で切り払っているのでエネルギーが尽きる。第二斉射が来るが一夏に防ぐ手はない。
「馬鹿者！」
見かねた箒が間に入って雨月と空裂の斉射で撃ち消す。
「犯罪者など庇っている場合か!? そんな奴らは放っておけ！」
「箒！」
「!?」
「力を手にしたら弱い奴の事が見えなくなるなんて、そんな悲しい事言うなよ。らしくない。らしくないぜ」
戦闘中だが、言わずにはいれなかった。いつもの箒は自分に厳しく質実剛健なカッコいい少女だ。クラスメイトからも武士のような振る舞いから憧れを持たれるような自慢の幼馴染が、あまりにもらしくない事を言っていたから。
「私は……！」
一夏の言葉は本人が思っているよりも箒には響いた。かつて姉がISを開発し、その重要性から束の親類を拉致し利用しようとする輩から守るためということで、重要人物保護プログラムにより篠ノ之家は霧散した。
想い人から離されたことや保護という名の監視により箒は思い詰めていた時期があった。その分、剣道に打ち込み気を紛らわせようとしたが、その剣筋は本来あってはならにような感情で満ちていた。その結果、剣道の大会で相手を一方的に打ちのめすような戦いを演じた。
それは試合とは言い難い、暴力だった。そしてまた自分は同じ過ちを犯してしまったのだと想い人に言われたのだ。手に握る二刀が量子変換される。操縦者の戦意喪失とエネルギー切れが原因だ。だが、その隙を見逃す無人機はいなかった。
「――！」

箒の背後で福音が翼を広げる。それに箒は気付いていない。
「マズイ!? 間に合ってくれ!」
一夏は福音の前に白式を向かわせる。両腕を広げ、福音のレーザー受ける。シールドエネルギーでも防ぎきれず、装甲が破壊される。
「一夏……?」
光の雨が止み、一夏は爆発と共に海に落ちていく。それを見て箒はようやく何が起きたか知った。
「一夏あああっ!!」
一夏の後を追い箒は海に飛び込む。一夏は意識を失い海に沈みこむ。手を掴み。抱きしめ浮上する。
《作戦は失敗だ! 篠ノ之! 一夏を連れて急いで離れろ! 直ぐに援軍を送る!》
「一夏……しっかりしてくれ! 一夏ぁ……」
織斑先生が焦った声で指示を出す。海上を封鎖している教師部隊の到着まで時間がかかる。箒は残りのエネルギーを全て使ってでも逃げようと展開装甲を開き撤退する。白式の展開を解かれた一夏は生身だ。生身では高速機動の負荷をうけてしまい。怪我の症状が悪化する。箒は逸る気持ちを抑えつつ、撤退した。

夕焼けが浜辺を赤く照らす頃。作戦室のスクリーンでは福音の姿を映していた。
「止まっていますね。本部はまだ私たちに続けさせる気ですか?」
「上からの指示は無い。続行だ」
「しかし……どのような手段を?」
山田先生の問いかけに織斑先生は答える。すかさず山田先生は第二の問いを投げるが、織斑先生は難しそうな表情をして答えない。福音の再補足は数時間前に衛星からの目視で発見したが、責任者の織斑先生は判断を迷っているようだ。
「織斑君の様子は見に行かないのですか?」

「……作戦を考えている。私は行かない。なんなら山田先生が行ってくれ」
「……はい」
これも変わらない。重傷を負って帰還した一夏にだが、手当の指示を出してから一度も見舞っていない。山田先生は小さく溜息をついてから大部屋を出た。
織斑先生は山田先生が出たのを確認すると先ほどまで彼女が使っていた端末を操り福音との戦闘記録を見返した。その映像のある部分を拡大したりスローにしたりと繰り返し確認していた。

箒は紅い砂浜を駆けていた。旅館の一室にて医療機器に繋がれている一夏の傍にいたのだが、山田先生から休むように強く言われ部屋を出たのだが、とても休んでいられなかった。何にもならない。無意味なのはわかっていたが、体を動かして気を紛らわせないとおかしくなりそうだから。
（一夏が大怪我を負ったのは私のせいだ。力を欲して、最高の力を得て、その力に思い上がったからだ）
息苦しさから立ち止まって息を整える。だが息苦しさを解消しても胸が苦しい。
あの戦闘の自分の振る舞いを思い出すと、胸が締め付けられる。小さな頃は己を高みへ昇らせる剣道が好きで打ち込んでいたのに中学の頃はその剣道を暴力に使った。高校生になってからはそんな事がないように正しく剣を握ろうとしたのに。何処かで焦っていたのだろう。紅椿を、一夏が得たＩＳという力を手に入れて同じ位置に至ったと慢心して。
「こんな所にいたんだ」
声がした方に視線を動かすと小柄な同級生がいた。いつもの勝気な笑みを浮かべた鈴だ。
「わかり易いわね。一夏がああなったのはアンタのせいなんでしょう？」
「……」

事実なので何も言い返せない。箒は黙って足元の柔らかい砂に視線を落とす。それを返答と受け取ったのか鈴は少しだけ笑った。
「だから落ち込んでますってポーズ？　ザッケンじゃないわよ！」
「!?」
突然激昂した鈴が箒の胸倉を掴み無理やり視線を合わせる。
「やるべきことがあるでしょうが！　今戦わなくてどうすんのよ！」
戦う？　あの失敗を犯した自分が？
戦ったから、自分が守られたから一夏が傷ついた。だったらそんな元凶なんて……。
「……もう、ＩＳは使わない」
「甘ったれんなっ!!」
箒がそう言った途端に、鈴は彼女を殴った。漫画等のこういう展開なら平手を使うかもしれないが、鈴は容赦なく一発だけ本気で殴った。無気力でいた箒は受け身もとれず砂浜に倒れる。
「専用機持ちってのはね。そんな我が儘が許されるモンじゃないの！　アンタはお姉さんの特権みたいので簡単に受け取ったけど、普通は並ならぬ努力が必要なのよ！」
確かに昼に学園の同級生たちは妬んでいた。目の前にいる鈴自身は中国の代表候補生として専用機持ちだ。人口の多い彼（か）の国では競争率も凄まじかったかもしれない。そんな中で勝ち抜いて此処にいる彼女にとって、目の前でポンと専用機を与えられた箒を見て何を思っただろうか？
本人の性格では自身の事はあまり気にしなかったかもしれないが、鈴から見て他者の気持ちを思えばこそ、この様な言がでるのだろう。
「でも、受け取ったからにはその責任を投げてはならないわよ。それとも臆したの？」
「じゃあ……どうすればいいんだ!?」
そこまで言われては箒も黙っていられなかった。拳を握り、顔を上げて吠える。
「私だって悔いている。戦おうにも敵の居場所もわからない！　結局何もできないではないか!?」

「じゃあアンタは居場所がわかれば戦うの？」
「やってやるとも！　わかればな！」
　シャルロットが作戦室を訪ねても追い返されたと聞いた。数時間かけても再補足出来ていないのだ。まだ、見つかっていないのだろう。だが、機会があるなら箒は雪辱戦に臨みたいところだ。
「あっそ、箒も行くってさ」
　箒の回答を聞いた鈴は視線を流す。その先にはセシリア、シャルロット、ラウラがいた。シャルロットが駆け寄り箒の服をはたく。
「ああもう。服が砂で汚れちゃってるよ。殴ることはないんじゃないかな」
「いいのよ。それくらいしなきゃ目ぇ覚めないでしょうから。行くわよ」
「ま、待ってくれ。行くってどこへ？」
　突然現れた三人に驚きながら箒は踵を返す鈴に問う。何の話をしている？
「決まってるでしょ？　福音のところよ。アンタ行くって言ったじゃない？」
「福音？　先生たちからは何も……」
「位置の特定はした」
　ラウラが携帯端末から情報を表示する。
「そう遠くない場所だ。沖合上空にて目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見できた」
「この通りドイツの特殊部隊出身者がやってくれたわよ」
　空中投影されたディスプレイには小さな点に見えるが、よく見ると福音が確かにいた。ラウラはこの存在を広い海から探しだしたと言う。
「命令違反ですけど、皆さんやる気ですわよ。あとは箒さんだけでしたの」
　セシリアがお上品に笑う。いじけていた箒を置いて行かずに皆待っていてくれたのだと知って箒も笑う。シャルロットがＩＳの通

信機能を使って誰かと話を始めた。
「そういうことだから僕たちも今から行けるよ」
　シャルロットからの通信を聞いてクリストフは楽しそうに喋る。
「そうかい。命令違反。みんなでやれば怖くないってな」
《ゴメンね》
「気にしてねえよ。隣の奴は行きたくて行きたくてウズウズしていたからな」
「……」
　話を振られてもジョルジュは言葉を発さない。返事がない事を気にしたセシリアが気遣う。
《ジョルジュさん。あまり気負わないでください》
「ああ」
　ジョルジュの素っ気ない返事に通信を聞いている女子達が動揺したのが伝わった。顔は見えなくとも息遣いは聞こえる。クリストフはいつも通りふざけた調子だが、フォローを入れる。
「気にすんなよ。コイツは重いコンテナ運ぶのに大変だからよ」
　クリストフとジョルジュはそれぞれアルビートルとジュスティスを操りながら、牽引チェーンにコンテナを繋いで飛んでいる。その大きさはＩＳやＡＣが一台入るくらいだ。
　そのコンテナの中身はトーラス社からクリストフに送られた試作品だ。
「機体のアシストがあるから特別大変でハない。だが、出力が落ちてイる」
「すまねえな。これが今回の決め手だからよ」
《箒。時間がないからブリーフィングは移動しながらよ》
　全員の参戦が決まった以上。彼女たちはこちらに追いつかなければならい。通信では事前に決めた作戦を箒に伝えているのが聞こえるが、ジョルジュは聞き流していた。それよりも気になることがあるからだ。
　勘の良い者は気付いているかもしれないが福音が通常推力で追い

つける場所にいる事だ。そのまま何処かの町やクレイドルを襲っているわけではないので僥倖だが、不自然だ。専用機持ちに聞いたところ自己修復で休息をとっているのでは？　そう仮説が立てられたが、一夏と箒の攻撃はそれ程のダメージを与えたか？

オッツダルヴァとＣＵＢＥが先に仕掛けた分と合わせるとそれなりのダメージになるかもしれないが、それでも何かが引っかかる。

いくら考えても答えが出ないので、ジョルジュは頭から疑問を破棄した。自分たちがその福音を沈めればいいのだから。

――――数時間前――――

これは一夏と箒が撤退して少ししての事。

密漁船に偽装した特務船の船長はレーダーで自分たちの位置を確認する。その端には福音が高速で動いているのも認められる。間に合ってよかった船長は安堵と共に上司に通信する。

「三番船。配置よし」

《了解。装置を起動しろ》

指示を受け、乗組員がコジマ粒子回収装置を起動する。別の場所では彼の仲間たちが同じような作業をしている。起動ができた事を伝えると上司はこの作戦の核になる者達に指示を出す。

《仕掛けろ》

合図の数秒後、潜水艦が浮上する。同時にミサイルの一斉射が福音へ放たれる。突然の奇襲だが福音は回避とレーザーの一斉射で対応する。船長は遠くで動き回る福音の動きに感嘆する。特務船による支援ばかりしているがＩＳやＡＣの戦闘を何度も見てきたのだ。自分ではできなくとも上手い動きは解る。福音の動きは高いレベルだと思う。

「いい動きだ。だが――」

福音を挟んで反対側からもう一隻の潜水艦が浮上する。同じようにミサイルの一斉射を放つが、決定的に違うことがある。
《ミサイルカーニバルです》
「あの方々には敵わんだろう」
通常のミサイルに加え、青緑色の筋が走る。福音はソレの毛色が違うことに気付いたのか優先的に狙う。空中で撃破されたソレは青緑色の爆発を残す。
コジマミサイルと言うこの武装は遠目から見れば綺麗な花火に見えなくもないが、それは、当たれば一撃でパワードスーツを落とす凶悪な威力がある。それが更に三発。福音はコジマを観測したのか最優先で迎撃しながら回避する。
「――!?」
追加のコジマミサイルを撃ち落とした福音だが、突然動きを停める。一発のスナイパーキャノンが当たったのだ。スナイパーキャノンは連射が利かない面があるが、その高い衝撃力は機体を一時的に停める特性を持つ。そして一瞬でも停まれば危険な第二射が福音を貫く。
「――!!??」
コジマキャノン。クリストフが使っているコジマライフルより大型で威力も高い。福音は通常のミサイルを数発立て続けに受けたが、体勢を立て直し全力で逃走する。
《作戦終了。撤収しろ》
上司はそれだけ告げると通信を切った。二隻の潜水艦はそれぞれ甲板に出ていたネクストを格納すると海へ消える。特務船の船長もある程度コジマの処理ができたのを確認すると乗組員に帰投を命じた。

15．君の名は

銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）はその銀色のボディを丸めて膝を抱え、身を守るようにしてそこに居た。思わぬ攻撃にあい回復に専念しているのだ。だが、その休息は急接近してくる機体が阻害する。

数は五。

「――！」

福音は広域殲滅を目的としたレーザー兵器［銀の鐘（シルバー・ベル）］で弾幕を張り接近を許さない。五つの機影は散開し面を拡げる。初めて見る機体は緩慢な機動をしており脅威度は低いが、紅色の機体は昼の戦闘で高速で機動していた。そう判断し福音は優先的に紅色を狙った。

「速さなら負けてませんことよ！」

「――!?」

弾幕を引きつけている箒とは反対側を飛んでいたセシリアが今まで抑えていた速度を上げ、現在の機体の目的を果たす。

強襲用高機動パッケージ［ストライク・ガンナー］。セシリアは普段の戦闘でビットによる多角攻撃を主としていたが、ストライク・ガンナーは、六機のビットをスラスターとして使い機動力を上げている。その分だけ低下する火力を補うため、レーザーライフルもスターライトｍｋⅢから大型のスターダスト・シューターに変更し補っている。

セシリアは薄い弾幕を掻い潜り、福音の周囲を円を描くように周りながら銃撃する。セシリアが福音の背後を取り注意を引きつけた所で追いついてきた鈴が砲門を開く。

「食らいなさい！」

機能増幅パッケージ［崩山］をインストールした甲龍は衝撃砲を二門から四門に増設してある。普段は不可視の砲弾が、崩山の機能により赤い炎を纏っている。彼女の性格らしく苛烈な攻めは福音の動きを止めたが、直ぐに銀の鐘が掃射される。牽制目的の広域攻撃にセシリアと鈴はたまらず距離を離そうとするが、直ぐにソレは射線確保の為の移動になった。

「やらせないよ」

シャルロットは実体シールドとエネルギーシールドを展開し機動力のやや劣る鈴を中心に守る。ラファール・リヴァイヴ防御専用パッケージ、〔ガーデン・カーテン〕の防壁は鈴を逃がすための時間稼ぎになるが、弾幕の激しさから二枚ずつある二種類のシールドが徐々に削られる。戦力を一人潰す為に砲撃に専念する福音だが、一発の砲弾により姿勢を崩す。

「――!?」

「初弾命中！」

隻眼でありながら長距離射撃を成功させたのは砲戦パッケージ〔パンツァー・カノニーア〕を装備したラウラ・ボーデヴィッヒ。いつもより大型のレールカノン〔ブリッツ〕は威力は勿論だが射程距離も向上している。動きが止まった所を鈴の砲撃とセシリアの狙撃が再開され、シャルロットのアサルトライフルも加わり包囲する。その中心を――。

「おおおッ！」

箒が雨月、空裂の二刀を構え突進する。福音は砲撃を一旦止め、二本の刀を掴んで防ぐ。その間にセシリア、ラウラ、シャルロットが狙撃し、鈴が双天牙月を連結させて箒の反対側から切りかかる。しかし、福音はスラスターを微調整して箒を空中で巴投げの要領で流す。

「グウッ!?」

「きゃあ!?」

展開装甲の調整次第では福音の投げも相殺できたが、ＩＳの操縦経験が圧倒的に不足している箒には上下の感覚をひっくり返された所で腹を蹴られては抵抗できずに振りほどかれる。その先にいた鈴に激突し二人のシールドエネルギーが僅かに減少する。

「危ない！」

福音は二人に向けて追い討ちの銀の鐘を放つがシャルロットが間に入って防御する。一枚の物理シールドが割れたところでラウラの砲撃支援が入る。

「助かったよ」

「陣形を崩すな！　奴が逃げるぞ！」

「させません！」
　ブリッツの砲撃を急加速やロールで回避しながら逃走する福音だがセシリアが何とか追いすがる。互いに回避をしながら方や射撃、方や弾幕を相手に向かって放つ。煩わしく思ったのか福音はセシリアに距離を詰める。距離が近くなればその分だけ弾幕の密度は濃くなり範囲は狭まる。セシリアが得意とする狙撃に向いた距離を維持するならば離れるのが得策だが、ある目的の為にあえて自ら距離を詰める。
「くっ」
「無理をするなセシリア！」
「させん！」
　レーザーの弾幕を掻い潜りなんとか反対側へ抜けたセシリアだが、その機体は大きくエネルギーを減らしていた。下手をすれば撃墜されてもおかしくなかったが、五人の中でも速度に秀でる箒が福音の頭上から雨月の刺突レーザーを放ち、福音の注意を引いたおかげで撃墜を免れた。
「そっちに行きなさい！」
「セシリア！　僕の方へ！」
「わかりましたわ！」
　セシリアがいた位置に鈴が入り崩山の砲撃でラウラと共に福音を追い立てる。シャルロットはサブマシンガンとショットガンで引き撃ちしながらセシリアが後退する時間を稼ぐ。
　福音の戦闘プログラムでは複数の敵を相手取る場合はシールドエネルギーかＡＰが低い敵を優先的に攻撃して数を減らすようにされているため青い機体（ブルー・ティアーズ）を追いかける。それが図らずとも七人の思惑通りになった。
「う～ん。みんな頑張っていますね～」
「……」
　クリストフとジョルジュは遠くで撃ち合う六機の機影を眺めながら自機の確認をしている。二人は無人の孤島群の一つで待機してい

る。
「今にも飛びたくて仕方がないって顔だな」
「……顔なんて見えナイだろう？」
「見えなくてもわかるさ。ウズウズ……いや、イライラしているのがわかる」
　ジョルジュはアリーヤの複眼をフェンシングのマスクの様な形状をしたランスタンのヘッドパーツに向ける。その下にある金髪の男は恐らくこれからやることが楽しみでしょうがないだろう。
「まぁ……まずはコレをお見舞いするから見とけって。もしかしたらこの一発で終わるかもしれないだろう？　あっ、もし落としても恨むなよ？　一番効率がいいんだからな」
「……ならば早くヤレ」
　アルビートルの目の前に置かれているのはスナイパーキャノンよりも長大なトーラス製巨大コジマキャノン。ここまでデカいのは球状のコジマコンデッサー［ＡＤＤＩＣＴ］のような物がオプションとしてゴテゴテに付いているのが原因だ。コレが付いているという事はネクスト本体に内蔵されたジェネレーターだけではこの兵器を動かせないという意味だろう。
　クリストフはそんなコジマキャノンに自機を合体させると興奮の声をあげる。
「ヤベェよ！　アルビートルは追加整波装置を三機積んで、本体の整波性能をフルチューンしてんのにどんどん持ってかれるぜ!!　まるで『ネクストの為の兵器ではなく、兵器の為のネクスト』じゃないか!!」
　背を反らせてゲタゲタ笑い出すクリストフとグルグル回りながら砲身にコジマを送るコンデッサーが不気味に動く。ふざけている様だがクリストフは試作コジマキャノンのオーバーヒートやコジマの漏れに気を配っている。それでも歓喜している事は変わりないが。
「ヤベェッ！　良いぜ！　まるで製造禁止されたソルディオスキャノンを持ち運べないかと情熱を尽くした開発スタッフの想いが伝わるぜェ!!」

《もうすぐっ、ポイントだよ！　準備は、出来てる!?》
　シャルロットの苦しげな通信が入る。先行した五人の目的は運搬とチャージに時間がかかる巨大コジマキャノンの準備する時間を稼ぐこと、そして発射可能状態のソレを福音に当てるために射程範囲に追い込むこと。そして銀色の機体はオレンジと青の二機を追い回していた。
「いいぜ！　いつでも撃ちたいぜ！」
「……味方に当てルなよ」
《十秒後にたたみかけるから二人はその間に逃げて！　クリストフ、あんたキッチリやりなさいよ！》
　鈴の通信によりタイミングが決まった。恐らく理解しただろうがクリストフは別の事を口走っていた。
「撃つのはいいが、コイツには名前が無いな……」
《七……六……》
　砲身はいよいよ溜め込んだ力を解放できるのかと緑色の光を一層強く輝かせる。
「そうだな……お前の名前は……」
《一……ゼロ！　今よ！》
　カウントゼロと共に赤い砲弾が銀色の上から無数に降り、オレンジと青が出せる限りの速度でその場を離れる。その瞬間。クリストフは叫ぶ。まるで産まれたばかりの我が子に幸あれと親が名を付けるように、高らかに謳う。
　お前は何であるかを――。
「エヴァグリイイィン!!」
　［常緑］の意を持つその響きを与えられた砲身は圧縮された膨大なコジマ粒子を吐き出し、福音を飲み込んだ。まるで海を割るかのような勢いで引かれた一筋は放射された後も太く濃くなっていく。
《あっぶないわね!!》
《危うく巻き込まれるところでしたわ！》
《流石にあんな攻撃は防御パッケージでも防げないよ！》
「悪い悪い。まぁあんだけ範囲が広ければ威力も十分だろ。これで終

いだな。それにしてもいい景色だな～」
　その攻撃範囲は砲撃をしていた鈴や回避して一息入れていたセシリアとシャルロットを危うく巻き込みかけた。全員にはエヴァグリーンの推定照射範囲を知らせてあったにも関わらずそんな事が起きるという事は理論スペック以上の性能を引きだしたという事だ。やがて照射が終わり辺りに緑色の粒子が霧散していく。
　ある意味、幻想的な風景ではあるがその余韻に酔いしれているのは約一名のみだ。

「待て。残骸すら見当たらないぞ」
　ラウラの指摘通り、濃密な緑が晴れていくが福音の影は見当たらない。圧縮粒子によって消し飛ばされた可能性はあるが各自周囲を警戒する。
　そのとき海中より大量の海水が巻き上げられ小規模な竜巻が起きる。
「馬鹿な!?　アンナモノを食らってまだ動けるのか!?」
「待ってください箒さん。あれはまさか……!?」
　その影は見つけた時と同じく膝を抱えた姿。それからどういう発音器官を搭載しているかわからないが高い音で鳴き声を上げ、エネルギーの翼を五対展開する。
「まずい。二次移行（セカンドシフト）だ……!?」
　本来ＩＳと操縦者の相互成長により解放されるセカンドシフトがこの時になって行われた。各種性能の向上や単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）の習得などの特典があるが、対峙する者にとっては厄介極まりない。復活した福音はエネルギーの翼を広げると頭上にエネルギーを収束させ箒へ放つ。
「――!」
「!?」
　セシリアのスターダスト・シューターを遙かに凌ぐレーザーをまともに受けた箒は墜落する。弾幕も脅威であったが、あれだけ拡散させていたエネルギーを一点に受けるとこうも違う。着水寸前で箒を受

け止めた鈴が悲鳴のように声をあげる。
「クリストフ！　二発目を！」
「無理だ。コジマの再充填にさっきの倍以上かかる」
「それではもう一度みなさんで時間を……」
「セシリア！」
　目標がセシリアに変わり収束レーザーが彼女に放たれるがラウラが庇う。本来、遠距離からの砲撃・狙撃対策として備え付けられていたた2枚の物理シールドがこの一撃で破壊される。お互いを庇い合うので精いっぱいになりつつあり、とてもじゃないが時間稼ぎの為に戦えそうにない。
　ならば――。
「行くしかないよな……」
「システム戦闘モード。対象を潰ス」
　クリストフは自機とエヴァグリーンの連結を解除し、ジョルジュは我慢を止めた。

　一夏は空にいた。雲が少ないどこまでも青い世界。自分が立っている場所が鏡でソラの色を写しているのかもしれないが、そんな所にポツンと一人でいた。
「ここは……どこだ？」
　呟いたとき。自分の足元から世界の色が変わり始めた。
　開かれたのは夕陽に焼かれた赤い砂浜。大きな夕陽の前には白い甲冑を身に纏い体の横に大剣を立てた騎士がいた。顔をバイザーのような物で隠しており表情は窺えないが、長い髪から女性と判断できる。
　その女性は初めて見るのだが、不思議と初めて会った気がしなかった。戦う格好をしているが穏やかな雰囲気を感じる。その女性が唐突に質問を落とす。
「力を欲しますか？」

何故そんな事を聞かれるかわからないが、一夏は力を欲している。だから素直に頷いた。すると女性は二つ目の質問をする。
「何のために？　何をする為に力を欲するのですか？」
一夏は漠然とした考えの元でとにかく力を求めている。それを表現するにはどうしたらいいか悩みながら女性の質問に答える。
「守るためだな……友達……仲間を……」
「仲間？」
「えーと……人それぞれで色々違うけど、理不尽な事っていっぱいあるから……そんなモンから、みんなの助けになりたい」
家族の有無、関係、出生。身近に居る人達はそこら辺が普通の人と違って悲惨な部類に入る。その上で自分の存在をプライドを目指すモノの為に必死に頑張っている。
「俺……いつもみんなに助けられているから、少し悔しいんだ。この世界で一緒に生きているのに俺ばっかりって……だから助けられてばっかりは嫌だから。だから力が欲しい」
「……そう」
俺の答えに女性は頷くとまた世界がソラに戻った。
「だったら、行かなきゃね」
いつの間にか髪も着ている服も帽子も白い少女が一夏の隣に立ち、小さな手を伸ばしていた。一夏が呆けていると少女が「ね？」と首を傾げてくる帽子のせいでこの子も表情が見えないが、一夏はその手に邪気を感じず素直に取った。その途端に世界に白い光が広がっていく。
「もし、あなたとその仲間の世界が違うとしたら、あなたはどうしますか？」
「え？」
光の広がりにより見えなくなりつつある女性が最後にそんな質問をする。何の事かわからずに答えられずにいると回答を求めていなかったのか女性は続けた。
「あなたの戦う理由はわかりました。しかし、その理由を向ける相手が……」

最後を聞きとることができずに世界が真っ白に染まった。

１６．復活

「なんて速さだ」
　セカンドシフトした福音との戦闘は過酷なものになっていた。砲戦型装備のラウラは自分の役割をこなす為に福音から距離をとろうとするが、恐ろしい威力のレーザーを撃ちながら福音は追いかけてくる。パッケージに備え付けられていたシールドを二枚とも消費しているのだから、食らう訳にはいかない。
「今援護を……」
「――！」

　突如福音はラウラに背を向けレーザーの種類を収束から拡散に変えてばら撒いた。それは逃げるラウラを援護しようと追いかけてきた仲間たちに向けられていた。
「きゃあ!?」
「セシリア！」
　範囲の広さから援護に入ろうとしていたセシリアは躱しきれずに被弾する。ラウラを狙うと見せかけて周囲の味方を攻撃するところから学習している事がわかる。セシリアの損害を無駄にしないためにラウラは注意が逸れたところを砲撃すべく体勢を整えるが、福音はラウラに背を向けたまま光の翼を広げた。
「まさか!?」
「――！」
　福音は頭上にエネルギーを集め、ラウラに背中を向けたまま収束レーザーを放った。暴走しているとはいえ福音はＩＳだ。ハイパーセンサーは視線を向けずとも三百六十度の視界がある。こちらを見ずとも狙いを付けることはできるのだ。ラウラ達（パイロット）の普段の生活は目でモノを見ようとする。だから戦闘中でもそのあたりの癖がでてしまい、このようなＩＳの当たり前の知識を忘れてしまう。
　ラウラに収束レーザーが当たる直前。空色の機体が間に入る。
「くぅおんのォォッ!!」

クリストフのアルビートルだ。腹の底から気合いを入れた雄叫びと共に彼はコジマ粒子を操る。それは本来、球状で機体に纏っているハズのＰＡの背部を削り、前面に集中させてレーザーと拮抗していた。だが、福音のレーザーはクリストフの努力ごと彼を吹き飛ばした。ＰＡは元から貫通性の高いレーザーには効果が薄いのだが、それでも一瞬耐えたことは間違いなく健闘である。事実、ラウラがレーザーの射線から逃げるだけの時間を稼いだのだから。

「くらえ！」

「――!?」

ラウラは再度姿勢を正し、福音に向けてレールカノンの砲弾をぶち込む。レーザーを発射した後の硬直があるのか福音は避けることができず頭部を揺らされる。そこへ箒とジョルジュが切り込む。

「せえぇぇい！」

「オオオ！」

「――!?」

ギリギリでシステムリカバリーが間に合ったようで福音はジョルジュの斬撃を躱した。だが、続く二振りまでは躱せなかったようでエネルギーの翼を一枚斬られた。二人はニノ太刀を浴びせようとするが福音は弾幕をばら撒いて逃げ出す。その後をセシリア、シャルロット、鈴、が追いかける。箒は渦のできた海面に呼びかける。

「クリストフ大丈夫か!?」

「……ぁ……ああ、なんとかな」

「よかった」

ゆっくりと浮上してきたクリストフが片手を上げて答える。その左腕は火花を散らしていたが、庇われたラウラは安堵の息を吐く。

「ＰＡの多重展開で凌いでみたが、かなりヤバいぜあのレーザー。オマケにコジマパンチを無くした」

「かまワん。元から足の遅い オ前は近接戦であて二しテいない」

「ぞんざいだなジョルジュ。まぁいい。フォーメーションを組もう」

四人は福音に追いすがっている三人に合流する。シャルロットが切り出す。

「あの速さと拡散レーザーのせいで近づきようがないよ。それに収束レーザーで不意を突いてくる」
「心配いらないさ。我らがジョルジュ君が先陣を務めてくれる」
「全員オレの武装データは確認したカ？」
　ジョルジュは突撃前に全員に確認をとる。彼の今の武装とこれからやろうとしている事はこの場にいる全員に関わることだからだ。各員の反応を見てセシリアが答えた。
「問題ありませんわ。私たちはあなたの突撃に一拍おいて続けばよろしいですわね」
「それでイイ。じゃ、行くゾ」
　告げるとジョルジュはＯＢで福音に突進する。福音はジョルジュ一人に向けてレーザーの弾幕を張ろうとするが、先にジョルジュが手を打った。これまで下を向いていた肩部の０５１ＡＮＡＭが正面を向き、鋏のように開くと中から光弾を射出する。
　放たれた光弾はフレアだ。主として赤外線誘導型のミサイルをかく乱する目的で使われるが、これまでの戦闘を見ていれば分かるが、福音はミサイルなど積んでいない。ジョルジュは別の意図で試しに使ってみたのだ。
「――！」
　福音の挙動に変化が生じた。ごく僅かだが弾幕の範囲を広げたのだ。突然増えた熱源をターゲットと誤認したようで誰もいないところへもレーザーをばら撒く。それは牽制の効果があるが、その分だけ個人へ降りかかる圧力は減る。
　被弾を最小限に止められるように薄くなった弾幕を潜り抜けたジョルジュは右手の武器を福音へ向け、紫電を散らせた。その攻撃に福音は反応して避けるが、正面から斬りかかったジョルジュのドラスレを防げなかった。
「ウソ……!?」
「どうやって……？」
　これまで隙を突いて何度も斬りかかった鈴と箒は驚愕する。数人がかりで撃って、飛んで、ようやく斬りかかっても避けられるか腕で

防いできた福音がたった一人の攻撃に対応できなかったのだから。
その理由は彼がこの戦いの為に変更した武装にあった。

R―ARM　SAMSARA（プラズマライフル（旧アクアビット））
L―ARM　02―DRAGONSLAYER（レーザーブレード（レイレナード））
R―BACK　無
L―BACK　無
SHOULDER　051ANAM（フレア（BFF））

SAMSARAはプラズマ弾と共に電波を妨害するECMを周囲に散布する。その効果と時間は専門の武器より劣るが、レーダーを重視するパイロットには効果大だ。
そう。ジョルジュが知りたかったのは福音の妨害機器への効果だ。無人なので人間の眼は無い。ならば周囲の状況をセンサーに頼って把握しているはずだ。普段は便利な電子の目や耳も潰されれば、ただの案山子になり下がることもある。無人機と戦うと聞いてジョルジュは持ち得る武器の中から効果的な物を選んでここに挑んだ。
だが、最初から無人使用を想定していた福音はジョルジュの予想よりもリカバリーが早い。斬れたのは一度だけで二度目は容易く掴まれた。
「突破しましたわ！」
「行くよ！」
ジョルジュの役割はポイントマン。最初の囮だ。後の攻撃は追いついてきた者達がやってくれる。まずはセシリアがスターダスト・シューターの狙撃で組み合っているジョルジュに当てないように福音を攻撃し、シャルロットもそれに乗じて狙撃に加わる。追い立てられた福音の元へは鈴が待ち構えていた。
「待ってたわよ」
不敵に笑う彼女の砲撃はこれまで自分たちを追い立ててきた福音の弾幕への意趣返しだろう。とにかく砲弾を叩き込むその苛烈さに福音は防御の為に腕を交差させ、鈴に突撃する形で脱しようとした。

敵の意図を読み取った鈴は福音と激突する寸前でその場を空けた。
当然、福音は抜け出すがその目の前には別の砲弾が迫っていた。ラウラのレールカノン、ブリッツによる遠距離からの砲撃だ。
作戦は順調だ。弾幕さえ掻い潜れれば七機による乱戦ができる。誰かが狙われれば、その人は回避に徹底し、他の面子で福音に持てる火力で攻撃する。これを繰り返せば桁外れなタフさを持つ福音も撃破可能だ。次にラウラが狙われればクリストフがコジマライフルを打ち込む手筈だ。
それまで高みから砲撃しようと構えるラウラだったが、福音は自分にも他の面子にも向かわず飛んだ。
「まずい！　逃げられるぞ！」
想定されていた厄介な事態。福音が自分たちの撃滅を諦めてどこかへ逃走すること。最初の時のような速度で逃げられてはもう誰にも追いつけない。
そんな事態を防ぐために紅い機体が後を追った。
「逃すか！」
箒の紅椿。束博士お手製の機体はトップスピードに乗る前の福音に追いついた。そのまま二刀を振りかざし、逃走を妨害する。福音は両手で雨月と空裂を弾くと収束レーザーを放つが、箒は福音の真下へ潜り込むように回避しそのまま背後に回って斬りつけようとするが、福音は箒に後ろを向けたまま翼からレーザーを放った。
だが、至近距離から弾幕に晒されそうになった箒を庇って鈴が割り込んだ。
「くっ……あぁぁ!!」
「鈴！」
シャルロットがショットガンとブレードで福音に飛びつき、注意を引いた。その間に箒は鈴を抱えて離れる。シャルロットのフォローが早かったおかげか大きなダメージは負っていない様子だ。
「鈴！　どうして私を……」
「……っ……あの速度でまた逃げられたら、追いつけるのはアンタかセシリアの機体しかないでしょうが、簡単にやられてもらったら負け

るのよ」
　鈴は悔しげにそう言いながら福音を睨みつける。首を掴まれていたシャルロットの援護にクリストフがコジマライフルで牽制しながら、傍に近寄ってきた。
「その通りだぜ。どうやらこっから速さに優れた機体を守りながら戦わないと、戦い続けることもできなくなりそうだ」
「そういうこと。追い付いたら私達で抑えつけるから、また逃げ出した時は追いかけなさい」
　それは追い付くまで一人で戦うという過酷なこと。しかし、箒は自分も皆と戦っている事を噛みしめ頷く。さっそく福音が方向を変えて飛び出したので、箒は紅椿の展開装甲を開き加速する。
　遠くからはラウラがレールカノンで砲撃し福音の速度が上がらないように牽制している。セシリアは背後から自分と同じく高速起動しながら手元の大型レーザーライフルを撃って当てている。

　頼もしい。箒は仲間たちに対してそう思った。一夏と二人で挑んだ時は姉から与えられた高性能なＩＳの性能に自分は誰よりも強くなったと慢心し、一夏と一緒に戦えるという事に浮かれていた。今から思い出せば酷く恥ずかしい話だ。
　そう恥じている。何と愚かしい事をしていたのだろう。今の戦いも自分の咄嗟の機転に応えてくれる優秀な機体（紅椿）のおかげだ。まだまだ、自分の力とは誇れない。だが、そんな半端な自分を再戦に誘ってくれた仲間に応えたい。箒はその思いを気迫に表し福音に挑む。
「ハアアアアッ!!」
「――!?」
　追い付いた。空裂の突きを躱されるも雨月の刺突レーザーで追撃する。福音はそれをエネルギーの翼で防ぎ、収束レーザーを返して来る。箒は辛うじて身を捻ることで回避できたが、後ろから追いかけてくる仲間たちにレーザーが届きその到着を遅らせる。
「箒さん！　かまわずに挑みなさい！」
　セシリアが自分たちを追い越して福音の逃走ルートを遮り素早く

振り返って射撃する。セシリアの援護を元に箒は二刀で空を薙ぐが、福音の双腕とエネルギーの翼で捌かれる。それどころか不意打ちのように放たれるレーザーが接近すら困難にさせる。
　そこへプラズマライフルの紫電が福音のレーダーに霧を作る。福音はその一瞬の空白に斬撃が来ると先ほどの戦闘から予測をたて腕を身構えた。
「ア゛？」
　ドラスレの斬撃を防がれたジョルジュは不快感を露骨に漏らした。
「人形のクセに小賢しイナ!!」
　アリーヤの鋭いレッグパーツで膝蹴りを見舞いつつ福音が逃げていた方向にＱＢで位置を入れ替える。足の補助ブースターも吹かせて威力を持たせた蹴りに福音は軽く仰け反る。追撃のミドルキックはリカバリーした福音に防がれたが、シャルロットが追いついた。
　振り切りに失敗した福音はシャルロットの接近に気付くと後ろを向いたまま拡散レーザーで弾幕を張るが、相手が悪かった。
「お生憎様それは何度も見たよ」
　この場にいる七機で最も強固な防御力を持つガーデン・カーテンの前には福音の行動は更なる足止めにしかならなかった。
　その隙を鈴と箒は左右から攻める。弾幕に耐えるシャルロットを大きく迂回して鈴が双天牙月を振り回して福音の右から、箒が雨月と空裂を上段に構えながら福音の左から、合わせて四刀が福音を襲うが銀色の人形はその場で回転した。広範囲殲滅兵器をフルに使った全方位攻撃に鈴と箒はたまらず回避を優先した。
　だが、二人違った。ジョルジュは被弾を物ともせずＯＢで突っ込んだ。回転することで全範囲への攻撃をするのだから、一度潜れば次のレーザーは一回転して戻ってくるまで来ない。その上その場で回っているのだから動いていない。最も接近しやすいのだからこの機を逃すのは勿体ない。
　ドラスレで袈裟切り確実なダメージを与えると、右腕を突きだす。プラズマライフルはアームパーツの武装固定具に設置されているので手は空いている。その手で相撲で言うツッパリを福音の頭部に打

ち込み距離を離すと、ＱＢと同時に蹴り飛ばす。その先にはジョルジュと同じく被弾容認で接近してきたクリストフがいた。
「ありがとよ。ジョルジュ」
ネクストとしてのランスタンはＰＡ整波性能が高いくらいしか取柄が無い。軽量機の中でも速度は遅く、ＡＰも低い。最初の一撃はエヴァグリーンという外付け兵器による戦果なので、アルビートルとしての活躍はこれまでの戦闘ではない。それ故にＡＰを削ってまで此処まで来たのだ。単機で活躍できないが、その手助けをしてくれるジョルジュも飛び込むと確信し、その期待に応えられるだけの火力を以てそれに報いる為に危険を犯した。
ＰＡを展開しているコジマ粒子の青緑色の輝きを漂わせながらジョルジュがバックブースターで逃げたのを確認するとクリストフは一つ怒りを思い出す。
「よくも……」
ラウラを庇うために自分から飛びこんだとはいえ、この人形には大きなツケがある。彼にとっては大きな大きな問題だ。これからの人生にも関わる大きな事案だ。
「よくも壊しやがったなァァァ!!」
「――!?」
怒りの絶叫と共に放たれるコジマ粒子の大爆発を福音は機械ゆえにあり得ないだろうが、慌てたように逃げようとしたが呆気なく飲み込まれた。ＡＡはネクストにとっての切り札だが、ＰＡの残量によって威力が変わる。その為にアルビートルのそれは必殺に等しい。
オーメルからの試験パーツだったコジマパンチへの鬱憤を少しは晴らしたクリストフは安全の為に後退する。アルビートルはコジマ粒子が無ければ攻撃も防御もままならないので仕方がない。
大ダメージを受けた福音はまたもや逃げ出そうとエネルギーの翼を開くが、その機体にワイヤーが絡みつく。
「追い掛け回すのも大変なのでな」
「ナイス！　ラウラ」
先回りしていたラウラが自機と福音を繋ぐとレールカノンを乱射

する。繋がれ元と発射元が同じなのに福音はそれを強引に回避し続ける。それでも加勢に来たシャルロットのサブマシンガンが装甲に当たり火花を散らす。そこへ鈴の砲撃とセシリアの狙撃も加わる。

振り切れないことに業を煮やしたのか、福音はワイヤーに向けて収束レーザーを撃ち拘束を解くと、ラウラに突撃する。すかさず箒が後ろから福音を斬りつけ注意を引きつける。

セシリアとシャルロットの援護射撃の元で箒は福音と近接戦を試みるが、福音は逃げようと乱雑に動く。鈴は遠い位置にいて直ぐに辿り着けない。他のみんなの射撃も牽制にはなるが着弾しない。

福音（コイツ）を止めるのにもう一手欲しい。箒がそう思った時に暗い空から現れた悪魔のように黒い機体が福音に刃を落とした。

「――!?」

「チッ」

ギリギリで斬撃を躱されたジョルジュは舌打ちを一つ打つが右腕を伸ばす。その手で福音の腕を掴むとＱＴの推力で福音を海に向けて投げる。その程度のことは福音の推力を持ってすれば容易く立て直せるだろうが、ジョルジュはフレアの熱源とプラズマライフルのＥＣＭで追い討つ。

突然の状況変化と索敵機能の妨害により福音の戦闘能力は一瞬堕ちた。その一瞬に全員が反応した。雨月とスターダスト・シューターのレーザーが、ブリッツと崩山の砲弾が、ヴェントの弾丸が福音を海に叩き付けた。

「やったの……？」

打ち上げられた海水が作った雨が海に戻る音が響く中でシャルロットが呟く。無防備の背中を集中攻撃したとはいえ、これまでの福音の暴走からここで終わるとは思えなかった。だが、セカンドシフトまでして再起動したのだ。三度目はあり得ないだろうと誰もが願った。

だが、福音は海からゆっくり浮上してきた。あの過酷な機動にまたついて行かなければならないのかと誰もが思った。軍用とはいえ底

の見えないエネルギー量に気力が打ちのめされそうになる。
「しっつこいわね。でも対処法がわかっていれば大したことないわよ。みんな！」
「鈴さんの言う通りですわ。こちらは七機ですわ」
「みんなの力を合わせればいけるよ」
「ああ、恐れる事など無い」
「よくもワイヤーを……高くつくぞ」
　再三の戦いに備えて各々が鼓舞するが、ジョルジュとクリストフは静かに福音を見つめる。何か嫌な予感がするからだ。福音は海上からフワリと飛ぶと一直線にラウラに向かって飛ぶ。
　ラウラは迫りくる銀の拳をプラズマ手刀で防ぐと反対側の刃で斬りつけようとする。福音はそれをもう片方の手で弾くと、翼を用いたサマーサルトキックで返す。顎を打ち抜かれたラウラはその衝撃も利用して後退する。直ぐに箒が間に入ってカバーする。
　箒が斬撃を入れようとしたところ、福音は僅かに下がると急加速した。
「なっ!?　がはっ!?」
　瞬間加速に匹敵する加速と衝撃を受けた箒は素早く体勢を立て直し構えるが、福音は箒を無視してまだ砲撃距離まで後退していないラウラに向かう。箒は福音の行動に狼狽する。これまでは誰かが間に入ればターゲットをその者に変更して戦ってきた福音がここにきてオペレーションを変えてきたのだ。
「くっ！」
　ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンは砲戦パッケージをインストールしており、普段より大型なレールカノンは近接戦では邪魔になる。その上、ワイヤーブレードも失っている。普段より近接適性が落ちたラウラは仲間の援護まで耐えられるかわからない。
「よう」
　一人、間に合った。ＯＢに加え連続ＱＢで距離を詰めたジョルジュはプラズマライフルのＥＣＭとフレアのかく乱で福音からラウラの存在を消す。

「誰か一人を狙うなら、俺が相手してやる」
「――!?」
左腕のドラスレを閃かせて福音の頭部を斬り落とさんと振るう。福音はエネルギーの翼で受け止め、別の翼から拡散レーザーを至近距離で黒い機体に浴びせる。ジョルジュは一度距離を取るべくバックブースターを吹かしたが、福音はジョルジュの右腕を掴みＳＡＭＳＡＲＡを握りつぶす。
ジョルジュは使い物にならないと断じたＳＡＭＳＡＲＡをパージすると軽くなった右腕で壊れたＳＡＭＳＡＲＡを握る福音の手を払った。そしてがら空きになった福音の胴にドラスレを突き立てる。
これまでの戦闘で何度か接近戦をしてきた箒や鈴、シャルロットでもここまでの深手を福音に与えていない。ジョルジュは不気味な変化を肌で感じるが、深く突いたエネルギーの刃を更に押し込まんと腕を押し込む。どんな意図だろうと向こうが壊れてくれるのだから、それに越したことは無い。
「――!!」
「は？」
だが、この福音の行動は流石に驚いた。両腕を伸ばしたかと思いきや肩に付いている０５１ＡＮＡＭを握り潰しに来たのだ。ＡＭＳを経由して使用不可になったとわかる。
何をやっている？　このままだとドラスレがその体を貫通するぞ？　コアの位置はわからないが、この下にあるなら破壊するとお前は止まるのだぞ？
単純な疑問が何度も頭の中を駆け巡るが、ジョルジュは腕を止めない。
早く、早く、早く終わってしまえ。お前たち（無人機）なんかと、かたづらうのは嫌だと思っているのにこの様だ。福音（おまえ）のしつこさは十分わかったから。どうかもう壊れてくれないか。ジョルジュは今それのみを願っている。
だから、福音がエネルギーの翼を繭のようにして自らとジョルジュを包んでいくのも無視して刃を押し込む。

「ジョルジュ!?　逃げろ!!」
ラウラが叫んだ時には遅かった。銀と黒の二機を包み込んだ繭はその内側で無数のレーザーを放ち、中にいた機体をズタズタにする。繭が開かれジュスティスは海に落ち大きな飛沫をあげた。

とある基地にて大勢の整備員が慌ただしく働きながら潜水艦を迎える。無事な入港は勿論だが組織の重役が勢ぞろいしているからだ。作業の邪魔にならないところで、ワインを飲んでいたり、リンゴを丸齧りしていたり、日本のお菓子を食べていたり、咳を零したりしながら潜水艦を待っていた。
やがて潜水艦から待ち人が、この組織で最も身分の高い人物が降りてくる。整備員は一通りの作業を終えると規律よく整列する。重役の面々が人で出来た道を通って待ち人を出迎える。
「諸君。出迎えに感謝する」
「待ちわびたぞ団長。あんたがいなければ始められない」
「その通り。ワシらもいつまで生きていられるかわからんのでな」
「そうだぜー！　チマチマ潰すよりでっかくドッカーン！　と、やっちまった方がわかり易いぜ！」
「声がデカいぞ馬鹿」
「まぁこれまでの潜伏期間では私と彼しか大掃除をしてこなかったからな」
「……」
「相変わらず無口ですねぇ」
「……恐らく、お前の事を言った訳ではないぞ」
「応……」
九人のリンクスがそれぞれ団長の帰還を喜ぶのを聞き流しながら当人は腹心と並んで歩く。
「それにしても、アメリカ・イスラエル共同開発の無人ＩＳが突如暴

走。近くの基地にいたリンクスに迎撃要請が出されるも返り討ち。手負いの無人機はＩＳ学園の専用機持ちが対応……か。やりすぎじゃないか？」
「よく言う。これでも手間がかかったのだぞ」
「すまんな。お前には苦労をかける」
「……まぁいい、これでやっと最初に戻れたんだ。そろそろ時期もある。クローズ・プラン第二段階を始めよう」
「やはり、そんな時期か……」
「ああ、オータムが言っていた。そろそろ奴らも動きだすと」
「わかった。だが、少しだけ猶予をくれ」
「候補者か……」
「ああ、もう少し状況を教えてやらんと潰れてしまうかもしれん」
「確かに。二次選考ではもう何人か脱落している。だが、奴らが動くのに手を拱いては……」
「わかっている。だから奴一人に動いてもらう」
「フン。あの問題児にか……それで本当に猶予になるかわからないじゃないか。まぁいいだろう」
腹心の承諾を得て男は嬉しそうに口元を歪めた。

「ジョルジュ!?」
「待て。狙われているぞ！」
福音の新技を受けて落ちたジョルジュを助けようとシャルロットは海面に飛び込もうとするが、福音は彼女を狙って収束レーザーを撃つ。
「くっ!?　うわあああっ!?」
箒の注意を受けてガーデン・カーテンを展開し防ごうとするが、拡散は防げても威力特化なレーザーには破られて彼女も海に落ちた。
二人やられた。全員の動揺が戦場に広がる。次に福音がターゲッ

トにしたのは鈴だ。
「こ、このっ！」
拡散レーザーの弾幕を広げながら近づいてくる福音に鈴も崩山で対抗するが、火力が足りず止まらない。少しでも福音の動きを止めようとラウラはレールカノンをセシリアはスターダスト・シューターを撃つが、福音は止まることなく鈴に近づくとエネルギーの翼を広げ、繭のように包む。光が弾け三機目が落ちる。
「ち、近づけるな。捕まったら終わりだと思え！」
ラウラが叫びながら砲撃を続ける。次に狙われているのは彼女だからだ。ラウラは可能な限りの速度で逃げながら仲間の位置を確認する。ロジックパターンを利用した作戦を思いつき、箒のいる方向に向かって飛ぶ。箒もラウラの意図をくみ取り、合流すべく飛び出す。セシリアはその間も休むことなく狙撃を続ける。
「頼む！」
「応！」
ラウラと箒が交差する瞬間、箒は二振りの刀を振るう。福音がそこまで迫っていたからだ。斬撃は福音の交差した腕を浅く裂いたくらいだが反撃の手ができた。素早く離脱した箒は次のラウラの誘導を待ったが、福音はセシリアに向かって飛ぶ。
「馬鹿な!?　セシリア逃げろ！」
「わかっていましてよ！」
パターンの変更に狼狽えつつも、セシリアは銃撃しながら福音の接近を拒む。強襲パッケージをインストールしたブルー・ティアーズは速度なら福音に負けはしない。相手がラウラから福音に変わっただけと箒は備えるが、福音は速度を落とし収束レーザーを放った。
「あああああぁぁっ!?」
「ラウラさん!?」
その先にはラウラがいた。速度が遅いのにシールドも序盤で使い切ってしまった彼女は高威力のレーザーを受けてしまい撃墜される。
「気を付けろセシリア！」
「しまっ……!?」

ラウラの撃墜により気を取られたセシリアの元に福音が向かい。青い機体をその翼の中に囲い光が弾けた。
「おのれぇぇっ！」
箒は福音に突撃し二刀で福音を斬りつけるが、両腕でそれぞれ彼女の腕を掴むとエネルギーの翼を広げる。
箒は拘束を解こうともがくが、簡単には解放されそうにはない。攻撃しようにも腕を掴まれて刀を封じられている。だが、紅椿の武装は刀だけではない。彼女の姉が言っていた。展開装甲は攻撃・防御・機動にも使えると。そして全身に装備されているとも。ならばできないことは無い。
「この程度おおおっ!!」
「――!?」
足の展開装甲をブレードモードにして振り上げる。その一撃で福音の翼を一枚削ぎ落とし、振りほどくことができた。だが、残りの翼は既に箒を包んでいた。
間に合わない。箒が目を瞑った時に、青緑色の光が弾けた。
「５０％コジマァァッ!!」
「――!?」
クリストフは箒が斬った物とは別の翼をコジマライフルで吹き飛ばし、その隙間に己の体を押し込む。そして中にいた少女の腕を掴むとＱＴ。先ほどジョルジュが福音に対してやったことを真逆な事をした。
ジョルジュは敵を海（しち）に、クリストフは味方を空（せいち）へ、同じことは位置を入れ替える事だけ。箒は投げ出された浮遊感をＰＩＣで立て直す。そして一瞬こちらを振り返ったランスタンのヘッドパーツからは表情が見えないが、彼がやろうとしたことを察して叫ぶ。
「クリストフ……!?」
「後は、頼んだぜ……」
翼が足りないため不完全に閉じた繭の隙間から光が漏れる。繭が開かれた時には箒に代わって全方位からのレーザーを受けたアルビートルが零れた。

遂に一人になった。全員でかかってもここまで追いつめられているのに単機でどれだけの事ができよう。箒は自問するが下らないと吐き捨てて、両手の刀を見下ろす。武器はある。機体は動く。気力は疲れてはいるが、尽きてはいない。

「戦かえる……」

戦って勝って、みんなで帰る。出発前にそうみんなで誓った。終わったら一夏に会いに行こうと。みんなは強い。あの程度の攻撃で斃れるはずがない。だから、それまで自分だけでも。

「戦ってみせる。たとえ私一人でも……」

そこに一人分の声が割り込んだ。

「一人じゃないぜ」

背後から聞こえた声。箒は振り返る。そこには白色の機体を身に纏った。会いたい人物だった。